

苫小牧市 有珠川7遺跡

－樽前山火山砂防工事の内有珠川遊砂地流木止工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－

令和5年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

苫小牧市 有珠川7遺跡

－樽前山火山砂防工事の内有珠川遊砂地流木止工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－

令和5年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



遺跡遠景 NW → SE



調査区と樽前山 E → W

口絵2



平成元年試掘トレンチ土層断面 (LiDAR スキャナ取得データ) S → N



平成元年試掘トレンチ土層断面 (LiDAR スキャナ取得データ) N → S



基本土層 (ハ3 杭付近) NW → SE



基本土層 (G13 区) W → E



基本土層 (H10 区) S → N



基本土層 (I17 区) SE → NW



H-1 遺物出土状況 SW → NE



H-2 調査状況 W → E

口絵4



F-1 検出状況 N→S



SF-1 検出作業 NE→SW



PS-1 検出状況 N→S



HO-1 検出作業 N→S



48

49

石製品

例 言

1. 本書は、北海道開発局室蘭開発建設部苫小牧市河川事務所が行う、樽前山火山砂防工事の内有珠川遊砂地流木止工事に伴い、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが令和5（2023）年度に実施した、苫小牧市有珠川7遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書（『苫小牧市 有珠川7遺跡』北埋調報379）である。
2. 令和6（2024）年に当センターが刊行した『調査年報36』で報告した内容よりも、本報告書記載の内容が優先する。
3. 本書の執筆は、末光正卓・吉田裕吏洋が分担し文責は各項目の末尾に括弧で記した。編集は末光が行った。
4. 現場の写真と報告書掲載遺物は吉田が撮影した。
5. 放射性炭素年代測定と黒曜石製石器の産地推定は、株式会社パレオ・ラボに依頼した。
6. 調査・報告にあたり、下記の諸機関及び各氏から御指導・御協力をいただいた。

（所属は当時・順不同・敬称略）

北海道教育庁生涯学習推進局 文化財・博物館課

苫小牧市教育委員会 有珠の沢町内会 有珠の沢総合福祉会館 苫小牧縄文会

苫小牧市美術博物館（苫小牧市埋蔵文化財調査センター） 藤原誠 岩波連 岡本直樹

元苫小牧市教育委員会 赤石慎三

苫小牧市議会議員 嶋中康晴

苫小牧縄文会 矢野嘉一 安藝優香

有珠の沢町内会 上原毅

日本工営株式会社 松井昭

記号等の説明

1. 確認した遺構は下記の略号を用い、連番を付し本文及び図表中に用いた。

H：住居跡 P：土坑 SF：石組炉 F：焼土
PS：土器集中 HO：掘り上げ土

2. 遺構図面等の縮尺

住居跡：40分の1 土坑：40分の1 石組炉：20分の1 焼土：40分の1
土器集中：40分の1 掘り上げ土：40分の1
地形測量図・遺構位置図：400分の1
各図にスケールと方位記号（座標北）を付した。
遺構平面図の「+（十字）と文字列」はグリッドの名称である。
遺構平面図等の「・（ドット）と数値」はその地点の標高（m）を示す。

3. 遺物図の縮尺は次のとおりでスケールを付した。

復原土器：4分の1 破片土器：3分の1
剥片石器：2分の1 礫石器：3分の1（大型のものは4分の1）
石製品：2分の1

4. 本文及び図表中で遺構の規模は次の要領で表記した。（丸括弧）は一部破壊されているもの等について、現存する計測値を示す。

掘り込みのある遺構：

確認面の長径×短径／床面・坑底面の長径×短径／確認面からの最大深（m）

平面的な遺構：

範囲の長径×短径／確認面からの最大深（m）

目 次

口絵	
例言	
記号等の説明	
目次	
図目次	
表目次	
写真図版目次	

I 章 緒 言

1. 調査要項	1
2. 調査体制	1
3. 調査の経緯	1
(1) 樽前山火山砂防工事の内有珠川遊砂地流木止工事	
(2) 苫小牧市教育委員会の調査	
(3) 包蔵地試掘調査の概要	
(4) 発掘調査の経過	
4. 調査成果の概要	3

II 章 遺跡の立地と周辺的环境

1. 立地と環境	5
2. 遺跡の周辺	5
3. 旧版図	6
(1) 明治年間	
(2) 大正年間	

III 章 調査の概要

1. 発掘区の設定	9
2. 基本土層	12
3. 調査の方法	12
4. 整理の方法	19
(1) 一次整理の方法	
(2) 二次整理の方法	
5. 写真撮影	20
6. 遺物の分類基準	20

IV 章 第II 黒色土層 (VI層) の遺構と出土遺物

1. 遺構の概要	23
2. 竪穴住居跡	23
H-1 H-2 H-3	

3. 土坑	30
P-1 P-2	
4. 石組炉	33
SF-1	
5. 焼土	33
F-1	
6. 土器集中	33
PS-1 PS-2 PS-3 PS-4	
7. 掘り上げ土	36
HO-1	
8. 遺構出土の遺物	36
(1) 復原土器	
(2) 破片土器	
(3) 剥片石器	
(4) 礫石器・石製品	
V章 第Ⅱ黒色土層（Ⅵ層）の出土遺物	
1. 包含層出土遺物の概要	47
2. 土器	47
(1) 復原土器	
(2) 破片土器	
3. 石器	53
(1) 剥片石器	
(2) 礫石器	
(3) 石製品	
Ⅵ章 第Ⅲ黒色土層（Ⅹ層）の調査	
1. 調査の概要	65
Ⅶ章 結 語	
1. まとめ	67
(1) 分析結果の評価	
(2) 今回の調査のまとめ	
2. 平成元（1989）年の試掘調査の概要	68
付篇	
1. 有珠川7遺跡の放射性炭素年代測定	71
2. 有珠川7遺跡出土の黒曜石石器の産地推定	73
写真図版	
引用参考文献	
報告書抄録	

図 目 次

図1	遺跡の位置	2	図18	F-1・SF-1・PS-1	34
図2	遺跡周辺の状況(明治・大正)	7	図19	PS-2・PS-3・PS-4・HO-1	35
図3	現況図(工事図面)	10	図20	遺構出土の土器(1)	37
図4	グリッド設定図	11	図21	遺構出土の土器(2)	38
図5	範囲杭山柱状図	14	図22	遺構出土の石器	40
図6	F・G・Hライン東西方向杭山柱状図	15	図23	遺物出土分布図(1)	48
図7	I・Jライン東西方向杭山柱状図	16	図24	遺物出土分布図(2)	49
図8	基本土層図	16	図25	遺物出土分布図(3)	50
図9	Kライン東西方向・ 21~17ライン南北方向杭山柱状図	17	図26	包含層出土の土器(1)	51
図10	16~8ライン南北方向杭山柱状図	18	図27	包含層出土の土器(2)	52
図11	最終面(VI・VII層)地形測量図	24	図28	包含層出土の土器(3)	54
図12	第II黒色土層(VI層)上面 地形測量図・遺構位置図	25	図29	包含層出土の石器(1)	54
図13	H-1・P-2(1)	26	図30	包含層出土の石器(2)	56
図14	H-1・P-2(2)	27	図31	包含層出土の石器(3)	57
図15	H-2・P-1(1)	29	図32	包含層出土の石器(4)	58
図16	H-2・P-1(2)	31	図33	包含層出土の石器(5)	59
図17	H-2(3)・H-3	32	図34	第III黒色土層(X層)地形測量図	66
			図35	平成年間の試掘調査の遺構図(1)	69
			図36	平成年間の試掘調査の遺構図(2)	70

表 目 次

表1	遺構数一覧表	4	表22	PS-1出土復原土器観察表	44
表2	遺物点数一覧表	4	表23	PS-2出土復原土器観察表	44
表3	有珠川流域の遺跡一覧表	8	表24	PS-4出土復原土器観察表	44
表4	発掘調査基準点一覧表	9	表25	遺構出土破片土器観察表	45
表5	基本土層	13	表26	遺構出土石器観察表	46
表6	土器時期分類基準	21	表27	SF-1出土石器観察表	46
表7	土器部位分類基準	21	表28	包含層出土土器点数表	60
表8	土器残存状態分類基準	21	表29	包含層出土剥片石器・石製品点数表	60
表9	石器器種分類基準	21	表30	包含層出土礫石器・レキ点数表	61
表10	石器残存状態分類基準	21	表31	H-11区出土復原土器観察表	62
表11	岩石分類体系表	22	表32	K-9区出土復原土器観察表	62
表12	岩石(石材)の略号	22	表33	I-10区出土復原土器観察表	62
表13	竪穴住居跡一覧表	41	表34	H-15区出土復原土器観察表	62
表14	竪穴住居跡付属遺構一覧表	41	表35	K-9区出土復原土器観察表(2)	62
表15	遺構一覧表	41	表36	I-10区出土復原土器観察表(2)	62
表16	遺物集中一覧表	41	表37	包含層出土破片土器観察表	63
表17	竪穴住居跡出土土器点数表	42	表38	包含層出土石器観察表	64
表18	石組炉・焼土・土器集中出土土器点数表	42	表39	包含層出土片麻岩レキ(写真のみ)観察表	64
表19	竪穴住居跡出土石器点数表	43	表40	X層(III B層)調査出土レキ(写真のみ)観察表	65
表20	石組炉・焼土・土器集中出土石器点数表	43	表41	黒曜石原産地分析試料一覧表	67
表21	H-2出土復原土器観察表	44	表42	平成年間の試掘調査の成果	69

写真図版目次

口絵1

遺跡遠景 NW→SE
調査区と樽前山 E→W

口絵2

平成元年試掘トレンチ土層断面(LiDARスキャナ取得データ) S→N
平成元年試掘トレンチ土層断面(LiDARスキャナ取得データ) N→S
基本土層(ハ3杭付近) NW→SE
基本土層(G13区) W→E
基本土層(H10区) S→N
基本土層(I17区) SE→NW

口絵3

H-1 遺物出土状況 SW→NE
H-2 調査状況 W→E

口絵4

F-1 検出状況 N→S
SF-1 検出作業 NE→SW
PS-1 検出状況 N→S
HO-1 検出作業 N→S
石製品

図版1 調査に関わる整備及び、調査区と周辺の環境

重機による表土除去作業 NW→SE
沈殿槽設置状況 SE→NW
調査区全景 俯瞰
カマ場設置状況 E→N
調査区と有珠川 NE→SW
平成元年試掘トレンチ NW→SE

図版2 遺構の調査(1)

H-1 土層断面 N→S
H-1 土層断面 S→N
H-1 土層断面 NE→SW
H-1 調査状況 SW→NE
H-1 調査状況 SW→NE

図版3 遺構の調査(2)

H-1 調査状況 SE→NW
H-1 掘り上げ土検出状況 S→N
H-1 sp-1 土層断面 NE→SW
H-1 遺物出土状況 SE→NW
H-1 sp-1 完掘 NE→SW

図版4 遺構の調査(3)

H-2 土層断面 SW→NE
H-2 土層断面 NW→SE
H-2 土層断面 SW→NE
H-2 掘り上げ土土層断面 NW→SE
H-2 遺物出土状況 N→S
H-2 sp-1(左)・2(右)土層断面 SW→NE
H-2 sp-12土層断面 S→N

図版5 遺構の調査(4)

H-2 sp-3土層断面 S→N
H-2 sp-9・10・11(左から)完掘 NE→SW
H-3 検出作業 E→W
H-3 調査状況 E→W
H-3 土層断面 E→W
H-3 遺物出土状況 E→W

H-3 hf-1土層断面 E→W

図版6 遺構の調査(5)

P-1 土層断面 N→S
P-1 完掘 NW→SE
P-2 土層断面 SE→NW
P-2 完掘 SE→NW
SF-1 検出状況 SE→NW
SF-1 検出状況(LiDARスキャナ取得データ) 俯瞰
SF-1 土層断面 E→W
F-1 検出状況 N→S

図版7 遺構の調査(6)

PS-1 検出状況 N→S
PS-2 検出状況 SE→NW
PS-3 検出状況 SE→NW
PS-4 検出状況 N→S
HO-1 検出状況 W→E
HO-1 土層断面 W→E

図版8 第II黒色土層(VI層)の調査(1)

東側調査状況 NE→SW
西側調査状況 NW→SE
中央部調査状況 SW→NE
中央部調査状況 NE→SW
調査状況 俯瞰
西側調査状況 SE→NW

図版9 第II黒色土層(VI層)の調査(2)

遺構確認調査 NE→SW
豪雨翌日の冠水状況 W→E
火山弾検出層位 S→N
火山弾検出作業 N→S
土器出土状況 W→E
土器出土状況 W→E
石製品出土状況 N→S
石製品出土状況 NE→SW

図版10 第III黒色土層(X層)の調査・調査完了状況

X層調査区設定状況 SE→NW
調査状況 E→W
調査状況 SW→NE
礫出土状況 SW→NE
礫出土状況 SW→NE
調査完了状況 S→N

図版11 遺構出土の土器(1)

図版12 遺構出土の土器(2)

遺構出土の石器

図版13 包含層出土の土器(1)

図版14 包含層出土の土器(2)

包含層出土の石器(1)

図版15 包含層出土の石器(2)

図版16 包含層出土の石製品

SF-1 出土の礫
黒曜石原産地分析試料
包含層出土の礫(片麻岩)
第III黒色土層(X層)出土の礫

I 章 緒 言

1. 調査要項

事業名：樽前山火山砂防工事の内有珠川遊砂地流木止工事に伴う埋蔵文化財調査
委託者：北海道開発局室蘭開発建設部苫小牧河川事務所
調査期間：令和5年4月1日～令和6年3月31日（現地調査 令和5年8月2日～10月26日）
遺跡名：有珠川7遺跡（J-02-204）
所在地：苫小牧市高丘56番548
調査面積：1,890㎡（当初 1,790㎡）

2. 調査体制

令和5（2023）年度

第1調査部長 鈴木信（常務理事兼務）

第2調査部長 村田大

第2調査部第1調査課 課長 鈴木宏行

主査 末光正卓（発掘担当者）

主査 吉田裕吏洋（発掘担当者）

3. 調査の経緯

（1）樽前山火山砂防工事の内有珠川遊砂地流木止工事

樽前山火山砂防事業は、樽前山の噴火時に発生する火山泥流や大雨による土石流による災害を防止する目的で、樽前山の山間部から流れ出る河川に砂防えん堤や遊砂地などの防災施設を造る工事である。平成6（1994）年度から実施されており、河川ごとに述べると「苫小牧川」に苫小牧川遊砂地、その支流の「有珠川」に有珠川砂防えん堤、「小泉の沢川」に小泉の沢川1号砂防えん堤と小泉の沢川遊砂地、「小糸魚川」に小糸魚川砂防えん堤と小糸魚川遊砂地、「錦多峰川」に錦多峰川2号遊砂地、「覚生（おぼっぷ）川」には、覚生川1・2・3号砂防えん堤と覚生川3号遊砂地、その支流の「熊の沢川」には熊の沢川2・3号砂防えん堤が完成または工事中である。砂防えん堤とは、山間部の流路（溪流）に堤防を設けたもので、目的は土石流を食い止めること、土砂をためて川の流れをゆるやかにすること、大雨後に多量の土砂が流れ出ないようにすることなどである。遊砂地とは、砂防施設で止めた土砂をためておく場所である。流木止とは、災害時など遊砂地に流れ込んだ流木を止めるため、複数の棒状構造物を連結させた施設である。これまで本事業で発掘調査された遺跡は、平成19（2007）年の有珠川5遺跡、平成29（2017）・30（2018）年の覚生1・2遺跡で、いずれも苫小牧市教育委員会が実施した。今回の調査は、既存の有珠川砂防えん堤から上流へ約400mの地点に流木止施設を造る工事に伴うもので、周知の遺跡である有珠川7遺跡を当センターが発掘調査した。

（2）苫小牧市教育委員会の調査

有珠川上流域の苫小牧市教育委員会の調査について概観する。平成年間には有珠川上流域で、工事名「零フレイバー開発」と仮称されたゴルフ場建設が計画され、これに伴い平成元（1989）年10月17日～31日、有珠川の両岸、字高丘・糸井の79,024㎡を第Ⅲ黑色土層までを対象として試掘調査が実施された（苫小牧市教委 1989）。この時、有珠川4～9遺跡が発見され、同7遺跡は所在地番：高丘56



図1 遺跡の位置

－ 1、面積：19,200㎡で、確認された遺構は、試掘坑23で土坑1基、試掘坑27で竪穴住居跡2軒、土坑1基、柱穴2か所、焼土2か所である。後者の試掘坑は今回の調査区内に位置する。遺物は、土器56点（小破片を除く）、石器5点、剥片4点、削片3点、礫17点である。土器は縄文時代中期・晩期で、多くが前者である。石器は磨製石斧と敲石である（Ⅶ章2節）。

平成19（2007）年5月10日～7月14日、有珠川砂防えん堤建設と付け替え道路工事に伴い、有珠川5遺跡222㎡が緊急発掘調査され、平成20（2008）年3月末に調査報告書が刊行された（苫小牧市教委 2008）。同書によると、有珠川7遺跡は同5遺跡の北約80m、西に張り出した標高20～27mの台地先端部に立地し、平成元（1989）・18（2006）年の試掘調査で、縄文時代中～晩期の土器など約100点がみつき、竪穴住居跡2軒、土坑1基、焼土跡2基が検出され、3B層より礫が1点出土しているとある（前掲書 7頁本文・10頁第6図）。

（3）包蔵地試掘調査の概要

北海道教育委員会（以下、道教委）による包蔵地試掘調査が、令和4（2022）年2月24・25日に行われた。試掘坑のうち4か所から縄文時代中期・後期の土器、剥片、礫片が出土し、発掘調査が必要な面積は暫定で1,880㎡とされた。また、調査区内に平成元（1989）年の試掘坑の存在が確認された。

（4）発掘調査の経過

発掘調査は令和5（2023）年8～10月に第2調査部第1調査課が担当した。発掘調査区内の湧水対策は事業者側で行うこととなった。調査区の周囲に矢板を打ち込んで囲うもので、6月末には設置が完了した。7月に重機による表土除去作業が開始されたが、調査対象であるⅥ層の第Ⅱ黒色土層は現地表面から3m下であった。深さ2.5m以下を目安に、Ⅴ層の樽前cテフラ層より上位は事業者側で進めて、これより下位は当センターの職員が立会し、7月中に完了させた。8月から人力調査を開始したが、今季は猛暑日や雨天も多く、調査開始当初から作業量の大幅な減少が懸念されたので、遺物が少ない場所は重機による遺構確認を併用するなど調査方法を工夫し、10月末に完了させた。また9月20日（水）には苫小牧市美術館と共催で遺跡説明会を実施し、43名の苫小牧市民が参加した。さらに10月20日（金）の苫小牧民報で本遺跡の発掘調査が報道された。11月からは報告書作成のための二次整理作業を開始し、同年度末に本報告書（北埋調報379）を刊行する。また、令和5（2023）年度当初の調査面積は1,790㎡と示されたが、調査区境界の座標を求め点検計算したところ1,890㎡であった。道教委と協議した結果、調査面積は1,890㎡となり、発掘調査が完了した時点で調査変更届を提出し、その後、事業者と変更契約をした。

4. 調査成果の概要（表1・2）

遺跡はJR室蘭本線苫小牧駅から北西へ約4.6km、有珠川の左岸に位置し、苫小牧川との合流点の「有珠川橋」から上流方向へ直線距離約2.6kmの地点である。調査区内は東西方向に長い尾根地形で、南北両側は緩斜面である。東側は標高20m以上の緩やかな斜面につながり、西側は有珠川の方にのび、先端部に現地表面の標高21mの狭い地点がある。ここに、平成元（1989）年の試掘調査で、竪穴住居跡等複数の遺構が発見された試掘坑27が位置し、Ⅹ層の第Ⅲ黒色土層も確認された。本年度調査におけるこれら遺構の呼称は、竪穴住居跡は西側の1号住居跡をH-1、東側の2号住居跡をH-2、土坑をP-1、H-2の柱穴は、向かって左側（東側）をsp-1、右側（西側）をsp-2とした。なお、焼土2か所はこの坑を重機で掘り上げた後、壁が崩落したため確認できなかった。

遺構は竪穴住居跡3軒、土坑2軒、石組炉跡1か所、焼土1か所、土器集中4か所、掘り上げ土1か所である。遺構はすべて縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。竪穴住居跡は試掘坑27の付近、

西側先端部の台地付近に集中する。H-1は長径4mほどで概ね円形、西側に掘り上げ土もみつかった。H-2は部分的な壁が複数か所みられたもので、斜面の同じ場所に何回か建て替えられたため、壁はほとんど残存しないと推測する。H-3は直径2.6mの小型で台地の北側斜面に位置する。これら住居跡は近接するので、同時期に存在したとは考え難い。土坑は楕円形の浅いもので住居跡の近くに位置し、P-1がH-2に、P-2がH-1に関連すると推測する。石組炉SF-1は「コ」の字状に礫を配したもので、焼土F-1は調査区の東側でみられた。土器集中は、PS-1・2・4は調査区東側の緩斜面に位置し、PS-1・4は北側、PS-2は南側である。PS-3は中央付近の尾根上でみつかった。掘り上げ土HO-1は東側の調査区際でみつきり、近くに掘り込んで構築された遺構はみつからなかった。

遺物は土器3,137点、石器2,292点で、多くがVI層（第II黒色土層）出土で、概して東側に多く西側は少ない。土器の主たる時期は縄文時代中期末葉から後期初頭で、中期の天神山式、ノダツプⅡ式、後期の余市式、タブコブ式などがあり、晩期もごく少量ある。剥片石器は黒曜石製が多く、器種は石鏃、石槍・ナイフ、スクレイパーである。礫石器は磨製石斧、たたき石、すり石、石錘、砥石、台石がある。最も多いのは、使用により剥離した磨製石斧の破片である。石製品は、丁寧な研磨と敲打痕が施されて両側を破損する石棒の柄の部分と、多頭石斧（環状石斧）と呼称した、周縁を打ち欠き、中央に穿孔途中の孔のようなくぼみを有する扁平で円形のものが出土した。レキ（自然礫）は片麻岩が多いが、これらは有色鉱物を多量に含むため比して重く、表面は磨耗または風化しているので、水中で使用されたと考えられ、漁労用の網の錘と推測する。

また、試掘坑27で、IX層の樽前d2テフラ下位のX層（第III黒色土層）が確認されたことに加え、近傍の有珠川2・5遺跡の発掘調査では「有珠川2式」の型式名で知られる縄文時代早期前半、I群a類の貝殻文土器の遺構・遺物がみつかり、X層を調査する必要性を感じた。当初の調査計画にはなかったが、重機を活用する等調査方法を工夫し、尾根状の高い部分325m²について人力で発掘調査した。しかし、確証のあるものは出土しなかった。（末光正卓）

表1 遺構数一覧表

種別	記号	数	名称
竪穴住居跡	H	3軒	H-1・2・3
土坑	P	2基	P-1・2
石組炉	SF	1か所	SF-1
焼土	F	1か所	F-1
土器集中	PS	4か所	PS-1・2・3・4
掘り上げ土	HO	1か所	HO-1

表2 遺物点数一覧表

出土地点 ／遺物種別	土器	石器	合計	備考
遺構	253	159	412	
包含層	2,884	2,133	5,017	
合計	3,137	2,292	5,429	

Ⅱ章 遺跡の立地と周辺環境

1. 立地と環境 (図1)

北海道苫小牧市は胆振管内の中央、石狩低地帯の南側に位置する。南に太平洋を臨む苫小牧市の東側は厚真町、安平町と接し、北側は石狩管内の千歳市、西側は白老郡白老町である。行政界を東側から述べると、苫小牧東港近く弁天地区にある厚真火力発電所から、静川地区の苫小牧東部石油備蓄基地・北海道石油協同備蓄基地を通り、両裾部に沼がみられる標高15~20mの低い山地上をたどり、この山地が途絶える場所で西方向に折れて、安平川と遠浅川の合流地点付近に至る。そこからは遠浅川が境界となって北上し、美沢地区のノーザンホースパーク付近でさらに西へ曲がる。美々川と交差し、新千歳空港付近では同川右岸の支流の美沢川が境である。航空自衛隊千歳飛行場の滑走路の南縁、道央自動車道の新千歳空港インターチェンジ、千歳市泉沢光陽台の文京6丁目付近で南西方向に転じ、丸山地区に至る。西方向に流れる植苗川、勇払川、勇振川、丸山川の左岸の山地につながり、支笏湖の東側、無名の山頂(標高478m)で南に向かい、モラップ山(標高506.4m)の山頂、苫小牧市のランドマークである樽前山(標高1041m)の北側をまわり、この付近は樽前地区である。行政界は同山の西に延びる尾根上に少し進んで南に折れ、別々川に合流する上流部の谷沿いに続く。そこから同河川の本流沿いに太平洋まで続く。

JR室蘭本線の苫小牧駅から東側は、石狩低地帯の南側にあたり、低い平地が広がり勇払平野と呼ばれ、山の標高もさほど高くない。安平川、遠浅川、美々川、勇払川が南北方向に、源流部が支笏湖側にある植苗川、勇払川は南東方向に流れる。美々川や勇払川はウトナイ湖に注ぎ、弁天沼などの広い沼地も多くみられ、河川沿いに湿地や原野が形成される。同駅から西側は、樽前山を中心とする山間部、平地との境の裾野部分、市街地が広がる平坦地に分けられる。有珠川を支流とする苫小牧川、小糸魚川、錦多峰川、覚生川、樽前川、別々川が南方向に流れ、太平洋に注いでいる。

2. 遺跡の周辺 (図3)

遺跡は有珠の沢地区の北端から山間部へ約600m地点、有珠川の左岸に位置する。国土地理院の地形図25000に記載がある標高21m地点は、今回の調査区内、西側に位置する尾根の先端部で、かつては山道が二股に分かれる地点であったが、現在は、有珠の沢通から続く改良された砂利道が大きく左カーブする付近である。字名は左岸が「高丘」、右岸が「糸井」である。上流の山間部では有珠川は三つの支流がみられ、「有珠川橋」から直線距離で約4.6km付近に源流部がある。東西を尾根に挟まれた間を直線的に流れ、左岸に有珠川7遺跡が位置する付近では、この尾根間の距離が開き、広い河原を形成している。そこから下流には「有珠川砂防えん堤」があり、道央自動車道と交差して有珠の沢町に入る。ここからは市街地を流れ、豊川町、松風町、見山町、啓北町、桜木町が接する付近、有珠の沢通と道道781号苫小牧環状線の交差点の有珠川橋で苫小牧川と合流する。自動車道と交差する地点からこの有珠川橋までの2.3kmの区間は、苫小牧川水系の2級河川として管理されている。合流地点より下流は苫小牧川の名称で、苫小牧灯台がある地点で太平洋に注いでいる。2級河川の苫小牧川は丸山遠見(標高327.2m)の裾付近に源流部があり、およそ国道276号沿いに流れ、四等三角点「高丘」の西側に造られた水源池を経て、山手町付近で市街にでると西方向へ曲がり、山間部の裾部を流れて、有珠川に合流する。流路延長は12.8kmである。

ところで、苫小牧市は水が豊富で美味なことが有名で、これは樽前山の軽石等の火山噴出物の堆積

層が雨水や雪解け水をろ過するからである。遺跡の側を流れる有珠川も清流として知られ、本遺跡から林道を山間部へ約1km進むと「有珠の沢の湧水」と呼ばれる水汲み場所がある。本遺跡の発掘作業では、飲料水としてこの湧水を利用させてもらった。おいしく冷たい水は、炎天下の調査に従事する私たちの渴きを潤してくれた。

なお、周辺の遺跡については、有珠川上流域の遺跡のみ表3にまとめた。市内の遺跡は紙面の都合で記述できないので、苫小牧市教育委員会や当センター既刊の調査報告書等を参照願いたい。

3. 旧版図 (図2)

(1) 明治年間

図2左は北海道假製五万分一圖(明治29年製版)の「千歳」・「苫小牧」・「樽前山」・「白老」を合成し縮小したものである。有珠川は「マーパオマナイ」(ウスノ沢)とある。標高40mの等高線と交差する付近で、流れが東側に屈曲する地点が現在の有珠の沢町7丁目付近と考えられるので、有珠川7遺跡はここから少し上流であるが、等高線の描写は模式的であるので正確に特定できない。山間部のウスノ沢は、西側の「小糸魚村」との行政界で、東側の左岸は「苫小牧村」である。山地を出た流れは「歌志内より室蘭に至る鉄道」(現在の室蘭本線)と交差する。ウスノ沢の下流部は、「札幌より函館に至る道路」(現在の国道36号)に沿って東西両方向に流れを変えている。西側の流れは途中までの描画で、東側は苫小牧川と合流して、さらに東流して太平洋に注いでいる。苫小牧川の山間部の出口付近は谷間に湿地が広がり、左岸は「ヲテイ子ウシ」と合流する。河川名「トマコマイ」はトー・マコマ・ナイで、沼・後ろにある・川と解され、海岸からみて後ろ、すなわち、内陸にある沼、そこを流れる川を意味するアイヌ語地名である。支流の「ヲテイ子ウシ」は、ヲ・テイネ(子)・ウシで、入る・湿った・多いで、湿った草が多い場所の入り口と解される。「マーパオマナイ」はマーパ=ヌーパ・オマ・ナイで、原野・そこにある・川となり、原野を流れる川の意味である。別名の「ウスノ沢」は、マーパオマナイというアイヌ語地名に併記されていることから、和名と考えられる。ウスとは製粉の道具である「臼」のことで、円柱状で上部の中央がくぼんだ形状を呈する。この形に似た地形は樽前山と考えられ、すなわち、臼の形状を呈する樽前山から流れ出る沢の意味と推測する。

(2) 大正年間

図2右は、五万分一地形圖「千歳」(大正7年測圖)・「苫小牧」(大正8年測圖)・「樽前山」(大正6年測圖)・「白老」(大正8年測圖)を合成し縮小したものである。山間部には「ウスノ沢」が記され和名のみが残った。この名称のすぐ下流の東への屈曲部が、現在の有珠の沢町7丁目付近であり、遺跡の位置はそこから判断した。ウスノ沢沿いの山間部には、道幅半間以上の里道(実線)とさらに山奥には同半間未満(破線)の小径がみられる。一方、下流側は、平地へ流れ出た川の両側に湿地が形成されており、東には苫小牧町の中心部に至る道幅一間以上の里道が、直線と折れ点の線形でみられる。ウスノ沢は室蘭本線を過ぎて、海岸沿いの国道付近で三つの流れに分かれる。東の流れは苫小牧川に、西のものは小糸魚川に、中央のものは国道をくぐってこれ沿いに西へ流れた後、途切れている。国道沿いにある水準点は6.33~6.53mで海岸近くに砂丘により微高地が形成され、これよりも低い内陸部に広く湿地が形成されていた。苫小牧町の中心部には王子製紙会社の分社があり、苫小牧駅の周辺に市街地が形成され、「王子山線機関鉄道」が山間部に続いている。この市街地と山間部の間には大きな沼が複数みられ、苫小牧の地名の語源である「沼が内陸にある場所を流れる川」が地形図で読み取れる。

(末光)

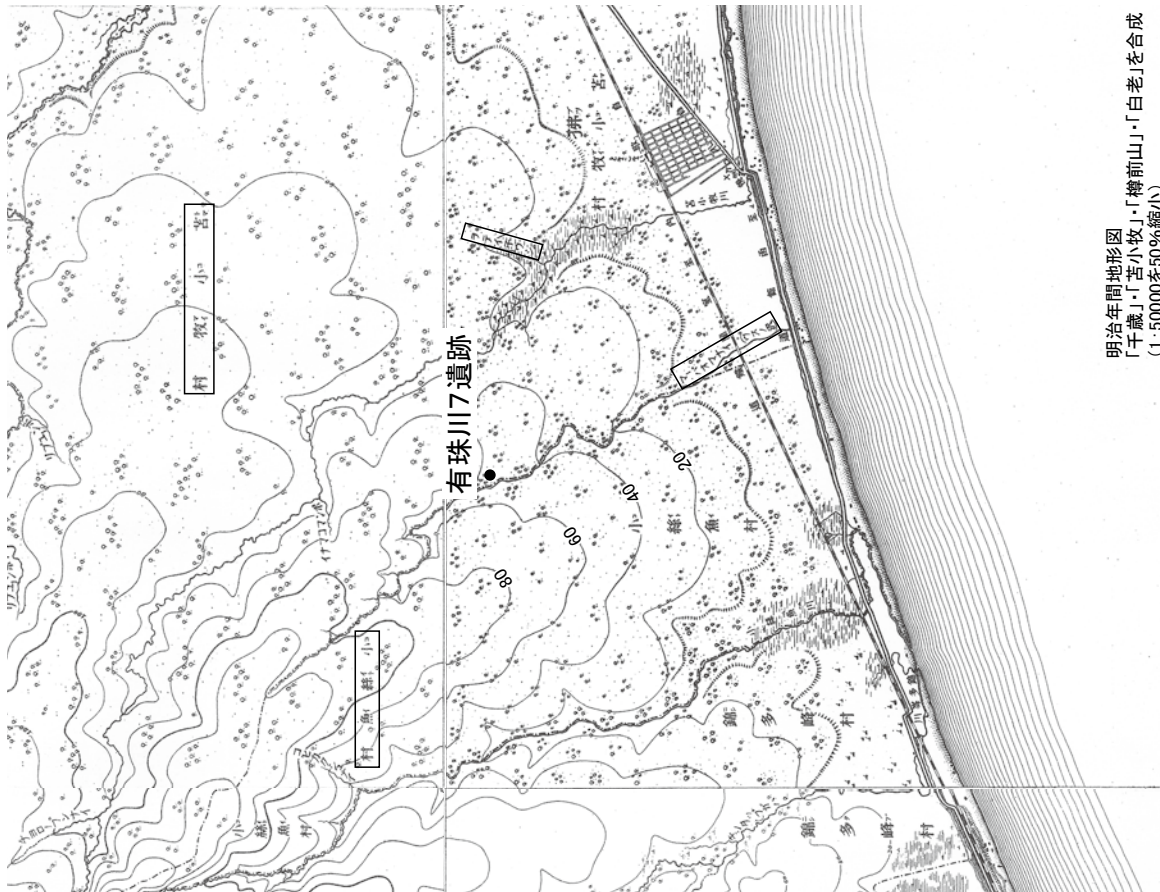
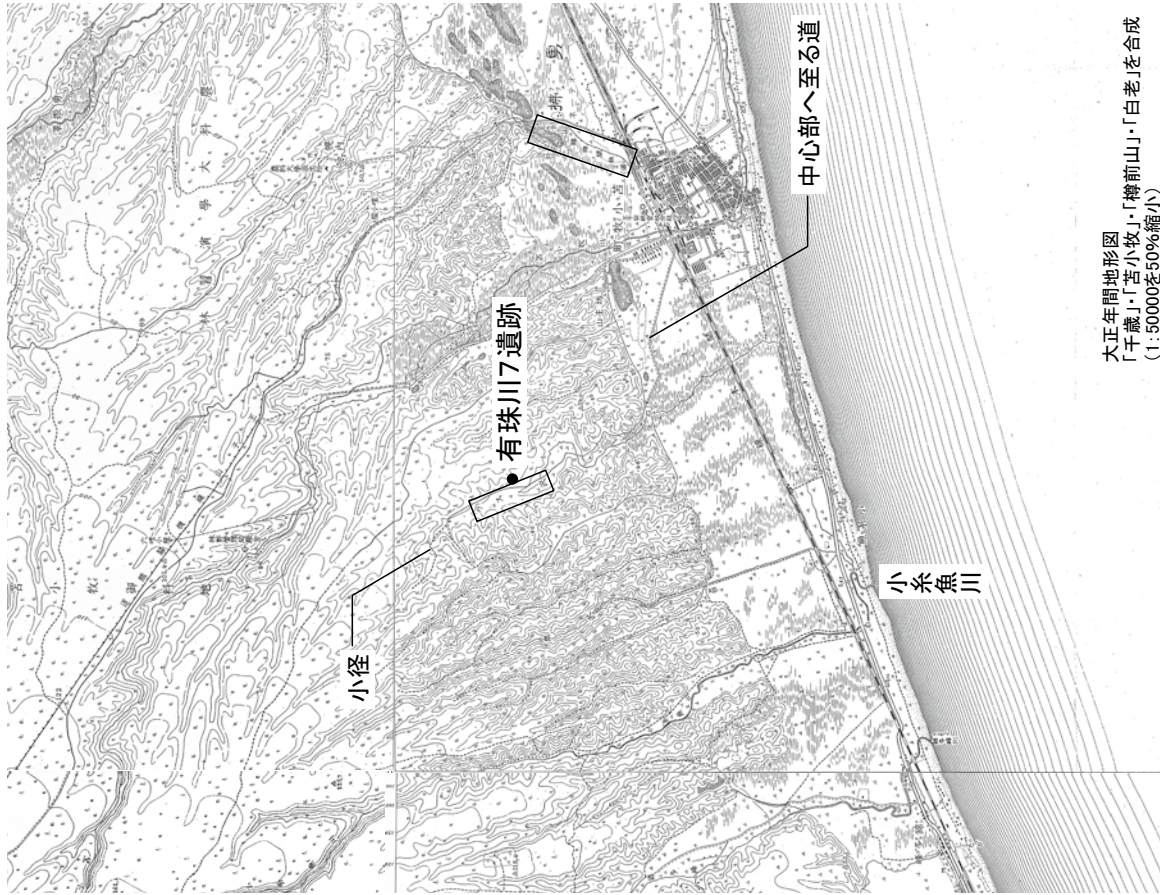


図2 遺跡周辺の状況 (明治・大正)

表3 有珠川流域の遺跡一覧表

登録番号 (J-02)	遺跡名	字名	有珠川	立地	標高 (m)	種別	主な内容							文献記載内容等					発掘調査報告書 文庫	備考
							時代	遺構	復原土器	破片土器	剥片石器	礫石器	その他	発掘調査 年・年度	地区 トレンチ	調査面積 (㎡)	調査者 調査機関			
58 (番号:4)	有珠川遺跡	高丘 松原町	左岸	台地の崖下	不明	不明	縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	『有珠川流域』上巻 1975 『有珠川流域』下巻 1976・1985頁 『有珠川流域』下巻 1976・1985頁 『有珠川流域』下巻 1976・1985頁 『有珠川流域』下巻 1976・1985頁 『有珠川流域』下巻 1976・1985頁 『有珠川流域』下巻 1976・1985頁	有珠川2式の 遺構跡	
							縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		—
58	有珠川1遺跡	高丘 松原町	右岸	不明	不明	不明	縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	『有珠川流域』上巻 1975 『有珠川流域』下巻 1976・1985頁 『有珠川流域』下巻 1976・1985頁 『有珠川流域』下巻 1976・1985頁 『有珠川流域』下巻 1976・1985頁 『有珠川流域』下巻 1976・1985頁	有珠川2式の 遺構跡	
85	有珠川2遺跡	高丘 松原町	左岸	台地	10～23	集落跡	縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	『有珠川2・有珠川3遺跡』 1979		25%調査 の有珠川2式の 遺構跡
188	有珠川3遺跡	高丘 松原町	左岸	台地の傾斜面	15～20	遺物包蔵地	縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	『有珠川2・有珠川3遺跡』 1979	25%調査 の有珠川2式の 遺構跡	
201	有珠川4遺跡	高丘 松原町	左岸	台地	20	溝穴遺構	縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	『有珠川2・有珠川3遺跡』 1979		25%調査 の有珠川2式の 遺構跡
202	有珠川5遺跡	高丘 松原町	左岸	台地	20	溝穴遺構	縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	『有珠川2・有珠川3遺跡』 1979	25%調査 の有珠川2式の 遺構跡	
200	有珠川6遺跡	高丘 松原町	左岸	—	20	遺物包蔵地	縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	『有珠川2・有珠川3遺跡』 1979		25%調査 の有珠川2式の 遺構跡
204	有珠川7遺跡	高丘 松原町	左岸	台地	20	集落跡	縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	『有珠川2・有珠川3遺跡』 1979	25%調査 の有珠川2式の 遺構跡	
205	有珠川8遺跡	高丘 松原町	左岸	—	25～30	溝穴遺構	縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	『有珠川2・有珠川3遺跡』 1979		25%調査 の有珠川2式の 遺構跡
206	有珠川9遺跡	高丘 松原町	右岸	—	25	遺物包蔵地	縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	『有珠川2・有珠川3遺跡』 1979	25%調査 の有珠川2式の 遺構跡	
244	有珠川10遺跡	高丘 松原町	右岸	河川敷	10～11	遺物包蔵地	縄文時代 前期	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	『有珠川2・有珠川3遺跡』 1979		25%調査 の有珠川2式の 遺構跡

Ⅲ章 調査の概要

1. 発掘区の設定 (図3・4 表4)

基図は室蘭開発建設部苫小牧河川事務所から提供された電子図面 (sfc形式) で、名称は「有珠川流木対策施設 標準施工図 (1/2) S = 1 : 500 【第2工区：遺跡発掘調査】」である。調査グリッドは世界測地系の平面直角座標で設定した。苫小牧地域は「第XⅡ系」座標原点の第三象限にあたり、縦方向のX軸、横方向のY軸ともに負になる。調査区からみて平面直角座標の原点が位置する方向である「北東側」の調査区外に「グリッド原点 A-0」を設定し、調査区全体を網羅するように5mごとに区画した。南北方向のX軸は、アルファベットを北から南方向へ昇順 (A→) するようにつし、東西方向のY軸は算用数字で示し、東方向「0」から西方向へと値が大きくなる。各グリッドの呼称も「北東側」の杭名とし、アルファベットと算用数字を列記して表記する。

現地に打設した杭は以下のとおりである。

「範囲杭」(白色)：調査区形状の変化点

「基準杭」(黄色)：グリッド交点 標高をもつ杭で20mごと

「方眼杭」(赤色)：グリッド交点 5m間隔 (基準杭を除く)

これら調査杭の打設は近傍の既設2級基準点「R2-2-3」と「No.5」から、4級基準点T1~6を新設し、これらのうちT2を調査区の東側、T3を西側に配置し、範囲杭、方眼杭、基準杭はこれらから打設した。水準測量は2級基準点「R2-2-3」と近傍の工事用BM (ベンチマーク) を与点とした。また、年度当初に道教委から調査面積1,790㎡が示されたが、CAD図上の求積では1,890㎡であった。念のため事業者から提供された座標値で計算しても同値となるので、当初の1,790㎡は誤りと判明し、発掘調査完了後に調査面積の変更を届けた。

表4 発掘調査基準点一覧表

種類	杭名	世界測地系					備考	
		平面直角座標 (m) XⅡ系		標高 (m)	地理座標 (° - ' - ")			
		X	Y		北緯	東経		
グリッド座標原点	A-0	-149,070.000	-57,700.000					
2級基準点	既設	R2-2-3	-148,985.011	-57,711.835	21.623	42-39-24.1	141-32-45.9	
		No. 5	-149,505.989	-57,617.104	14.829	42-39-07.2	141-32-50.2	
工事BM	既設	R4KBM			22.018			
4級基準点	新設	T2	-149,095.663	-57,734.235	21.432			上記2級基準点を結ぶ T1~6を設置
		T3	-149,104.427	-57,813.509	18.741			
調査区中央付近基準杭		I14	-149,110.000	-57,770.000	18.042	42-39-20.0	141-32-43.4	
範囲杭		H1	-149,092.422	-57,738.565				事業者点名：調査-1
		H2	-149,115.041	-57,736.490				事業者点名：調査-19
		H3	-149,123.093	-57,741.590				事業者点名：調査-18
		H4	-149,123.393	-57,746.402				
		H5	-149,123.526	-57,759.303				
		H6	-149,124.607	-57,784.309				事業者点名：調査-13
		H7	-149,111.859	-57,808.013				事業者点名：調査-11
		H8	-149,099.082	-57,808.966				事業者点名：調査-10
		H9	-149,097.412	-57,799.495				事業者点名：調査-9
		H10	-149,096.191	-57,779.385				
		H11	-149,092.325	-57,752.263				事業者点名：調査-6
		H12	欠番					
		H13	-149,091.709	-57,749.809				事業者点名：調査-5
		H14	-149,091.649	-57,742.395				事業者点名：調査-3

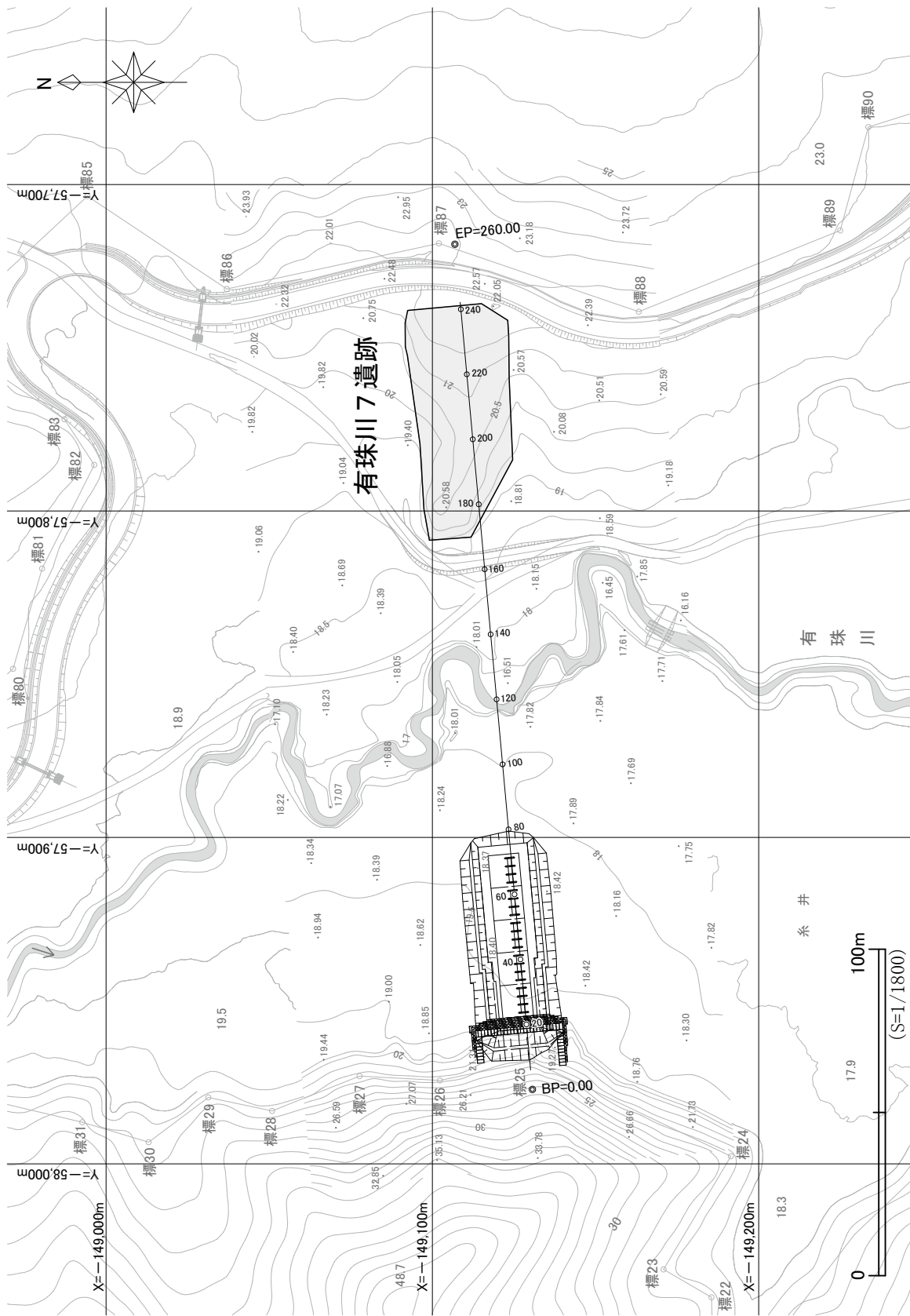


図3 現況図 (工事図面)

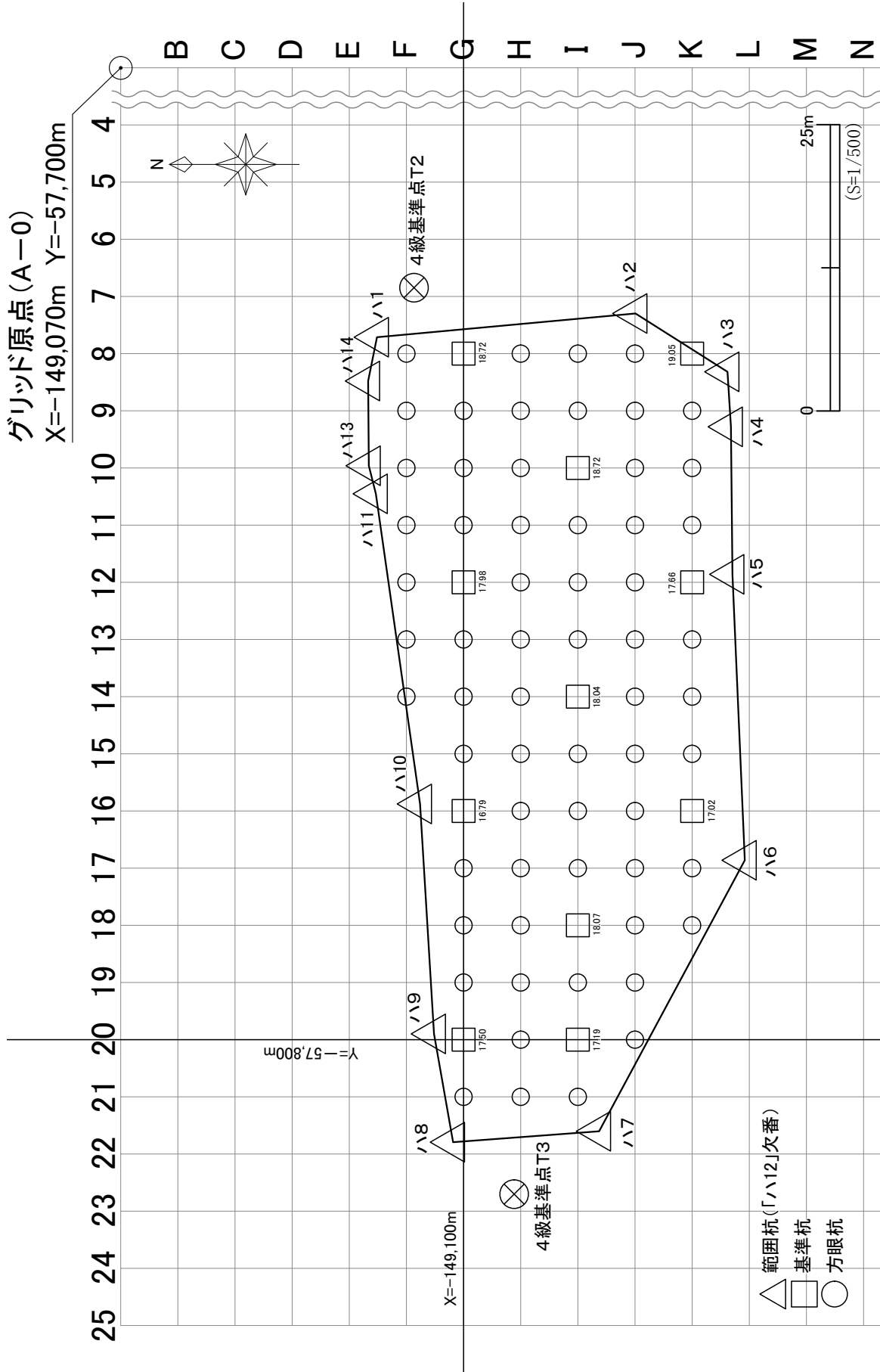


図4 グリッド設定図

2. 基本土層

基本土層は、平成元（1989）年の試掘や有珠川5遺跡の調査での苫小牧市教育委員会の基準に従い、次のように区分した。色調及び土層の観察項目は『標準土色帖』（小山・竹原 2011）と『土壌調査ハンドブック』（ペドロジスト懇談会 1984）による。

・基本土層（図8・11 表4 口絵2）

I層：現地表土 黒色腐植土はみられない

II層：樽前aテフラ層 T a - a 元文4（1739）年降下

III層：樽前bテフラ層 T a - b 寛文7（1667）年降下

IV層：第I黒色土層 白頭山苫小牧火山灰（B - T m 9～10世紀降下）の薄層が部分的にあり

V層：樽前cテフラ層 T a - c 約2年前降下

VI層：第II黒色土層 遺物包含層

VII層：漸移層的な部分でVIL層とも表記した。

VIII層：樽前d1テフラ T a - d 1 約9千年前降下 火山弾

IX層：樽前d2テフラ T a - d 2 約9千年前降下

X層：第III黒色土層

直下の層によりXY層・XG層に分けた。前者はXI層、後者はXII層の上である。

XI層：黄色ローム層 E n - a ローム層

XII層：灰色軽石層 支笏軽石流堆積物層（S p f l）

・杭山柱状図

遺跡全体の各層の広がり記録するため、グリッド杭の周囲を掘り残した部分（杭山）の土層断面を柱状図で記録し、これらをグリッドラインごとに配置した図を掲載する。任意のグリッド（杭山）間での基本土層の状況や地形について視覚的に理解しやすく、メインセクション図などの一部分を代表させて記録した土層断面図より、調査区全体を網羅できる利点がある。例えば、G-11区を知りたいならば、東西方向G・Hラインの11～12、南北ライン11・12ラインのG～Hをみれば、層厚、傾斜の方向や度合い、およその標高といった情報を知ることができる。本遺跡では、試掘坑や遺構覆土の部分以外すべての杭山地点でVI層が厚く残存していた。

・範囲杭山柱状図（図5）

西側のハ11～14・1～5でIV層より下位について記録し、これ以外の場所は水没あるいは調査区境界に排水溝を設ける等したので図示できていないが、調査区全体に層序はみられた。

・東西方向杭山柱状図（図6・7・9）

尾根地形の縦断図である。FラインではF-12杭は試掘坑で、東側へと高い。G・HラインはG-20・H-19杭付近が尾根地形の先端部で標高が高く、東方向へいったん低くなり、さらにいくと高くなる。Iラインは尾根の中央付近で傾斜が緩やかで、南側のJ・Kラインでは比して傾斜が急である。

・南北方向杭山柱状図（図9・10）

尾根地形の横断図で、21～12ラインはいずれも中央付近に尾根の最上部があり、両側へ傾斜する地形で、東寄りの11～8ラインでは尾根上の平坦部分が広がる。

3. 調査の方法（図11）

矢板設置工事後に重機による表土除去作業を行い、その後、VI層（第II黒色土層）の発掘調査を開始した。道路に接する調査区東側部分は崩落の危険があるため、調査完了後、早急に現地表面の高さ

表5 基本土層

基本土層	記号	層位名		層界	生成要因	生成時期・年代	砂・粘土・シルト(長径2mm未満)				礫(長径2mm以上)				備考	吉小牧市教育委員会試験	
		層位番号	細分層				野外工性	色名	マンセル表色系	粘性	堅密度	種類	面積割合(%)	粒径(mm)			形状
現地表土	—	I	—	—	(腐植)	約280年前	—	—	—	—	—	—	—	—	I	表土	
樽前aテフラ層	T a - a	II	—	判然	降下堆積	元文4(1739)年	—	—	—	—	—	—	—	—	II	T a - a	
樽前bテフラ層	T a - b	III	(ラミナ)	面然	降下堆積	寛文7(1667)年	—	—	—	—	—	—	—	—	III	T a - b	
第I黒色土層	I B	IV	黒色土	漸変	腐植生成	約3600年	黒色	10YR1.7/1	強	堅	礫(火山性・凝灰岩)	1~2	平均: 3~4	亜円礫	未風化~半風化	IV	I B層
		IV L	漸移層部分	面然	降下堆積	約2000年前	黒褐色	10YR3/2	—	堅	礫(火山性・凝灰岩)	5	平均: 3~4	亜円礫	未風化~半風化		
樽前cテフラ層	T a - c	V U	火山砂主体層	面然	降下堆積	約2千年前	砂土(黄褐色)	10YR5(6)	—	—	軽石	主体	3~5	亜円礫	半風化	V	T a - c
		V L	軽石主体層	面然	降下堆積	約2千年前	砂土(黄褐色)	10YR5(6)	—	—	軽石	主体	20	亜円礫	半風化		
		V M	T a - cとI B層が混じる層	明瞭	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
		VI	黒色土	漸変	腐植生成	約2000年	黒色	10YR1.7/1	強	堅	礫(軽石・凝灰岩)	5~7	平均: 4~5 最大: 10	亜円礫	半風化~風化		
第II黒色土層	I I B	VII・VIL	漸移層部分	面然	腐植生成	約9000年前	にぶい褐色	10YR4/4	中	堅	礫(軽石・凝灰岩)	7~1	平均: 4~5 最大: 10	亜円礫	半風化~風化	VII	漸移層
		VII U	上位(細粒の岩片)	面然	降下堆積	約9千年前	橙色~青灰色	—	無	しよう	T a - d 1 スコリア・岩片(硬質)	主体	平均: 3~7 最大: 12	亜円礫	半風化	VIII	T a - d 1
樽前dテフラ層	T a - d 1	VII L	下位(砂礫)	面然	降下堆積	約9千年前	明赤褐色~藍色	5YR5/8~6/8	弱	すこぶる堅	T a - d 1 スコリア・岩片(硬質)	主体	平均: 3~4 最大: 10	亜円礫	半風化		
		IX	褐色腐植軽石~土	面然	降下堆積	約9千年前	黒褐色	10YR2/2	強	堅	T a - d 2 軽石	主体	平均: 10~20 最大: 30	亜円礫	腐朽	軽石が破砕した砂土	
第III黒色土層(下位: 黄褐色ローム)	III B層	X Y	黒色土(Y)	漸変	腐植生成	約9,000年	黒褐色	10YR3/2	弱	すこぶる堅	T a - d 2・灰色軽石混じる	10~50	平均: 5~10 最大: 20	亜円礫	腐朽風化	X	III B層
第III黒色土層(下位: 灰色軽石層)	III b層	X G	黒色土(G)	明瞭	腐植生成	約13,000年前	黒褐色	10YR3/2	弱	すこぶる堅	—	5~7	平均: 8 最大: 30	亜円礫~円礫	腐朽	XI	En-a
黄褐色ローム	En-aローム層	XI	黄色ローム層	—	水成二次堆積?	約1.3万年	にぶい黄褐色	10YR5/4	強	堅	En-a軽石 S p f l 軽石	(主体)	平均: 5~20 最大: 100程度	亜円礫	風化腐朽	XII	S p f l
灰色軽石層	S p f l	XII	灰色軽石層	—	水成二次堆積?	約2.8万年	灰黄色	2.5Y6/2	弱	すこぶる堅	S p f l 軽石(多数の筋がある)	(主体)	平均: 5~20 最大: 100程度	亜円礫	風化腐朽	XII	S p f l

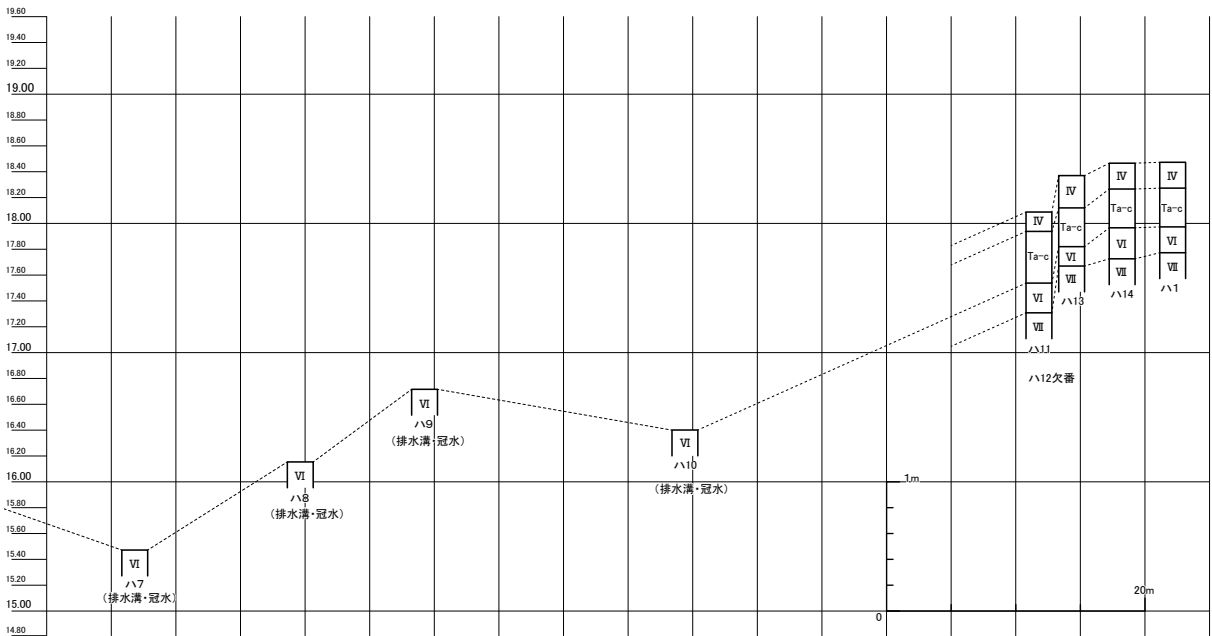
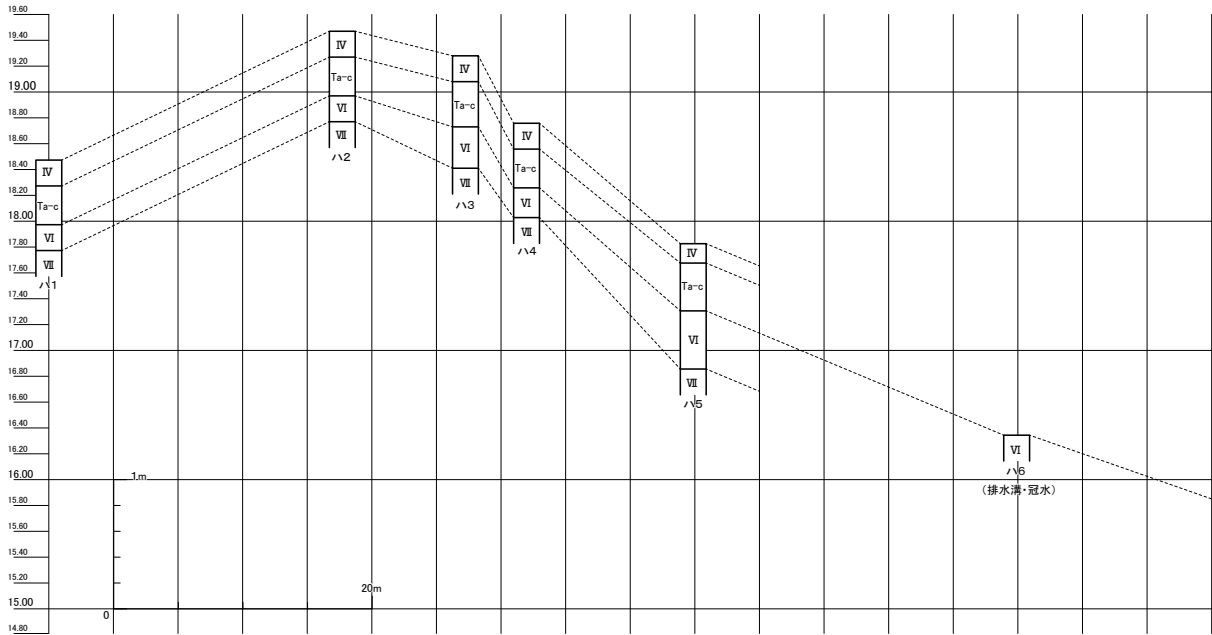


図5 範囲杭山柱状図

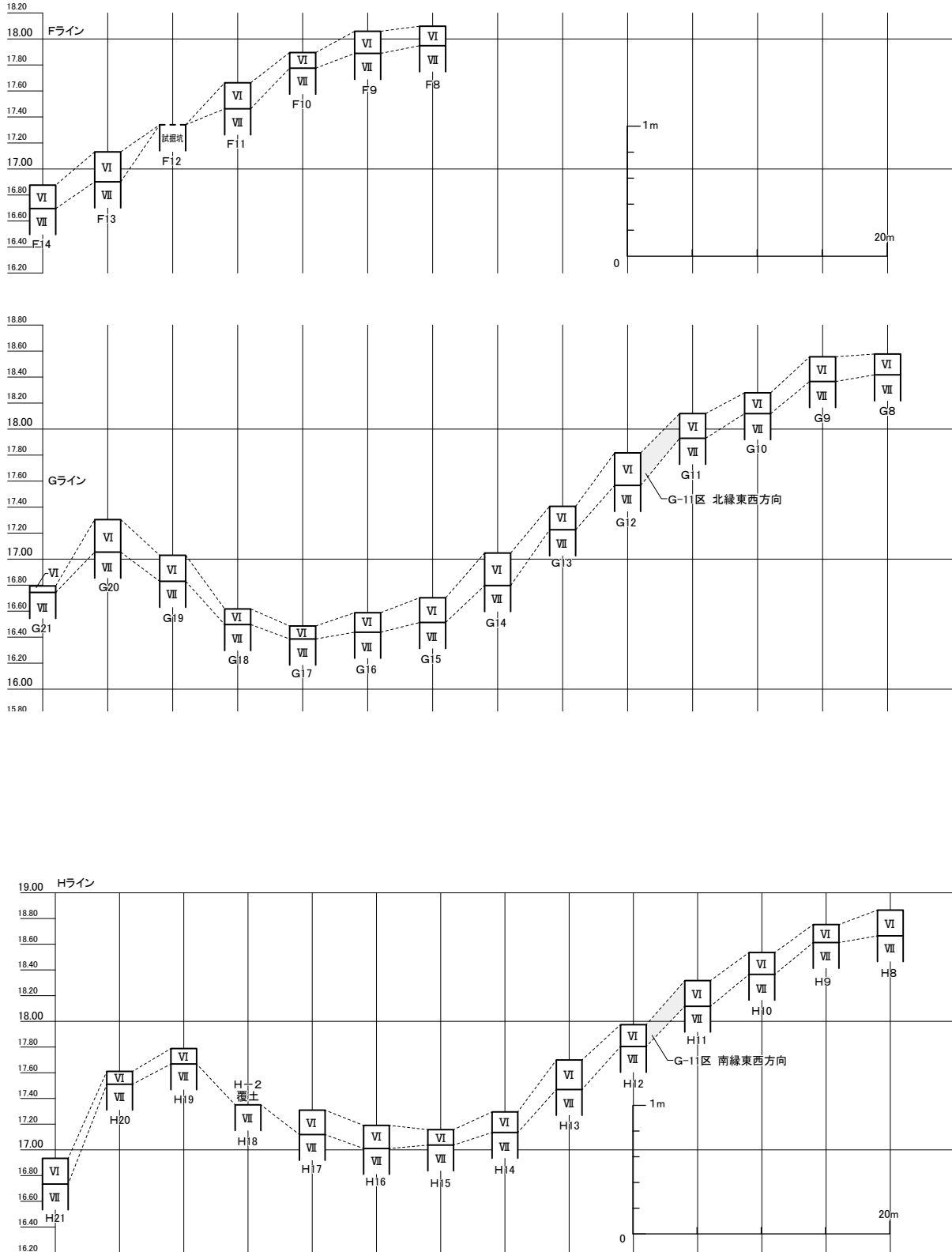


図6 F・G・Hライン東西方向杭山柱状図

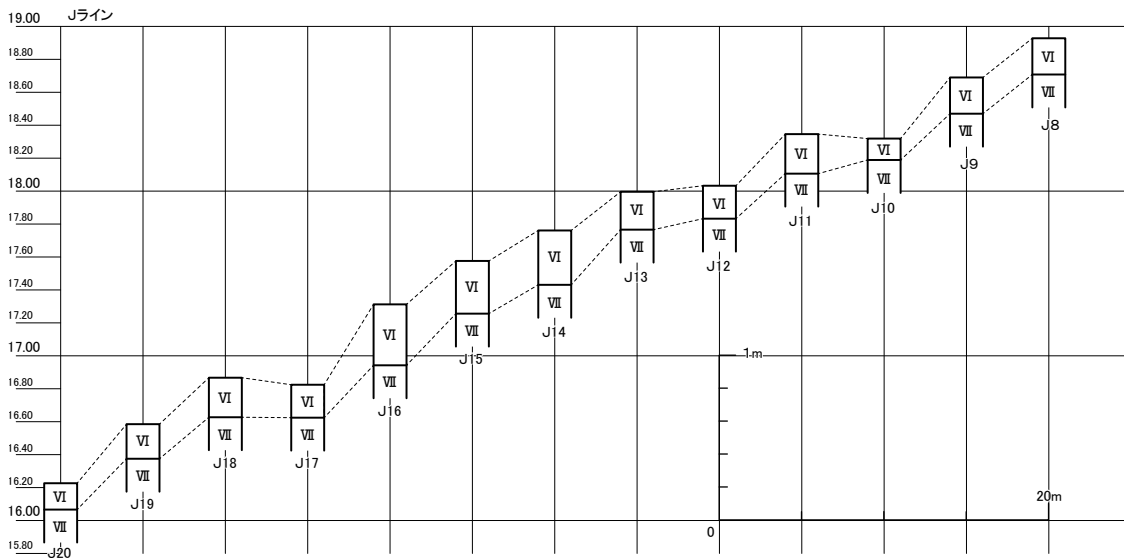
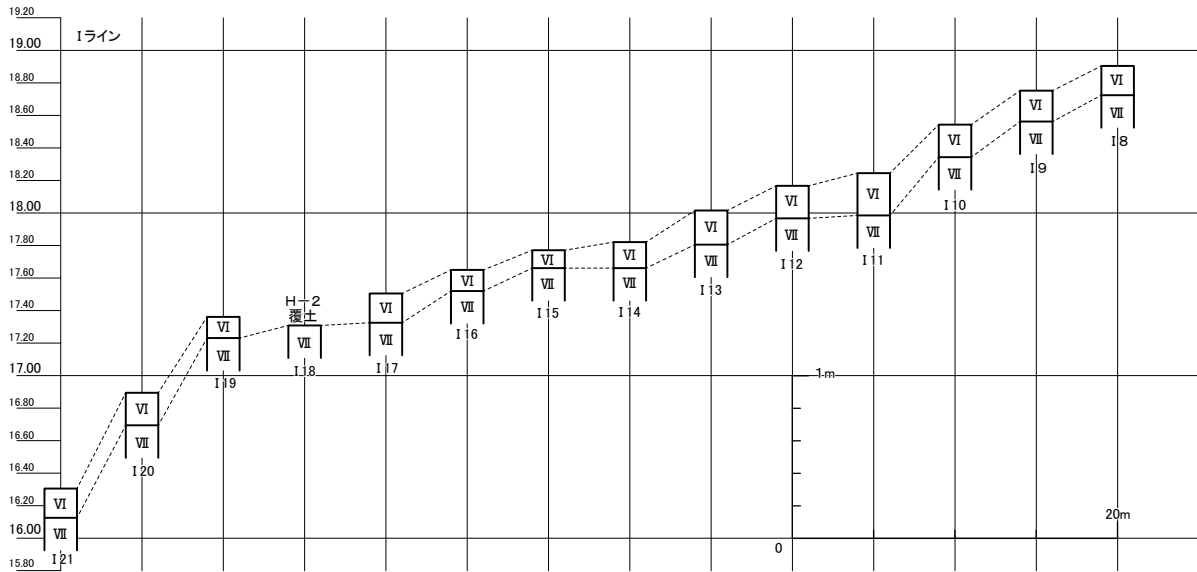
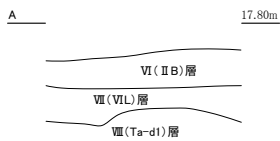


図7 I・Jライン東西方向杭山柱状図

基本土層①(1:40)



基本土層② (XY (III B) 層) (1:40)

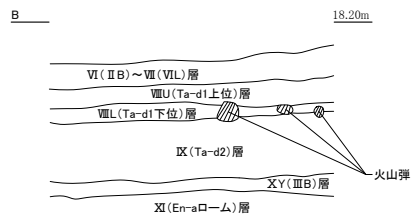


図8 基本土層図

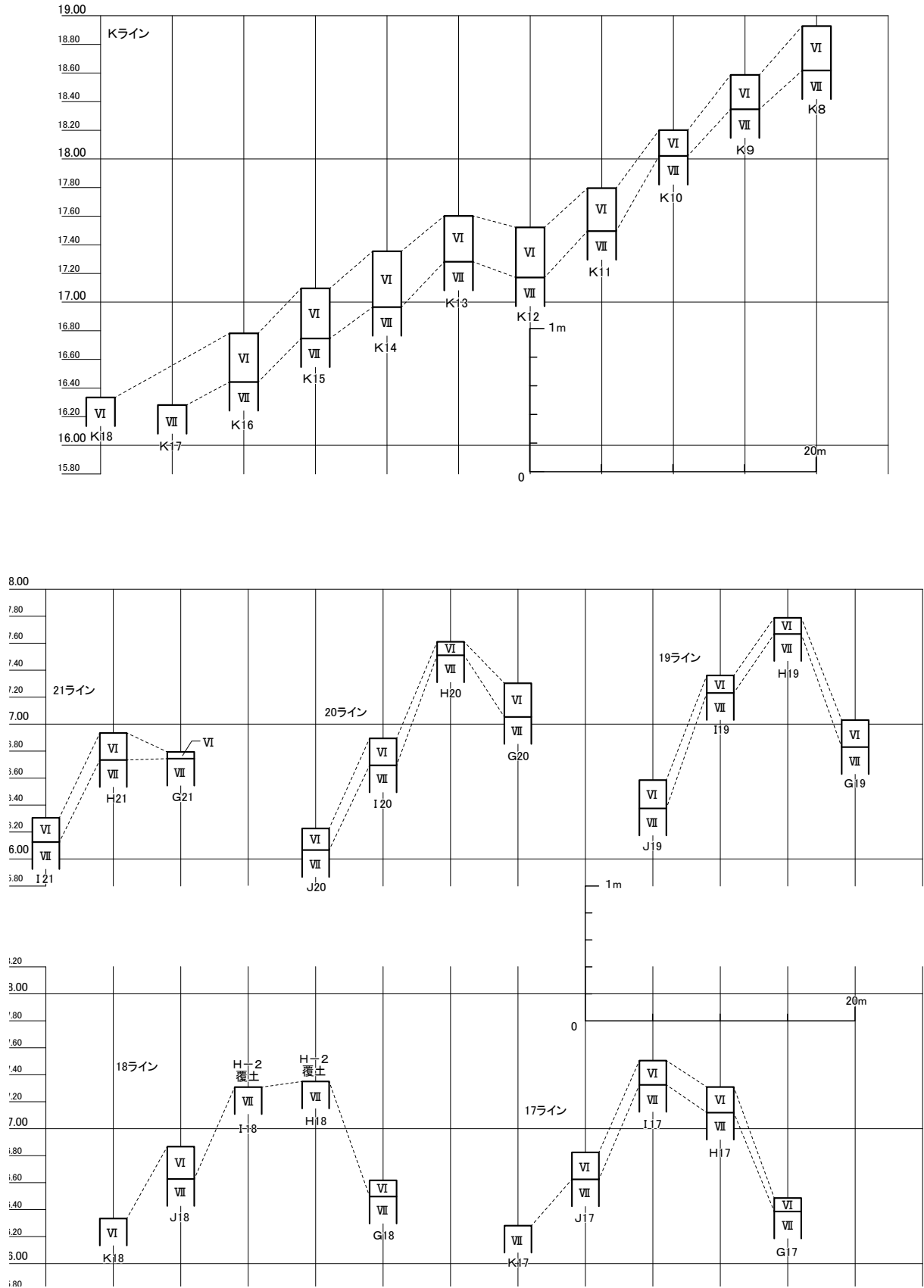


図9 Kライン東西方向・21～17ライン南北方向杭山柱状図

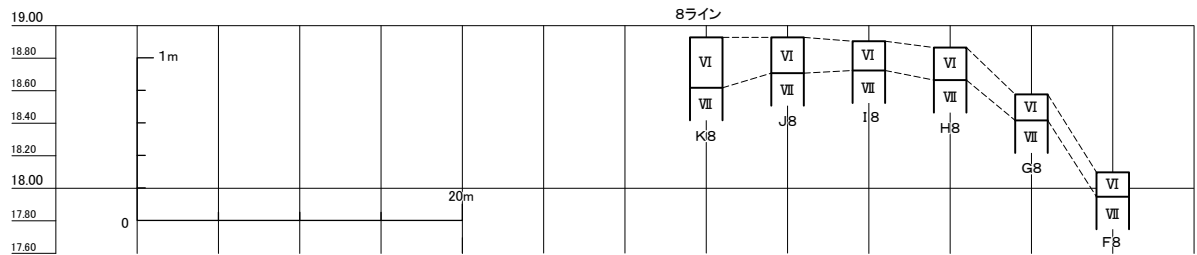
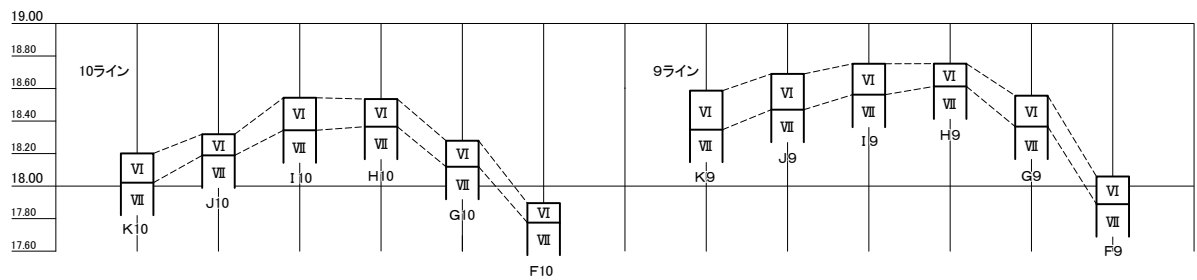
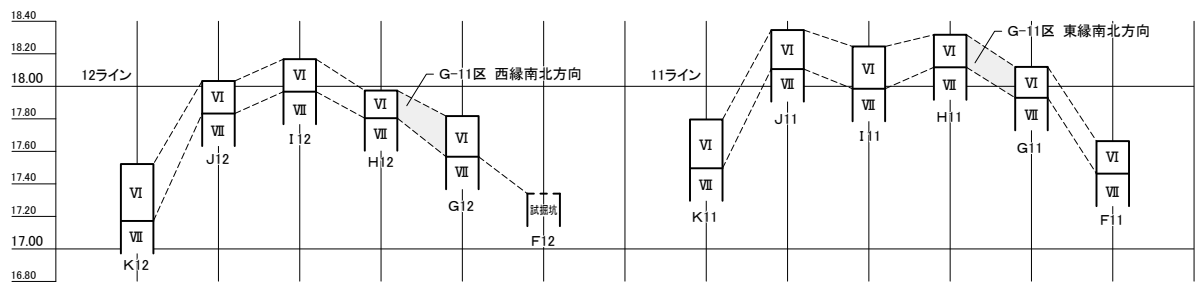
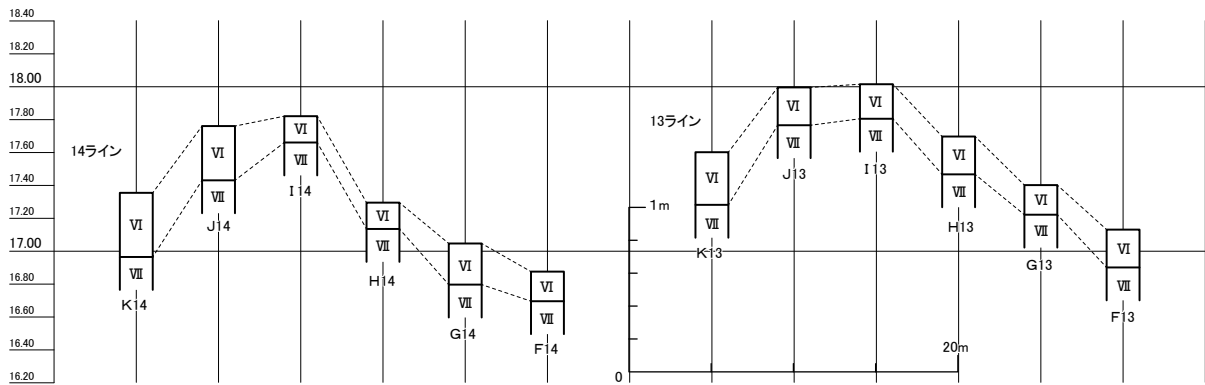
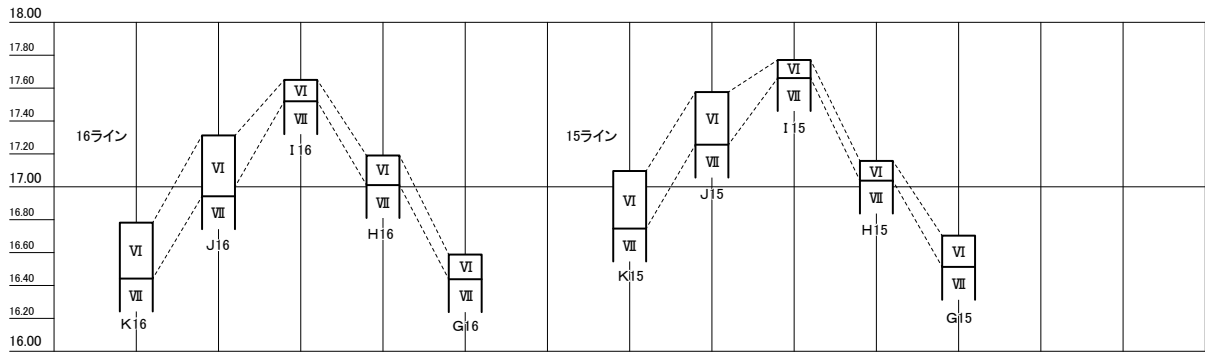


図10 16～8ライン南北方向杭山柱状図

まで埋め戻したいとの要請があったので、東の調査区境界から10ラインまでの調査を優先することとなった。9ラインに先行トレンチを設けてから、周囲のグリッドへと展開し、この優先部分の調査を8月末に完了させた。その後、試掘坑27にある竪穴住居跡の調査に着手し、同時に12・13・16・Iラインに先行トレンチを入れて層厚や遺物の量を確認し、包含層全体の展開を計画した。猛暑や降雨、現場水没による作業時間の減少や、当初計画されていない第Ⅲ黒色土層の調査を行うために、このトレンチ調査により遺物が少ないと予想される部分は、重機を併用した遺構確認調査に切り替えた。その地点はJ・K-13~17区に決定した。ここは調査区内に設けた人力調査の廃土場であり、Ⅵ層を掘ってⅦ層まで下げるとその深さ分多くの土を仮置きでき、人力調査の効率化を図ることも理由であった。概して東側は包含層調査を、西側は竪穴住居跡などの遺構調査を展開させた。包含層調査では遺物の出土状況を把握しつつ必要に応じて遺構確認を併せて行い、これらの発見に努めた。遺構と予想した部分は半截、あるいはトレンチを設けて掘り下げ、土層断面の状況も確認し、遺構か否か判断した。地形測量図はⅥ層上面、最終面（Ⅶ・Ⅷ層上面）、第Ⅲ黒色土層を調査した範囲はⅩ層上面とⅪ・Ⅻ層上面も作成した。

4. 整理の方法

(1) 一次整理の方法

遺物は、現場で「遺跡名（略号 ウ7）：出土地点（遺構名・グリッド）：出土層位：遺物種別（土器 剥片石器 礫石器とレキ その他の四つに大別）：取り上げ番号（出土位置記録のもの）：取り上げ年月日」の情報を記したビニール袋に取り上げた。

現場事務所では袋ごとに「取り上げ台帳」（水洗台帳）に記録し、一次整理作業の流れを管理した。遺物は「水洗」・「乾燥」した後、「分類」し、出土地点・出土層位・遺物名等の遺物個別の情報を「遺物カード」に記し、チャック付きビニール袋に遺物とともに収納した。また、その遺物カードの記載事項を一覧表に書き記した（手書きの遺物登録台帳）。これをExcel文書で清書したものを「遺物登録台帳」として完成させ、二次整理作業を進めるための基本情報とした。本報告のための集計作業はこのエクセルデータから作成した。土器は接合作業を行うため、遺物カードの情報の一部を直接遺物に「注記」した。内容は「遺跡名：出土地点：出土層位：取り上げた月日：遺物番号」である。

内容は、遺跡名の略号の「ウ7」：出土地点 遺構名（記号と数字の間にハイフンあり）またはグリッド名（ハイフンなし）：出土層位 遺構の層位または包含層名：取り上げ月日 算用数字で4桁表記である。

(2) 二次整理の方法

・遺物カード・遺物登録台帳の点検・修正

遺物カードと遺物登録台帳は相互に照合して点検した。誤りは「水洗台帳」等の他の記録で裏付けがとれるものや、誤記等の簡易なミスは修正したが、接合作業の結果、時期が判明したものなどの情報は、時間的な制約により修正できなかった。

・土器

接合作業は残存状態が「良好」・「剥離」のものを中心に行い、遺構出土土器の接合は遺構内、遺構間、遺構が位置するグリッド、周囲のグリッドへと展開し、包含層出土のものは破片が多いグリッドから周囲へ広げるように進めた。接合した破片は復原可能なものを接着し「バイサム」で補填して復原した。復原個体は立面実測図を作成し、破片土器は特徴が認識しやすい口縁部や底部の破片を中心に選び出し、拓影図と垂直方向の断面図を組み合わせる図示した。すべての掲載土器は観察表を作成

した。

・石器

石器は、残存状態が「完形」・「準完形」のものを中心に、器種や形態の多様性を示せるように掲載する石器を選び出し、実測図と観察表を作成した。 (末光)

5. 写真撮影

現場撮影、スタジオ撮影共に、フルサイズミラーレスカメラ (SONY a7R IV) を用いて、同一カットを同じ条件 (シャッタースピード・露出) で2コマ撮影し、それをもって1セットとした。撮影に際しては、カラーチェッカーパスポート (X-rite社) のホワイトバランスターゲットを用いてカメラのホワイトバランスを調整した後、同カラーチャートを撮影してから本撮影を行った。撮影したカラーチャートからRAWデータ現像時にプロファイルを作成、本撮影のデータに適用して、カラーバランスの統一を図った。

現場では、ドローン (DJI MAVIC 2 PRO) での空撮や、メモ写真として、コンパクトデジタルカメラ (SONY RX0 II) での撮影も行った。全ての撮影データはRAW形式で記録し、Adobe Lightroomで現像処理を行った。撮影データは、FileMaker Proで管理している。 (吉田裕吏洋)

6. 遺物の分類基準

土器は表6「土器時期分類基準」・表7「土器部位分類基準」・表8「土器残存状態分類基準」で、石器は表9「石器器種分類基準」・表10「石器残存状態分類基準」で、岩石の種類は表11「岩石分類体系表」・表12「岩石 (石材) の略号」に基づき分類した。

(末光)

表6 土器時期分類基準

種別	時代	時期	群	類	土器群・型式名
土器	縄文時代	早期	I群	a類	貝殻文・条痕文・沈線文を有する土器群
				b類	東御路式系土器群
				a類	縄文尖底土器群
	前期	II群	b類	円筒土器下層式 それに伴う土器群	
			a類	円筒土器上層式・サイバ沢VII式	
			b類	萩ヶ岡1式・萩ヶ岡2式に相当する土器群	
	中期	III群	a類	萩ヶ岡3 (天神山式)・柏木川式	
			b類	北筒式に相当する土器群	
			a類	余市式・タブロプ式・入江式に相当する土器群	
	後期	IV群	b類	ウサクマイC式・手稲式・ホツケマ式に相当する土器群	
			c類	堂林式・三ツ谷式・御殿山式に相当する土器群	
			a類	大洞B式・大洞BC式 それに伴う土器群	
	晩期	V群	b類	大洞C ₁ 式・大洞C ₂ 式 それに伴う土器群	
			c類	大洞A式・大洞A ₁ 式 それに伴う土器群	
			VI群		統纏文土器
擦文化時期		VII群		擦文土器 (北六皿式を含める)	
時期不明		不明		剥離や磨耗、小破片が多い	
判断不可能なもの		不明			

表7 土器部位分類基準

部位・名称	内容
口縁部	<ul style="list-style-type: none"> 口唇部が残存するもの 口唇部は残存しないが、これに近い部位と判断できるもの
底部	<ul style="list-style-type: none"> 底面が残存するもの 底面は残存しないが、これに近い部位と判断できるもの
胴部	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部、底部、不明以外のもの
不明	<ul style="list-style-type: none"> 部位を特定できないもので、小破片に多い

表8 土器残存状態分類基準

呼称	内容	備考
良好	<ul style="list-style-type: none"> 器の形状を留める個体土器 破片の表裏面及び割れ口の残存状態が良いもの 	<ul style="list-style-type: none"> 接合可能な破片 文様が残り、時期判断に有効な情報が多い
剥離	<ul style="list-style-type: none"> 破片の表裏面のいずれか、あるいは面が約1/2以上剥離・剥落しているもの 	<ul style="list-style-type: none"> 接合可能な破片 文様が残る場合、時期判断に有効な情報を有する 剥離面は胎土の観察に相当する 破片化した後、人為的に加工されたものもある (再生土製品)
磨耗	<ul style="list-style-type: none"> 破片が磨耗しているもの 	<ul style="list-style-type: none"> 磨耗した割れ口は接合に耐えられない 文様の磨滅により、破片そのものの情報は少ない 遺物の二次的な移動を考慮する上で有意な情報を有する 破片化した後、人為的に加工されたものもある (再生土製品)
小破片	<ul style="list-style-type: none"> 大きさが長さ2cm程度以下の小さな破片 	<ul style="list-style-type: none"> 破片が小さいため接合に適さず、復原作業に与える影響も少ない 破片そのものの情報は少ない 小さいため注記できないものもある ある破片に接合した場合、接合関係についての情報が得られる

表9 石器器種分類基準

分類	器種・名称	備考	主要な石材	
剥片石器	石鏃		黒曜石 頁岩 チャート	
	石槍・ナイフ			
	石鏃	「石匙」		
	つまみ付きナイフ			
	スクレイパー	定型的な形態を有さないが、人為的な使用痕・加工痕が認められるフレイク U=utilized R=retouched		
	U・Rフレイク			
	石核			
	フレイク・チップ			
	原石			
	磨製石斧			
礫石器	磨製石斧未製品		緑色泥岩 片岩	
	磨製石斧原石			
	たたき石			
	すり石			
	北海道式石冠			
	石鏟			
	砥石			
	台石・石皿			
	名称・通称			各種
	U・Rレキ	人為的な使用痕・加工痕が認められる礫 U=utilized R=retouched		
レキ	自然礫で、遺跡に人為的に持ち込まれたと考えられるもの			
* 被熱しているものは、「(被熱)土器種・名称」と表記した。				

表10 石器残存状態分類基準

種類	分類	内容
剥片石器・石製品	完形	残存する部分が90%以上のもの
	準完形	「完形」と「半形」の中間的なもの 完形に近いもの
	半形	残存する部分が50～25%程度のもの
	片	残存する部分が25%程度未満のもの
	完形	大きな割れ口が無いもの 割れ口を有しても機能部が損なわれていないもの
礫石器	準完形	割れ口があり、完形の状態を想定でき、残存する部分が75%程度のもの
	半形	割れ口があり、完形の状態を想定でき、残存する部分が50～25%程度のもの
	片	割れ口があり、完形の状態を想定し難く、残存する部分が25%程度未満のもの
	完形	割れ口のないもの
レキ	片	割れ口があるもの

表11 岩石分類体系表

火成岩		優白岩(酸性)	中性岩(中性)	優黒岩(塩基性岩)	超塩基性岩
火山岩	火山噴出物(多孔質)	浮岩(軽石)	岩滓(スコリア)		—
	ガラス質(非結晶質)石基のみ	黒曜岩(石)	—		—
	微晶(球状)の斑状組織石基	流紋岩	安山岩	玄武岩	—
	細晶の球状組織石基	石英斑岩	ひん岩	輝緑岩	—
半深成岩	花崗岩	閃緑岩	斑輝岩	微輝岩 蛇紋岩	
深成岩	66%以上	52~66%	52%以下	45%以下	
無色・白色	10%以下	10~30%	30%以上	60~70%以上	
有色	斜長石	斜長石	—	—	
主な造岩鉱物の種類	石英 斜長石	黒雲母	輝石 微輝石 蛇紋石	—	

堆積岩		火山噴出物から構成される	
火山砕屑岩	火山角礫岩	火山角礫岩	火山角礫岩
	凝灰岩	火山灰岩	火山灰岩
	凝灰岩	凝灰岩	凝灰岩
砕屑岩	礫岩	砂岩	泥岩
	砂岩	泥岩	頁岩
	頁岩	頁岩	頁岩
有機岩	チャート	頁岩	頁岩
変成岩	変成岩	変成岩	変成岩
接触(熱)変成岩	ホルンファエルス	ホルンファエルス	ホルンファエルス
広域変成岩	片岩	片岩	片岩
	片麻岩	片麻岩	片麻岩

* 石英質(ケイ酸 SiO2)の岩石・鉱物の便宜的な分類体系

堆積岩	小項目	岩石名	英語名	略号
堆積岩	チャート	軽石(浮岩)	Pumice	Pum
	フリント	岩滓(スコリア)	Scoria	Sco
	珪質頁岩	黒曜石(黒曜岩)	Obsidian	Obs
	珪藻岩	流紋岩	Rhyolite	Rhy
変成岩	珪岩(珪石)	安山岩	Andesite	And
		玄武岩	Basalt	Bas
鉱物	水晶	花崗岩	Granite	Gra
	碧玉	閃緑岩	Diorite	Dio
	玉髓	斑輝岩	Gabbro	Gab
	めのう	蛇紋岩	Serpentine	Ser
		輝緑岩	Peridotite	Per
		火山凝灰岩	Lapilli Tuff	Ltu
		凝灰岩	Tuff	Tuf
		礫岩	Conglomerate	Con
		砂岩	Sandstone	San
		泥岩	Mudstone (Green Mudstone)	Mud (Gr. Mud)
	頁岩	Shale	Sha	
	チャート	Chert	Che	
	片岩	Schist	Sch	
	片麻岩	Gneiss	Gns	
	変成岩	名称を参照		
	上記以外			

表12 岩石(石材)の略号

大項目	小項目	岩石名	英語名	略号
火成岩	火山噴出物	軽石(浮岩)	Pumice	Pum
		岩滓(スコリア)	Scoria	Sco
火成岩	火山岩	黒曜石(黒曜岩)	Obsidian	Obs
		流紋岩	Rhyolite	Rhy
		安山岩	Andesite	And
		玄武岩	Basalt	Bas
		花崗岩	Granite	Gra
		閃緑岩	Diorite	Dio
		斑輝岩	Gabbro	Gab
		蛇紋岩	Serpentine	Ser
		輝緑岩	Peridotite	Per
		火山凝灰岩	Lapilli Tuff	Ltu
堆積岩	火山砕屑岩	凝灰岩	Tuff	Tuf
		礫岩	Conglomerate	Con
		砂岩	Sandstone	San
		泥岩	Mudstone (Green Mudstone)	Mud (Gr. Mud)
		頁岩	Shale	Sha
		チャート	Chert	Che
		片岩	Schist	Sch
		片麻岩	Gneiss	Gns
		変成岩	名称を参照	
		上記以外		

Ⅳ章 第Ⅱ 黒色土層（Ⅵ層）の遺構と出土遺物

1. 遺構の概要（図12 表13～20）

調査した遺構は竪穴住居跡3軒、土坑2基、石組炉1か所、焼土1か所、土器集中4か所、掘り上げ土1か所である。遺構はすべて縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。竪穴住居跡は調査区西側にある尾根の先端部で標高が高い地点に集中する。H-1は長径4mほどで円～隅丸方形、西側に掘り上げ土もみつかった。H-2は壁の立ち上がりが部分的に複数か所みられたもので、斜面の同じ場所に複数軒が建て替えられたと推測する。H-3は直径2.6mの小型で北側斜面に位置する。これら住居跡は近接するので、同時期に存在したとは考え難い。土坑は楕円形の浅いもので住居跡の近くに位置し、P-1がH-2に、P-2がH-1に関連すると推測する。石組炉SF-1は「コ」の字状に礫を配したもので、焼土F-1は調査区の東側でみられた。土器集中は、PS-1・2・4は調査区東側の緩斜面に位置し、PS-1・4は北側、PS-2は南側である。PS-3は中央付近の尾根上でみつかった。掘り上げ土HO-1は東側の調査区際でみつきり、近くに掘り込んで構築された遺構はみつからなかった。

2. 竪穴住居跡（図13～17 表13・14・17・19 口絵2・3 図版2～5）

H-1（図13・14 口絵2・3 図版2・3）

位置 H-18・19区 規模 4.40×4.00/3.72×3.66/0.68m

平面形態 円形～隅丸方形

確認・調査 平成元（1989）年に試掘坑27でみつかった第1号住居跡である。はじめに試掘坑の両壁で東西方向の土層断面を記録し、次に南北方向に設定したベルト沿いにトレンチを設けて掘り進めたところ、床面と壁の立ち上がりを確認した。次にトレンチから掘り広げて北側と南側部分を完掘し、遺物出土位置と完掘状況を記録し、付属遺構を調査して完了した。中央部分は試掘坑で削平される。

覆土 上位の覆土B層はⅥ層主体、床面直上の覆土PB層はやや淡い色調の黒色土、床面のくぼみには覆土d2・G層である。これ以外にはT a - dの砂礫主体の層が部分的にみられる。

床面・壁 床面は凹凸がみられ北と東側が高い。壁の平面形状は北側の中央付近が一部、内側に入り込む。重機で掘り下げてしまった東側以外は明瞭な立ち上がりがみられる。

重複・近接 H-2・3、P-1・2と近接し、P-2は本住居跡に関連すると推測する。

付属遺構

掘り上げ土 規模 2.07×1.09/0.40m 平面形態 不整な楕円形

試掘坑27の断面で確認されていたが、土層注記はなかった。Ⅵ層にT a - d 2が混じる層である。H-1内部へ流れ込み、住居外ではP-2上部に堆積するので、住居跡と土坑が同時期と考えた。

柱穴 s p - 1 規模 0.12/0.22m 平面形態 円形/丸～尖

覆土からⅣ群土器が出土した。

遺物出土状況 フレイク、磨製石斧の破片、出土位置を大きく動かしてしまった遺物は層ごとに取り上げ、他は出土位置を記録した。床面や覆土からⅢ・Ⅳ群土器、石鏃、スクレイパー、フレイク、磨製石斧、レキが出土した。

時期 出土遺物から縄文時代後期初頭である。また、覆土B層出土炭化材の放射性炭素年代測定の暦年較正用年代は3881±20年である。

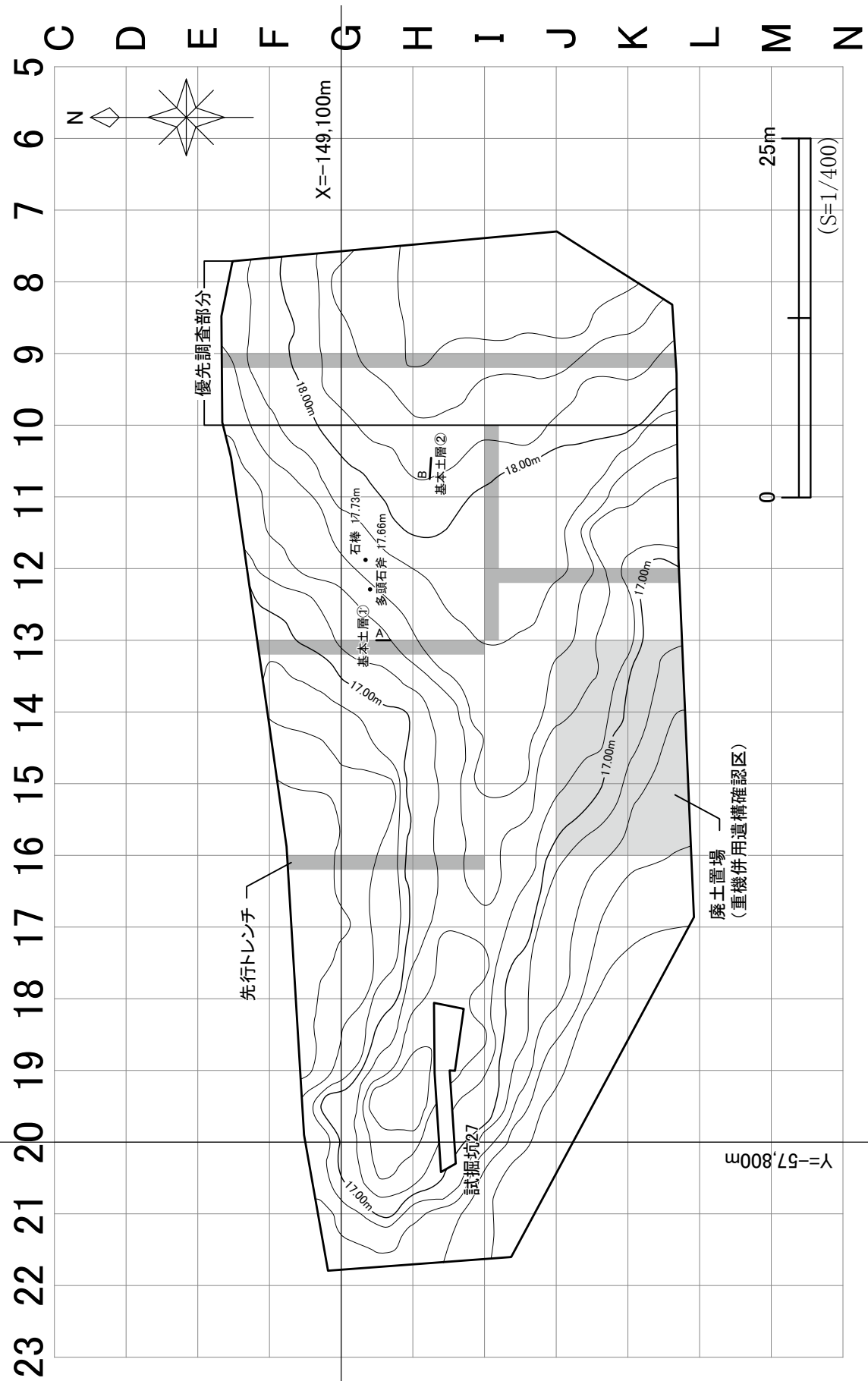


図11 最終面 (VII・VIII層) 地形測量図

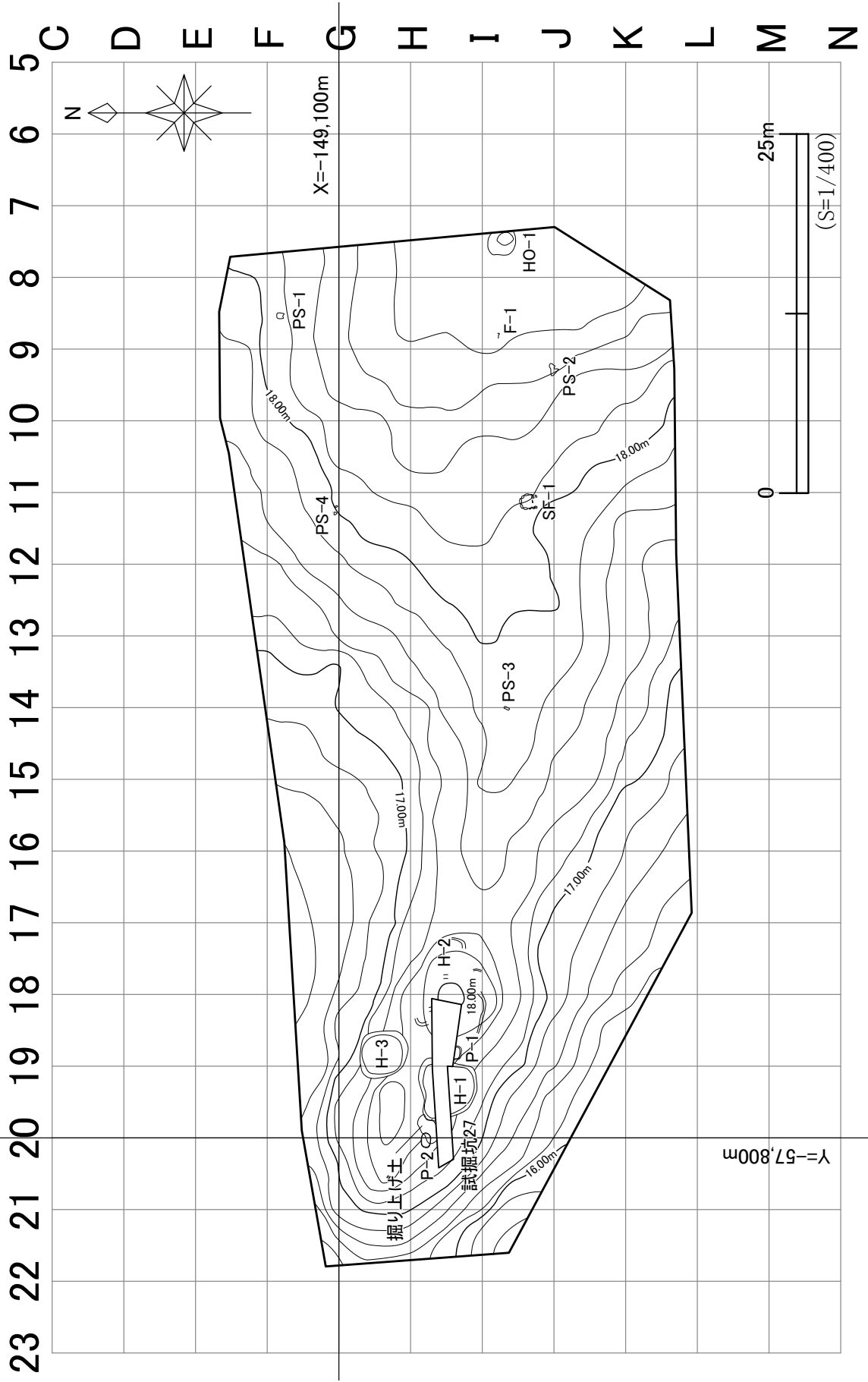
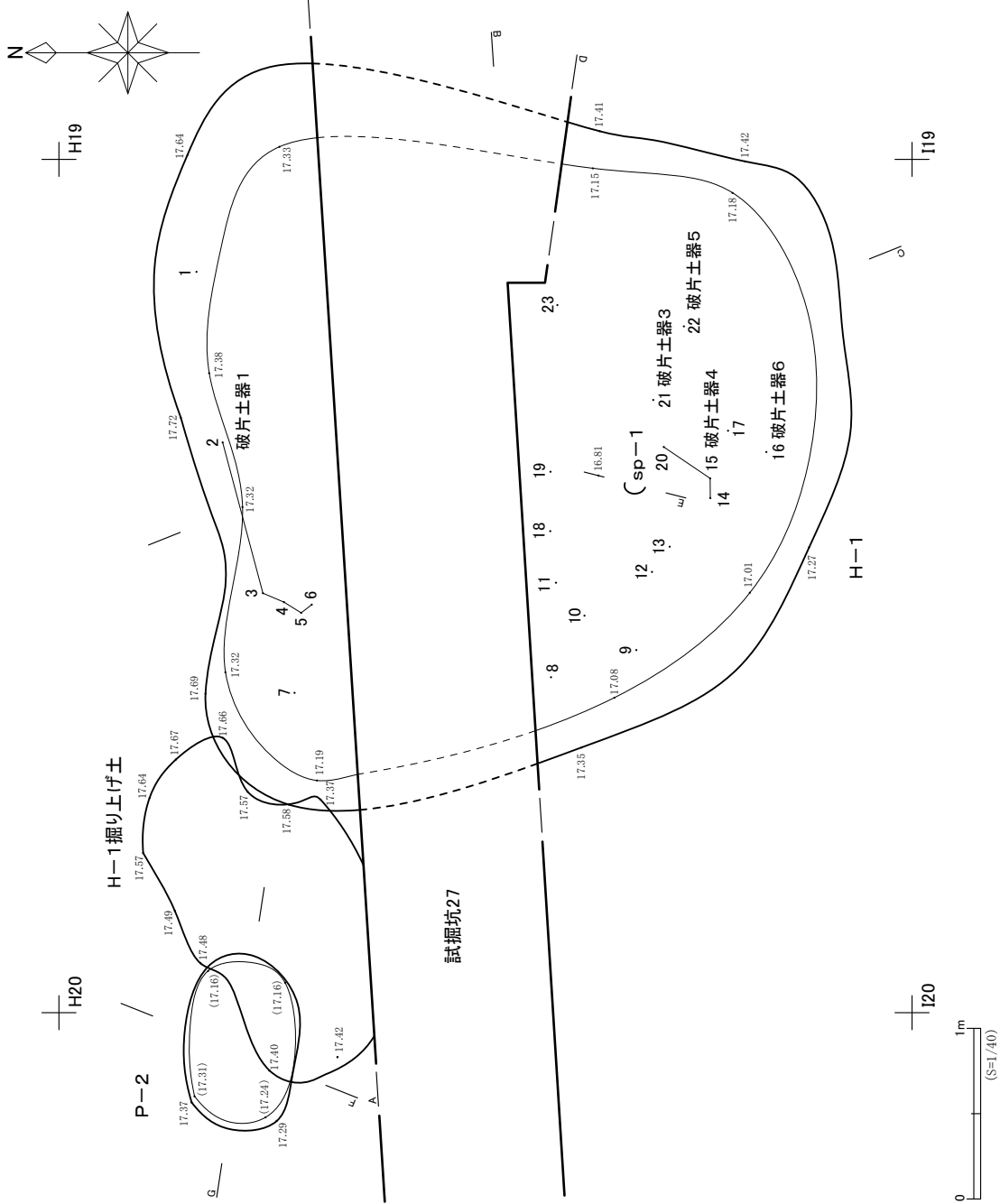


図12 第II黒色土層（VI層）上面地形測量図・遺構位置図

H-1・P-2



選別番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ (m)	取心上げ日	掲載	備考
1	土器	Ⅲ群	胴部	良好	1	覆土B層	17.36	20912		
2	土器	Ⅲ群	胴部	良好	2	覆土P5層	17.45	20912		
3	土器	Ⅲ群	胴部	良好	1	覆土P5層	17.50	20912		
4	土器	Ⅲ群	胴部	良好	1	覆土P5層	17.44	20912		
5	土器	Ⅲ群	胴部	良好	1	覆土P5層	17.37	20912		
6	土器	Ⅲ群	胴部	良好	1	覆土P5層	17.28	20912		
7	土器	Ⅳ群	胴部	剥離	1	覆土P5層	17.26	20912		
8	土器	Ⅲ群	胴部	小破片	1	覆土B層	17.26	20912		
9	フレイク		胴部	—	1	覆土B層	17.32	20912		
10	土器	Ⅲ群	胴部	小破片	1	覆土B層	17.20	20912		
11	土器	Ⅲ群	胴部	剥離	1	覆土B層	17.29	20912		
12	土器	Ⅲ群	胴部	小破片	1	覆土B層	17.16	20912		
13	土器	Ⅲ群	胴部	良好	1	覆土B層	17.24	20912		
14	土器	Ⅲ群	胴部	良好	1	覆土B層	17.18	20912		
15	土器	Ⅳ群	胴部	良好	1	覆土B層	17.18	20912		
16	土器	Ⅳ群	口縁部	良好	1	覆土B層	17.22	20912		
17	土器	Ⅳ群	胴部	良好	1	床面	17.09	20912		
18	土器	Ⅳ群	胴部	剥離	1	覆土B層	17.21	20912		
19	石炭		胴部	非定形	1	覆土B層	17.26	20912		
20	土器	Ⅲ群	胴部	良好	1	覆土B層	17.21	20912		
21	土器	Ⅲ群	胴部	良好	1	覆土P5層	17.14	20912		
22	土器	Ⅳ群	口縁部	良好	1	覆土B層	17.29	20912		
23	土器	Ⅲ群	胴部	良好	1	覆土B層	17.27	20912		
—	土器	Ⅳ群	口縁部	良好	1	覆土P5層	—	20926		sp-1
—	土器	Ⅲ群	胴部	良好	1	覆土B層	—	20912		
—	石炭		胴部	非定形	1	床面	—	20922		集合
—	フレイク		胴部	非定形	1	覆土B層	—	20911		
—	フレイク		胴部	非定形	2	床面	—	20922		
—	フレイク		胴部	非定形	4	床面	—	20904		
—	フレイク		胴部	非定形	1	床面	—	20906		
—	フレイク		胴部	非定形	8	床面	—	20907		
—	フレイク		胴部	非定形	5	覆土B層	—	20908		
—	フレイク		胴部	非定形	15	覆土B層	—	20908		
—	フレイク		胴部	非定形	11	覆土B層	—	20912		
—	フレイク		胴部	非定形	10	覆土B層	—	20912		
—	フレイク		胴部	非定形	2	覆土P5層	—	20912		
—	フレイク		胴部	非定形	2	覆土B層	—	20913		
—	フレイク		胴部	非定形	3	覆土B層	—	20913		集合
—	フレイク		胴部	非定形	2	覆土B層	—	20904		
—	フレイク		胴部	非定形	1	覆土B層	—	20906		
—	フレイク		胴部	非定形	4	覆土B層	—	20907		
—	フレイク		胴部	非定形	4	覆土B層	—	20911		
—	フレイク		胴部	非定形	1	覆土B層	—	20912		
—	フレイク		胴部	非定形	1	覆土B層	—	20913		
—	フレイク		胴部	非定形	1	覆土B層	—	20907		
—	フレイク		胴部	非定形	1	覆土B層	—	20906		
—	フレイク		胴部	非定形	1	覆土B層	—	20912		
—	フレイク		胴部	非定形	1	覆土B層	—	20922		
—	フレイク		胴部	非定形	6	覆土B層	—	20922		

図13 H-1・P-2(1)

遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成要因	層界	粘土・シルト・砂（長径2mm未満）				礫（長径2mm以上）				その他の混入物 （名称・量）	備考			
						野外土性	色調		粘着性	堅密度	種類	面積割合（%）	粒径（mm）			形状	風化の程度	
							色名	マンセル表色系					平均					最大
H-1	1	覆土B層	上位	自然堆積	明瞭	≒VI層 細粒のTa-cとTa-d2軽石が部分的に微量に混じる										—		
	2	覆土PB層	中位	自然堆積	画然	壤土	黒褐色	10YR3/2	弱	すぶる堅	Ta-d1・Ta-d2混じる				—			
	3	覆土d1主体層	部分的	自然堆積	画然	埴壤土	にぶい黄褐色	10YR4/3	弱	軟	(Ta-d1主体)				—			
	4	覆土d2主体層	部分的	自然堆積	画然	埴壤土	暗褐色	10YR3/3	強	堅	(Ta-d2主体 SpHが10%程度混じる)				—			
	5	覆土d2・G層	最下位	自然堆積	画然	壤土	暗褐色	10YR3/3	強	堅	Ta-c Ta-d2	10 5	5 20	亜円礫	腐朽	—		
H-1 sp-1	6	柱穴覆土PB層		自然堆積	画然	埴壤土	暗褐色	10YR3/3	中	しよ～軟	Ta-d2	10	2～3 5	亜円礫	腐朽	—		
H-1 掘り上げ土	7	住居構築時の掘り上げ土		人為堆積	画然	VI (II B) 層主体				Ta-d2混じる				—				

遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成要因	層界	粘土・シルト・砂（長径2mm未満）				礫（長径2mm以上）				その他の混入物 （名称・量）	備考			
						野外土性	色調		粘着性	堅密度	種類	面積割合（%）	粒径（mm）			形状	風化の程度	
							色名	マンセル表色系					平均					最大
P-2	8	覆土B層		自然堆積	画然	埴壤土	黒色	10YR1.7/1	強	軟	Ta-c Ta-d2	10～ 20	5 30	亜円礫	腐朽	—	H-1 掘り上げ土	

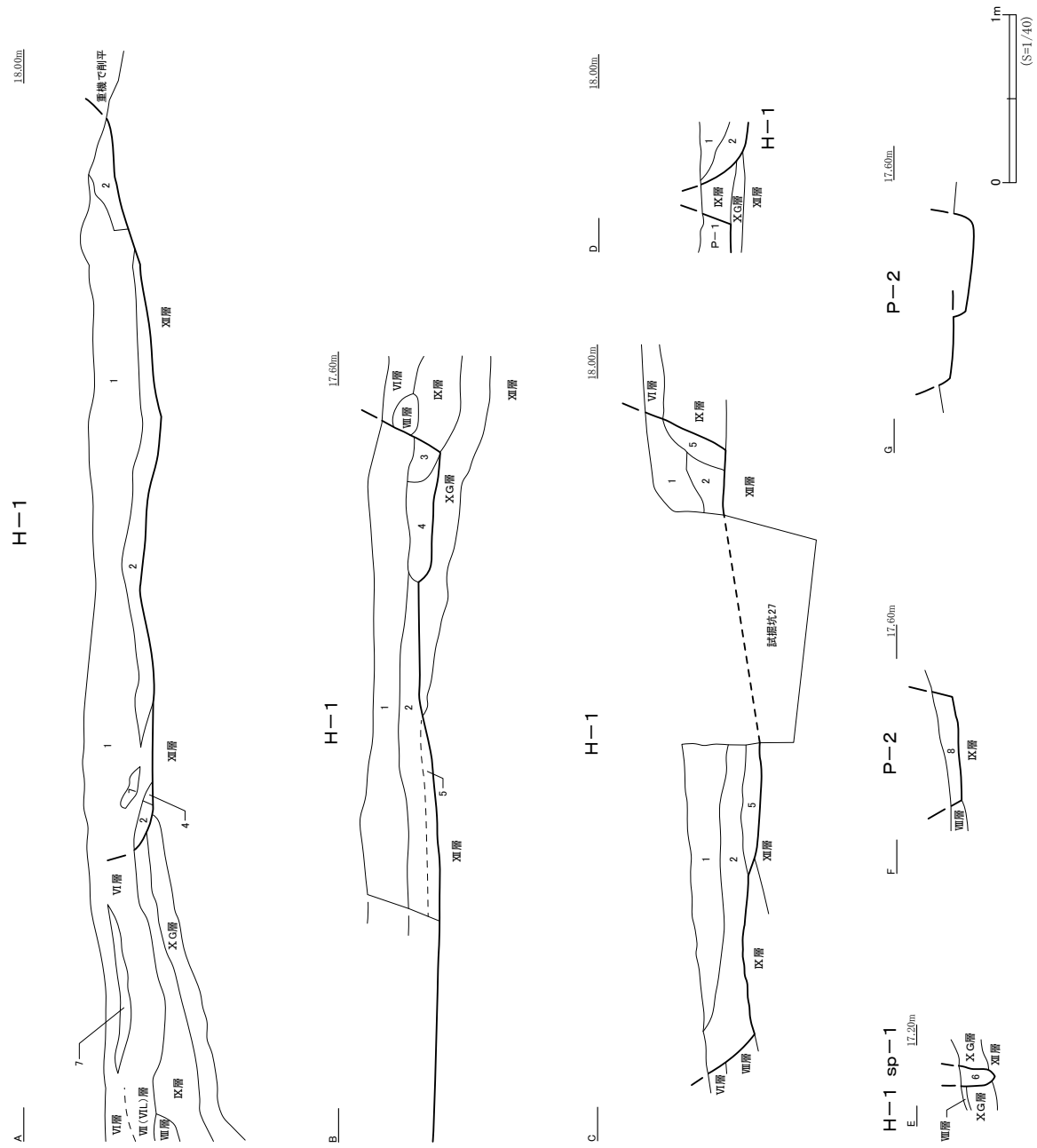


図14 H-1・P-2(2)

H-2 (図15~17 口絵3 図版4・5)

位置 H-17、H・I-18区 **規模** (6.50) × (4.64) / 0.60m **平面形態** 不明

確認・調査 試掘坑27でみつかった第2号住居跡である。はじめに試掘坑の壁の土層断面を記録し、南北と東方向にベルトを設定し、これ沿いにトレンチを掘り進めた。壁らしき段差をみつけたので、ベルトを残し全体を掘り進めていったが、壁らしきこの部分は連続してみられず、全周するものは確認できなかった。部分的に確認できた壁は、北西側で3か所、南側でやや長い範囲1か所、南東側で2か所、やや東寄りに1か所である。この付近の地形は、18ラインのH・Iの中間付近を最高標高地点とする狭い範囲から周囲へ傾斜するため、構築された住居跡の壁は、多くの部分が地山まで掘り込まれず、さらにVI層の黒色土層も斜面で流出したことが、壁を確認できなかった要因と考える。また、残存する壁から推測して3~4軒は想定でき、同じ地点に複数軒が建て替えられたと推測する。念のため、遺物の出土位置から住居跡の範囲を把握できないか努めたが、結論に至る所見は得られなかった。最後にベルトを掘り下げ、遺物出土位置と完掘状況を記録し、付属遺構を調査して完了した。

覆土 上位の覆土B層はVI層主体で、下位は淡い色調の黒色土の覆土P層である。ほかにT a-d 1主体の層が部分的にみられる。

床面・壁 試掘坑27の壁にみられる床面は平坦である。壁は明瞭な段差がある部分を認定した。

重複・近接 H-1・3と近接し、土層断面図ではP-1に切られているようにみえるが、判断できず、この土坑は本住居に関連するものと推測した。

付属遺構

掘り上げ土 南と東方向へのベルトではT a-d 2層主体がみられたが、平面では認識できなかった。

柱穴

s p-1 **規模** 0.17/0.52m **平面形態** 円形/尖

s p-2 **規模** 0.18/0.48m **平面形態** 円形/尖

両者は平成年間に試掘坑27で確認されていた。

s p-3 **規模** 0.34/0.25m **平面形態** 楕円形/平

s p-4 **規模** 0.30/0.20m **平面形態** 円形/平

これらは試掘坑27の床面でみつかった、径の長いものである。

s p-5 **規模** 0.10×0.04/0.04m **平面形態** 円形/(丸~尖)

s p-6 **規模** 0.12×0.08/0.10m **平面形態** 円形/丸

これらは試掘坑27の床面でみつかった。

s p-7 **規模** 0.06/0.06m **平面形態** 円形/(丸~尖)

断面図に記録したよりも深い。

s p-8 **規模** 0.12/0.46m **平面形態** 円形/尖

s p-9 **規模** 0.13×0.04/0.26m **平面形態** 円形/尖

s p-10 **規模** 0.13/0.24m **平面形態** 円形/丸

s p-11 **規模** 0.11×0.05/0.24m **平面形態** 円形/平

s p-12 **規模** 0.15/0.36m **平面形態** 円形/平

遺物出土状況 フレイク、磨製石斧の破片、出土位置から大きく動かしてしまった遺物は層ごとに取り上げ、他は出土位置を記録した。床面や覆土からⅢ・Ⅳ群土器、石鏃、スクレイパー、U・Rフレイク、石核、フレイク、磨製石斧、たたき石、石製品、U・Rレキ、レキが出土した。

時期 出土遺物から縄文時代中期末葉~後期初頭である。

H-2

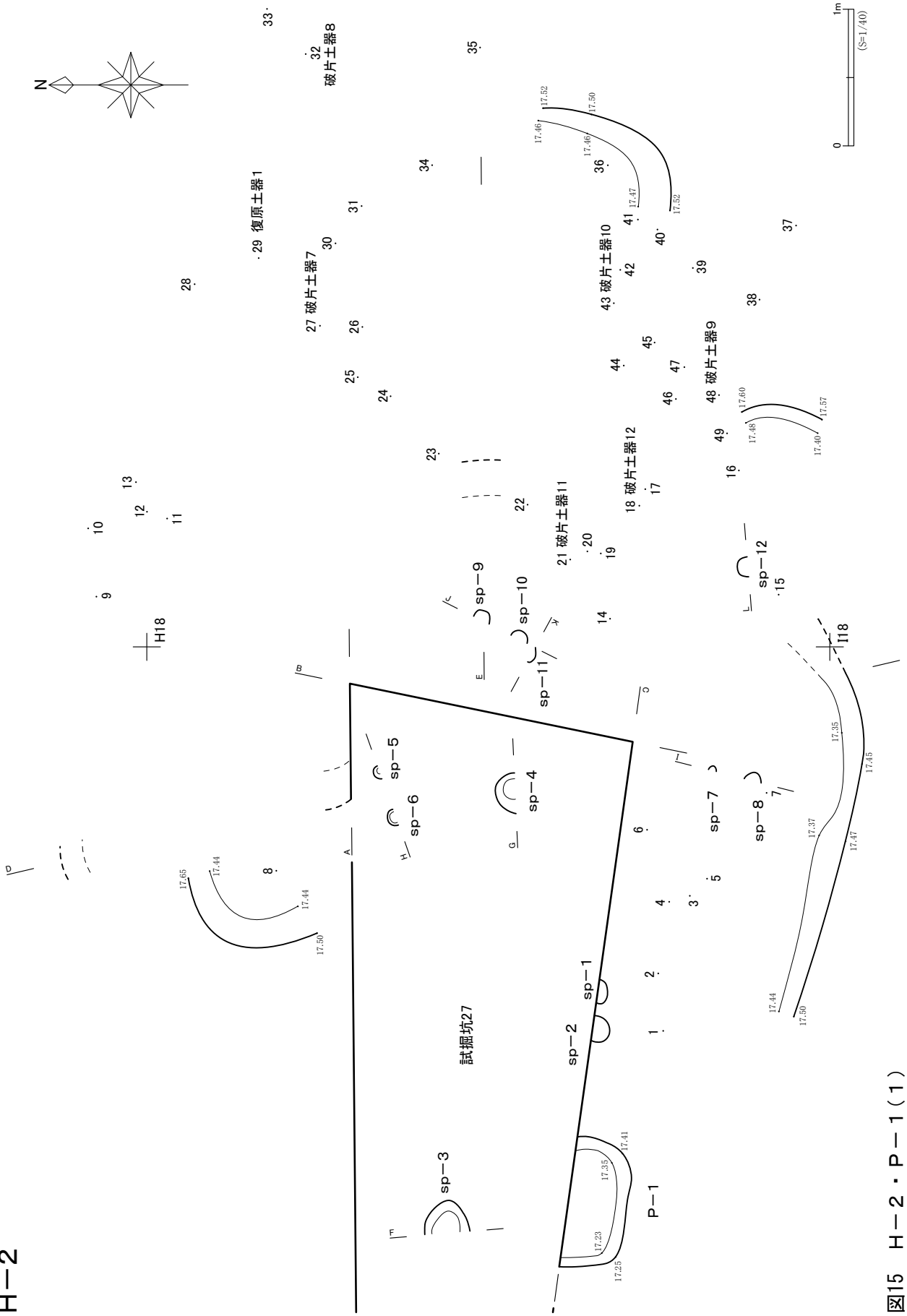


図15 H-2・P-1(1)

H-3 (図17 図版5)

位置 G-18・19区 **規模** 2.90×2.55/2.29×2.44/0.54m **平面形態** 円形

確認・調査 包含層調査中、円形の黒色土を確認した。住居跡と予想し傾斜方向にベルトを設け、これ沿いにトレンチを掘り進めたところ、平坦な面と壁の立ち上がりを確認したので、遺構と認定した。次にトレンチを手掛かりにベルトを残して全体を掘り上げ、土層断面を記録した。その後、ベルトを掘り下げて完掘し、付属遺構を調査した。本住居跡では柱穴はみつからなかった。地山がⅧ・Ⅸ層のT a - d 1・d 2の砂礫主体であることが要因と推測する。

覆土 最上位にはⅥ層主体の覆土B層がレンズ状にみられ、その下位はⅨ層が混じる覆土B O層で、斜面上側の床面直上には覆土O B層が部分的である。

床面・壁 床面はⅧ～Ⅸ層中で概して平坦である。壁は開口して立ち上がる。

重複・近接 H-1・2と近接する。

付属遺構

炉跡焼土

hf-1 規模 0.38×0.24/? m **平面形態** 楕円形?

確認・調査 中央付近の覆土最下層に炭化物がわずかにみられた。焼土があると予想し検出を試みたが、確認できなかった。薄いため少し削っただけで消失したようで、平面範囲も推定である。

遺物出土状況 斜面下にあたる北側で、覆土から土器、石核、フレイク、砥石、台石が出土した。土器は一次整理でⅢ群としたが、二次整理でⅣ群a類と判明したものもある。

時期 出土遺物から縄文時代中期末葉～後期初頭と判断する。

3. 土坑 (図13～17 表15)

P-1 (図15～17 図版6)

位置 H-18区 **規模** 0.97×(0.45)/0.81×(0.36)/0.34m

平面形態 楕円形

確認・調査 平成年間試掘坑27で発見された。北側は削平されている。掘ってみると、楕円形の浅い土坑であった。H-2を切っているとあるが、今回の調査では判断できなかった。出入口等この住居跡に関連するものと推測する。

覆土 Ⅵ層主体でT a - d 2が少量混じる。

坑底面・壁 坑底面はⅨ層T a - d 2中で、曲線的で中央が深い形状、壁はやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 周辺の遺構や出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭と考える。

P-2 (図13・14 図版6)

位置 H-19・20区 **規模** 1.02×0.67/0.94×0.64/0.21m

平面形態 楕円形

確認・調査 H-1西側にある掘り上げ土の調査中、下位でみつかった。楕円形の浅い土坑でH-1に近く、出入口等この住居跡に関連するものと推測する。

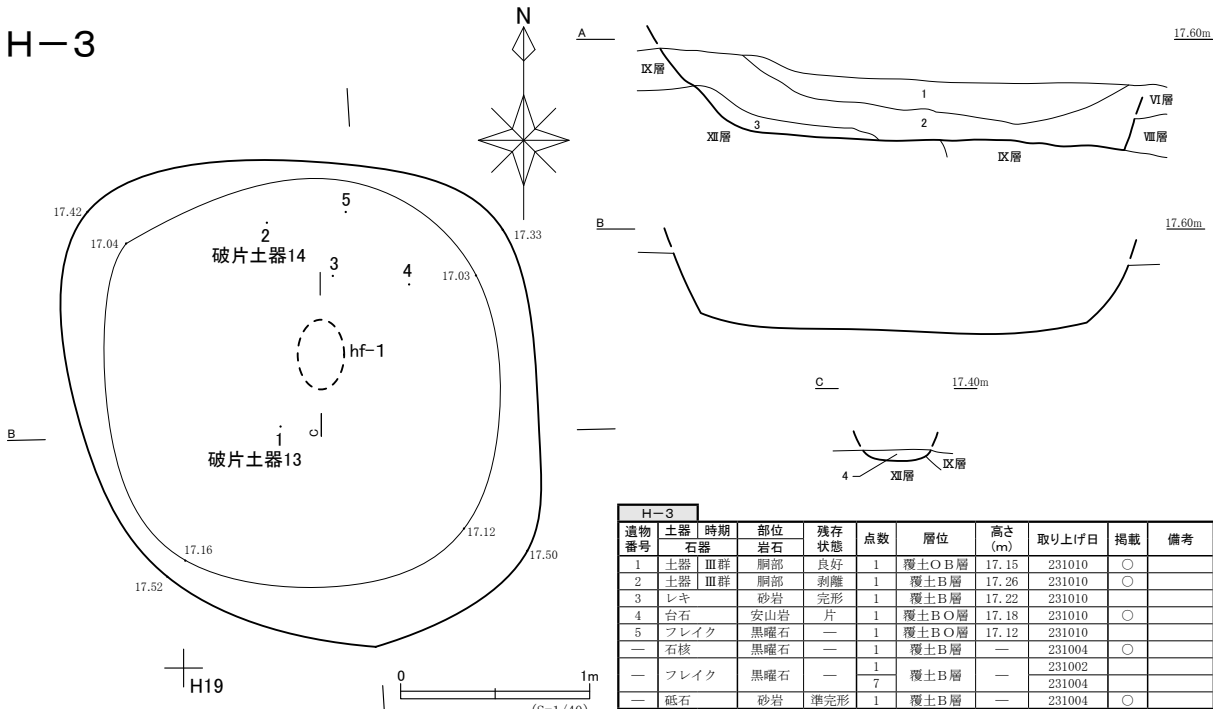
覆土 Ⅵ層主体でT a - d 2が少量混じる。上位にはH-1掘り上げ土が堆積する。

坑底面・壁 エレベーション図の東側の低い部分は掘り過ぎである。坑底面は概して平坦で、壁はやや開いて立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成要因	層界	粘土・シルト・砂(長径2mm未満)				礫(長径2mm以上)				その他の混入物(名称・量)	備考			
						野外土性	色調		粘着性	堅密度	種類	面積割合(%)	粒径(mm)			形状	風化の程度	
							色名	マンセル表色系					平均					最大
H-2	1	覆土B層 上位		自然堆積	明瞭													
	2	覆土PB層 下位		自然堆積	画然	壤土	黒褐色	10YR3/2	弱	軟	Ta-d2	10	5	—	亜円礫	腐朽		
	3	覆土d1主体層 部分的		自然堆積	画然	壤土	にぶい黄褐色	10YR4/3	弱	軟								
H-2 掘り上げ土	4	掘り上げ土H層		人為堆積	画然													
H-2 sp-1	5	柱穴覆土G層		自然堆積	画然	壤土	にぶい黄褐色	10YR4/3	弱	軟	Ta-d2	10	5	—	亜円礫	腐朽		
H-2 sp-2	6	柱穴覆土G層		自然堆積	画然	壤土	にぶい黄褐色	10YR4/3	弱	堅	Ta-d2	10	5	—	亜円礫	腐朽		
H-2 sp-3	7	柱穴覆土PB層		自然堆積	明瞭	砂土	暗褐色	10YR3/3	なし	しょう	Ta-c (主体)	2~3	10		亜円礫~亜角礫	半風化		
	8	柱穴覆土B層		自然堆積	画然	砂壤土	黒褐色	10YR3/1	弱	しょう	Ta-c (主体) Ta-d2	2~3	— 12		亜円礫~亜角礫	腐朽		
H-2 sp-4	9	柱穴覆土PB層		自然堆積	明瞭	砂土	暗褐色	10YR3/3	なし	しょう	Ta-c (主体)	2~3	10		亜円礫~亜角礫	半風化		
H-2 sp-5	10	柱穴覆土B層		自然堆積	画然	埴壤土	黒褐色	10YR3/1	強	しょう								
H-2 sp-6	11	柱穴覆土B層		自然堆積	画然	埴壤土	黒褐色	10YR3/1	強	しょう								
H-2 sp-7	12	柱穴覆土B層		自然堆積	画然	埴壤土	黒褐色	10YR3/1	強	しょう								
H-2 sp-8	13	柱穴覆土B層		自然堆積	画然	埴壤土	黒褐色	10YR2/2	強	しょう	Ta-d2	30	3~5	—	亜円礫	腐朽		
	14	柱穴覆土O層		自然堆積	画然	砂土	赤褐色	(5YR4/8)	—	—	Ta-d2 (主体)	—	30		亜円礫	腐朽		
H-2 sp-9	15	柱穴覆土B層		自然堆積	画然	砂土	黒褐色	10YR3/1	中	しょう	Ta-c	20	2~3	5	亜円礫~亜角礫	半風化		
											Ta-d2				亜円礫	腐朽		
H-2 sp-10	16	柱穴覆土PB層		自然堆積	画然	埴壤土	黒褐色	10YR3/1	中	堅	Ta-c	20	5	—	亜円礫~亜角礫	半風化		
											Ta-d2				亜円礫	腐朽		
H-2 sp-11	17	柱穴覆土PB層		自然堆積	画然	埴壤土	黒褐色	10YR3/2	中	軟	Ta-c Ta-d2	15	5	—	亜円礫	腐朽		
H-2 sp-12	18	柱穴覆土B層		自然堆積	画然	埴壤土	暗褐色	10YR3/3	中	しょう	Ta-c Ta-d2	20	5	—	亜円礫~亜角礫	半風化		

遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成要因	層界	粘土・シルト・砂(長径2mm未満)				礫(長径2mm以上)				その他の混入物(名称・量)	備考			
						野外土性	色調		粘着性	堅密度	種類	面積割合(%)	粒径(mm)			形状	風化の程度	
							色名	マンセル表色系					平均					最大
P-1	19	覆土B層		自然堆積	画然	埴壤土	黒色	10YR1.7/1	強	軟	Ta-c Ta-d2	10 ~20	5	30	亜円礫	腐朽		



H-3										
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
1	土器	Ⅲ群	胴部	良好	1	覆土O層	17.15	231010	○	
2	土器	Ⅲ群	胴部	剥離	1	覆土B層	17.26	231010	○	
3	レキ		砂岩	完形	1	覆土B層	17.22	231010		
4	台石		安山岩	片	1	覆土B層	17.18	231010	○	
5	フレイク		黒曜石	—	1	覆土B層	17.12	231010		
—	石核		黒曜石	—	1	覆土B層	—	231004	○	
—	フレイク		黒曜石	—	1	覆土B層	—	231002		
—					7			231004		
—	砥石		砂岩	準完形	1	覆土B層	—	231004	○	

遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成要因	層界	粘土・シルト・砂(長径2mm未満)				礫(長径2mm以上)				その他の混入物(名称・量)	備考			
						野外土性	色調		粘着性	堅密度	種類	面積割合(%)	粒径(mm)			形状	風化の程度	
							色名	マンセル表色系					平均					最大
H-3	1	覆土B層 (VI層主体)		自然堆積	明瞭	砂壤土												
	2	覆土B O層 (VI層にIX・Ⅻ層混じる)		自然堆積	明瞭~画然	埴壤土	黒褐色	10YR2/3	中	堅								
	3	覆土O B層 (IX層にVI・Ⅻ層混じる)		自然堆積	画然	壤土	暗褐色	10YR3/3	中	堅	Ta-d2	15	5~8		亜円礫	腐朽		
H-3 hf-1	4	焼土R層		被熱	判然	砂壤土				すこぶる堅	Ta-d2	10	—	5	亜円礫	腐朽	炭化物・中量 IX・Ⅻ層被熱	

図17 H-2(3)・H-3

時 期 周辺の遺構や出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭と考える。

4. 石組炉（図18 表15・18・20・27）

S F - 1（図18 図版6）

位 置 I - 11区 **規 模** 0.65×0.59m **平面形態** 方形（コの字状）

確認・調査 包含層調査中、楕円礫が数個並んでみつかった。石組炉であると予想し、周囲を丹念に掘り進めたところ、「コ」の字状の配列が認められた。下位にトレンチを設けて掘り下げたところ、色調が橙色に変化している焼土の断面がわずかにみられたが、非常に薄いので図化できず、平面の広がりも不明瞭であった。

遺物出土状況 炉石は13点で、2点が接合したものは、すり石を転用したものである。石組の開口部付近から、棒状の炭化材が出土し、近辺からIV群土器、黒曜石製フレイク、台石、レキが出土した。出土層位はB層と呼称したが、これはVI層である。

時 期 出土土器から縄文時代後期初頭と考えられ、出土炭化材の放射性炭素年代測定の暦年較正用年代は3866±21年である。 (末光)

5. 焼土（図18 表15・18・20）

F - 1（図18 図版6）

位 置 I - 8区 **規 模** 楕円形？ **平面形態** 0.33×(0.13)／0.12m

確認・調査 包含層調査中、黄色味を帯びた土を確認した。北側部分はすでに掘り下げており、土層断面はそこで記録した。焼土は明褐色（7.5YR5/6）を呈する。

遺物出土状況 近くからIII群土器、石鏃、フレイクが出土した。

時 期 出土遺物から縄文時代中期末葉と考えられる。

6. 土器集中（図18・19 表16・18・20）

P S - 1（図18 図版7）

位 置 F - 8区 **層 位** VI層 **規 模** 0.51×0.42m

確認・調査 包含層調査中、VI層でIV群土器がまとまって出土し、範囲を記録して取り上げた。IV群a類余市式の復原土器が得られた。

時 期 縄文時代後期初頭である。

P S - 2（図19 図版7）

位 置 I・J - 9区 **層 位** VI層 **規 模** 0.74×0.68m

確認・調査 包含層調査中、VI層で土器がまとまって出土し、範囲を記録して取り上げた。土器はIII群b類の破片、復原個体はIV群a類の余市式で、ほかに石鏃、U・Rレキ、レキが出土した。

時 期 縄文時代中期末葉～後期初頭である。

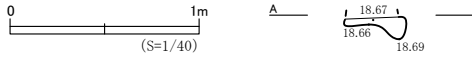
P S - 3（図19 図版7）

位 置 I - 13・14区 **層 位** VI層 **規 模** 0.40×0.13m

確認・調査 包含層調査中、VI層で土器がまとまって出土し、範囲を記録して取り上げた。III群b類とIV群a類の余市式で復原できなかつた。ほかにU・Rレキも出土した。

F-1

19

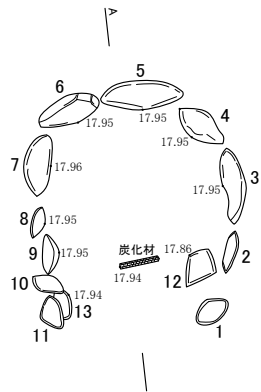
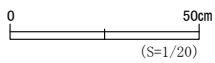
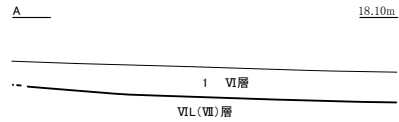
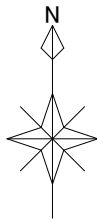


F-1										
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
—	土器	III群	胴部	良好	1	VI層	—	230823	○	
—	石鏃	—	黒曜石	片	1	VI層	—	230823	○	
—	フリイク	—	黒曜石	—	93	VI層	—	230823		
—	—	—	—	—	1	VI層	—	230823		

遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成要因	層界	粘土・シルト・砂 (長径2mm未満)				礫 (長径2mm以上)				その他の混入物 (名称・量)	備考			
						野外土性	色調		粘着性	堅密度	種類	面積割合 (%)	粒径 (mm)			形状	風化の程度	
							色名	マンセル表色系					平均					最大
F-1	1	焼土R層	—	被熱	漸変	埴壤土	明褐色	7.5YR5/6	強	軟	—	—	—	—	VII (VII) 層に同じ	—	VII (VII) 層被熱	

SF-1

111

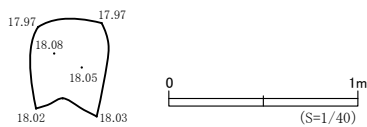
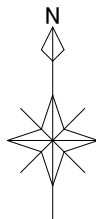


SF-1										
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
1	レキ(炉石)	—	片麻岩	完形	1	B層	17.94 ~ 17.95	230929	○	
2	レキ(炉石)	—	砂岩	完形	1	B層	17.95 ~ 17.96	230929	○	被熱
3	レキ(炉石)	—	砂岩	完形	1	B層	17.95 ~ 17.96	230929	○	被熱
4	レキ(炉石)	—	砂岩	完形	1	B層	17.95 ~ 17.96	230929	○	被熱
5	台石(炉石)	—	花崗岩	片	1	B層	17.95 ~ 17.98	231002	○	被熱
6	レキ(炉石)	—	チャート	完形	1	B層	17.93 ~ 17.98	230929	○	被熱
7	レキ(炉石)	—	砂岩	完形	1	B層	17.94 ~ 17.96	230929	○	被熱
8	レキ(炉石)	—	片麻岩	完形	1	B層	17.95	230929	○	被熱
9	レキ(炉石)	—	泥岩	完形	1	B層	17.49 ~ 17.95	230929	○	被熱
10	U・Rレキ(炉石)	—	片麻岩	完形	1	B層	17.94 ~ 17.95	230929	○	
11	U・Rレキ(炉石)	—	片麻岩	片	1	B層	17.93 ~ 17.95	230929	○	被熱 13と接合
12	レキ(炉石)	—	片麻岩	完形	1	B層	17.89 ~ 17.91	231002	○	被熱
13	U・Rレキ(炉石)	—	片麻岩	片	1	B層	17.85 ~ 17.87	231002	○	被熱 11と接合
—	土器	IV群	胴部	良好	1	B層	—	230920	○	
—	フリイク	—	黒曜石	—	4	B層	—	230920		
—	—	—	—	—	1	B層	—	230922		
—	—	—	—	—	2	B層	—	231002		
—	フリイク	—	黒曜石	—	2	B層	—	230920		被熱
—	—	—	—	—	1	B層	—	230929		被熱
—	—	—	—	—	2	B層	—	231002		被熱
—	台石	—	安山岩	片	1	B層	—	230920	○	
—	レキ	—	砂岩	片	1	B層	—	230920		
—	炭化材	—	—	—	—	VI層	17.94	230922		年代測定

遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成要因	層界	粘土・シルト・砂 (長径2mm未満)				礫 (長径2mm以上)				その他の混入物 (名称・量)	備考			
						野外土性	色調		粘着性	堅密度	種類	面積割合 (%)	粒径 (mm)			形状	風化の程度	
							色名	マンセル表色系					平均					最大
SF-1	1	B層	—	腐植	漸変	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
—	—	焼土	—	被熱	漸変	埴壤土	橙色	7.5YR6/8	中	すこぶる堅	Ta-c Ta-d1	2 ~ 3	2 ~ 3	—	亜円礫 ~ 亜角礫 亜円礫	半風化 腐朽	—	(薄層) VII (VII) 層被熱

PS-1

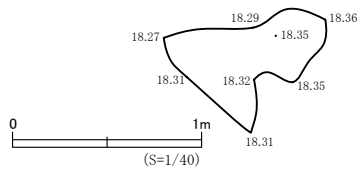
F8



PS-1										
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	掲載	備考
—	土器	IV群	口縁部	良好	3	VI層	17.97 ~ 18.08	230818		
—	—	—	—	剝離	1	VI層	—	230818		
—	—	—	—	小破片	2	VI層	—	230818		
—	—	—	—	良好	17	VI層	—	230818		
—	—	—	—	剝離	13	VI層	—	230818		
—	—	—	—	小破片	18	VI層	—	230818		

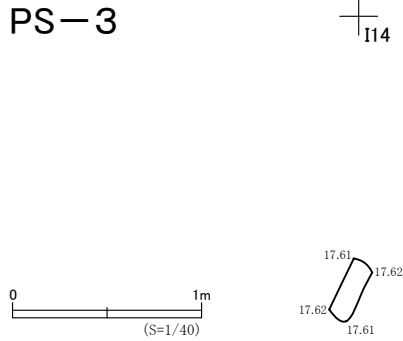
図18 F-1・SF-1・PS-1

PS-2



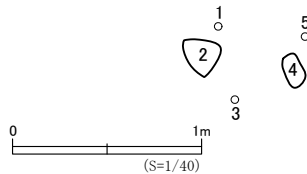
PS-2									
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	備考
—	土器	IV群	口縁部	良好	5	VI層	18.26 ~ 18.36	230831	
			胴部	良好	14	VI層		230831	
			胴部	良好	4	VI層		230831	
			胴部	剥離	2	VI層		230831	
			小破片	9	VI層	230831			
—	石鏝	黒曜石	完形	1	VI層		230831		
—	U・Rレキ	凝灰岩	片	1	VI層		230831	被熱	
—	レキ	安山岩	片	1	VI層		230831		

PS-3



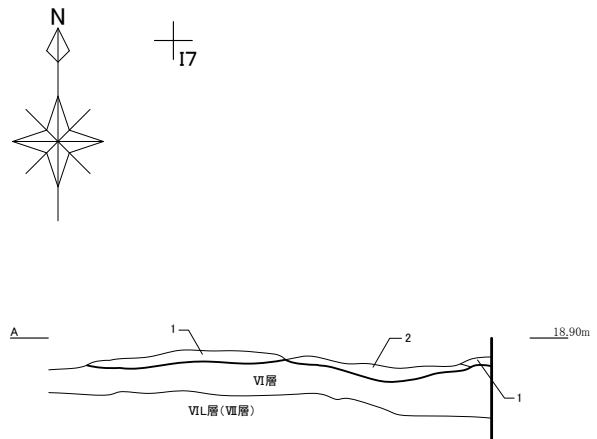
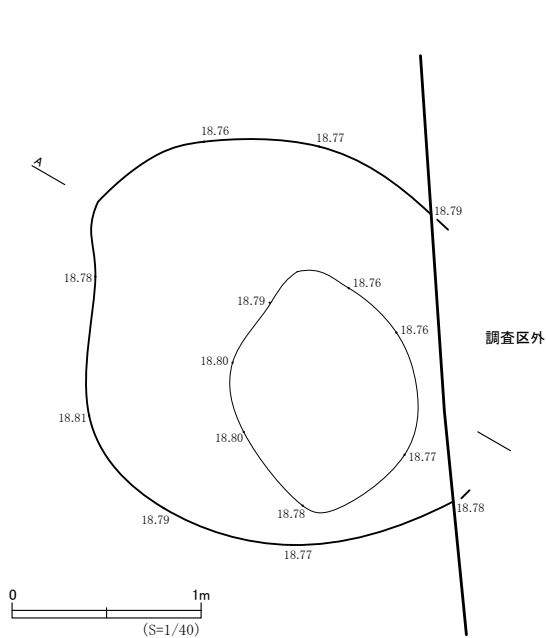
PS-3										
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	備考	
—	土器	III群	口縁部	良好	2	VI層	17.61 ~ 17.64	230920		
				剥離	2	VI層		230920		
			胴部	良好	5	VI層		230920		
				剥離	15	VI層		230920		
				小破片	7	VI層		230920		
—	U・Rレキ	砂岩	片	1	VI層		230920			
—	土器	III群	胴部	良好	3	VI層	17.61 ~ 17.64	230921		
				剥離	1	VI層		230921		
			口縁部	小破片	1	VI層		230921		
—	土器	IV群	胴部	剥離	4	VI層	17.61 ~ 17.64	230921		
				小破片	7	VI層		230921		
			III群	胴部	良好	2		VI層	230922	接合
					剥離	4		VI層	230922	
				剥離	1	VI層		230922		
—	土器	III群	胴部	剥離	2	VI層		230922		

PS-4



PS-4									
遺物番号	土器	時期	部位	残存状態	点数	層位	高さ(m)	取り上げ日	備考
1	土器	III群	口縁部	良好	2	VI層	17.84 ~ 17.85	231010	接合
			胴部	良好	4				
2	土器	III群	胴部	良好	1	VI層	17.83 ~ 17.85	231010	
3	土器	III群	胴部	良好	3	VI層	17.83 ~ 17.85	231010	
4	土器	III群	口縁部	良好	1	VI層	17.86 ~ 17.89	231010	
			胴部	良好	3				
5	土器	IV群	胴部	剥離	1	VI層	17.88 ~ 17.89	231010	

HO-1



遺構名	断面図番号	大別層	細分層	生成要因	層界	粘土・シルト・砂(長径2mm未満)				礫(長径2mm以上)				その他の混入物 (名称・量)	備考			
						野外土性	色調		粘着性	堅密度	種類	面積割合(%)				形状	風化の程度	
							色名	マンセル表色系				平均	最大					
HO-1	1	掘り上げ土(HO)	Y層	人為堆積	画然	植壊土	黒褐色	10YR3/2	強	堅	Ta-c	10	20	45	亜円礫	半風化	—	
	2		B層	人為堆積	画然	VI層主体				Ta-d2	少量	(細~中粒)		亜円礫	風化	—		
										Ta-d2	少量	(細~中粒)		亜円礫	腐朽	—		

図19 PS-2・3・4・HO-1

時 期 縄文時代中期末葉～後期初頭である。

PS-4 (図19 図版7)

位 置 F・G-11区 層 位 VI層 規 模 0.65×0.44m

確認・調査 包含層調査中、VI層で土器がまとまって出土し、範囲を記録して取り上げた。Ⅲ群b類の破片と復原土器はⅣ群a類余市式である。

時 期 縄文時代中期末葉～後期初頭である。

7. 掘り上げ土

HO-1 (図19 表15 図版7)

位 置 I-7区 規 模 2.14×1.97/0.18m 平面形態 円形

確認・調査 包含層調査中、黄～橙色の礫が混じる部分が円形にみられ、一部は調査区外へ続いていた。混入する礫はⅨ層T a-d 2で、掘り上げ土であると判断した。トレンチで土層断面を観察し、V層のT a-cの有無で二つに分層した。近傍に掘り込んで構築された遺構はみられず、調査区外にある可能性が考えられる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時 期 周辺の出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。(吉田)

8. 遺構出土の遺物

(1) 復原土器 (図20 表21～24 図版11)

H-2 出土 1はわずかに開く口縁部から直線的に胴部へ至る器形で、口唇部には縄文が施され、断面は角形である。口縁部には貼付帯に挟まれた無文帯がみられ、貼付帯上はRLによる縄文と縄線文が施され、器面は同原体による縦位施文である。

PS-1 出土 2は口径が広いもので、口縁部から直線的に胴部へいたる器形である。貼付帯により幅広になる口唇部の断面は角形で、口縁部には円形刺突文がめぐる。器面はLRで、貼付帯上は四段目を除いて別原体である。この段は器面と同時施文と観察される。

PS-2 出土 3は口縁部が内湾し、頸部～胴部上位が最大幅で底部へと曲線的にすぼまる器形である。口唇部はナデ調整で断面は丸形である。地文はRLで、口縁部には同原体による縄線文が施された縦・横位の貼付がある。

PS-4 出土 4は直立する口縁部から胴部へ直線的にすぼまる器形である。貼付帯は低く器面と明瞭な段差を有さない。器面はRLの縦位回転施文である。

(2) 破片土器 (図20・21 表25 図版11・12)

H-1 出土 5はLR原体の回転方向を変えて施した羽状縄文がみられる。6はH-1掘り上げ土とH-2覆土B層出土が接合したもので、RL縄文が施される。7・8は同一個体で小型のものである。文様は浅く判然としなが、RLRと推測する。9の口縁部は全体的に剥離・磨耗し、文様が残存しない。10の器面は無文で、貼付帯はRL原体による施文である。

H-2 出土 11は波状口縁で口唇部は撚紐圧痕文、器面にはLR縄文が施される。12の地文はLRである。13はLR原体の縦位回転施文である。14はLRの結束第1種斜行縄文である。15はLR縄線文が施される。16はRL縄文がみられ、器面と貼付帯は別施文である。

H-3 出土 17はLRによる施文で、貼付帯の一部は、RL原体を縦位回転させ器面と同時に施

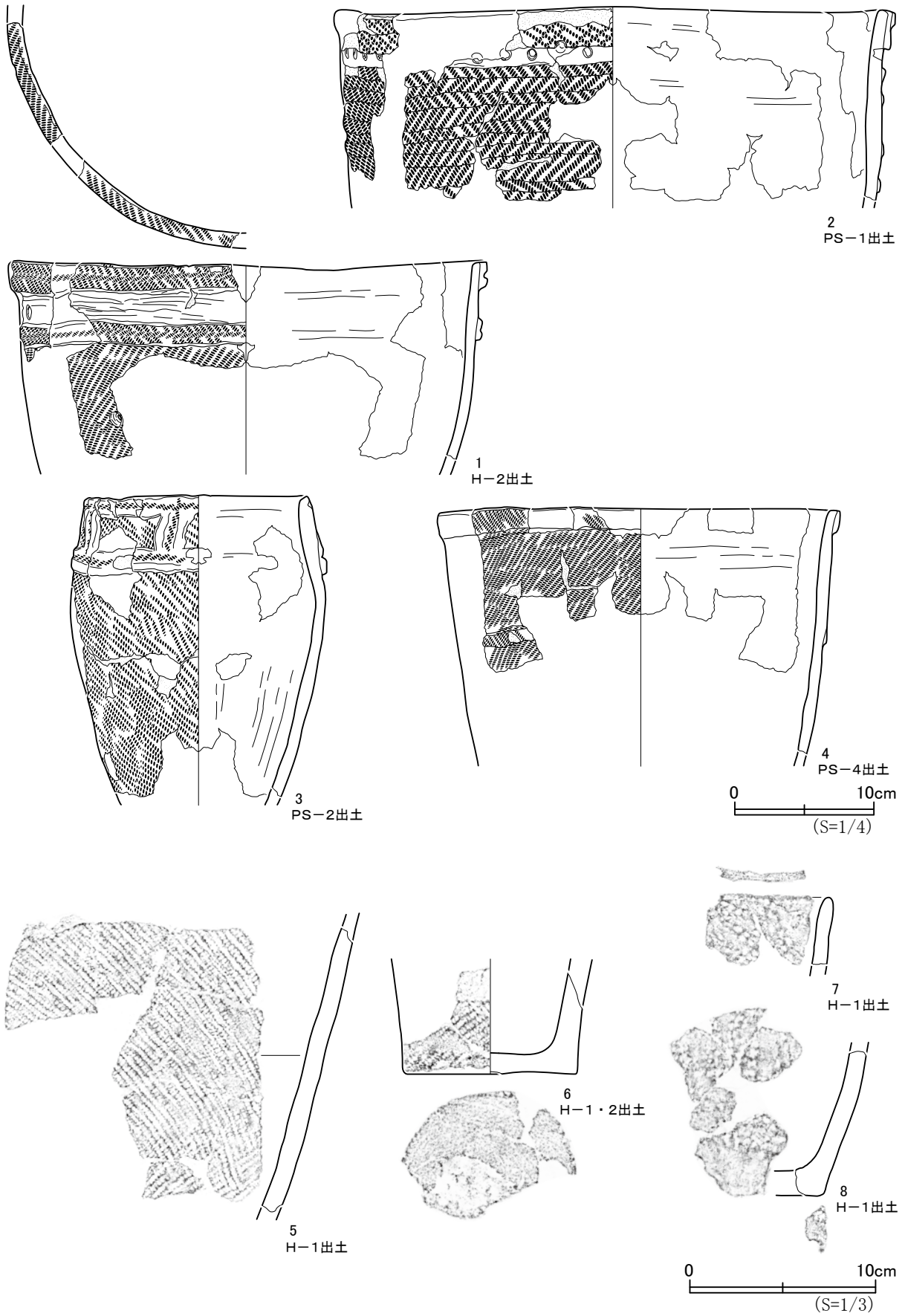


図20 遺構出土の土器(1)

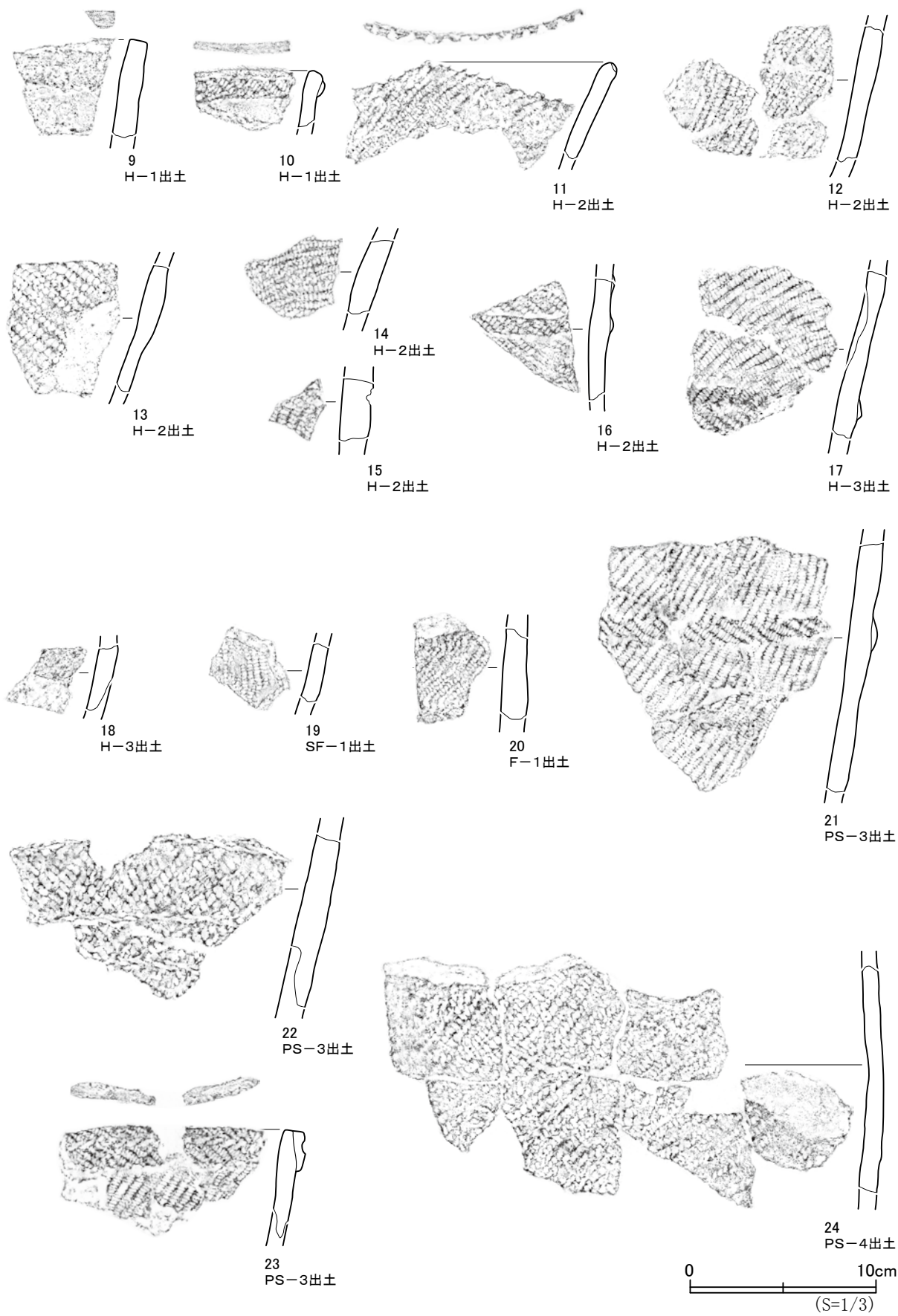


図21 遺構出土の土器(2)

している。18は外面に文様がみられない。

S F - 1 出土 19は外面にR L縄文が施される。

F - 1 出土 20の斜行縄文はL R結束第1種である。

P S - 3 出土 21の原体はR Lで、器面は縦位、貼付帯は横位回転である。22の縄文は複節で、撚紐端部の回転圧痕も観察される。23の器面は縦位施文で、貼付帯上は横位施文の縄文と縄線文である。

P S - 4 出土 24はL Rの結束第1種斜行縄文が施される。

(3) 剥片石器 (図22 表26 図版12)

石鏃

H - 1 出土 1は背腹両面に剥離面を残す。2は両側縁が曲線的である。

H - 2 出土 3は有茎で機能部は三角形である。4も有茎で先端部と基部を欠損する。5は基部で両側縁は直線的である。

F - 1 出土 6は黒曜石製で基部のみである。

P S - 2 出土 7は有茎で左右非対称である。

スクレイパー

H - 2 出土 8は原礫面を有する素材で、粗めの剥離がみられる。

H - 1 出土 9は頁岩製で、背腹両面の周縁に加工痕がみられる。

石核

H - 2 出土 10は黒曜石の石核で、表裏両面に剥離痕がみられる。

H - 3 出土 11は上端面に原礫面を有し、広い剥離痕が観察される。

(4) 礫石器・石製品 (図22 表26 図版12)

磨製石斧

H - 1 出土 12は緑色泥岩製で、層理に沿って薄く剥がれるように割れた破片3点が接合した。

H - 2 出土 13は両側縁が刃部側へと若干広がる形状で、剥離痕と研磨痕がみられる。14は刃部を欠損し、表面は研磨加工で生じた明瞭な稜線が観察される。

たたき石

H - 2 出土 15は緑色泥岩製で周縁にたたき痕がみられる。16は上下両端部に使用痕を有する。

砥石

H - 2 出土 17・18の石材は細粒で軟質な砂岩で、同一個体かもしれない。

H - 3 出土 19は表面に明瞭にくぼむ使用面が観察される。

台石?

H - 3 出土 20は図化した平坦面が使用痕と推測する。

S F - 1 出土 21は平坦な表面が使用痕と推測する。

石製品

H - 2 出土 22は周縁の一部に剥離痕がみられ、磨製石斧未製品の可能性もある。

すり石

S F - 1 出土 23は接合したもので、下縁部の剥離は使用で生じたと推測する。

(末光)

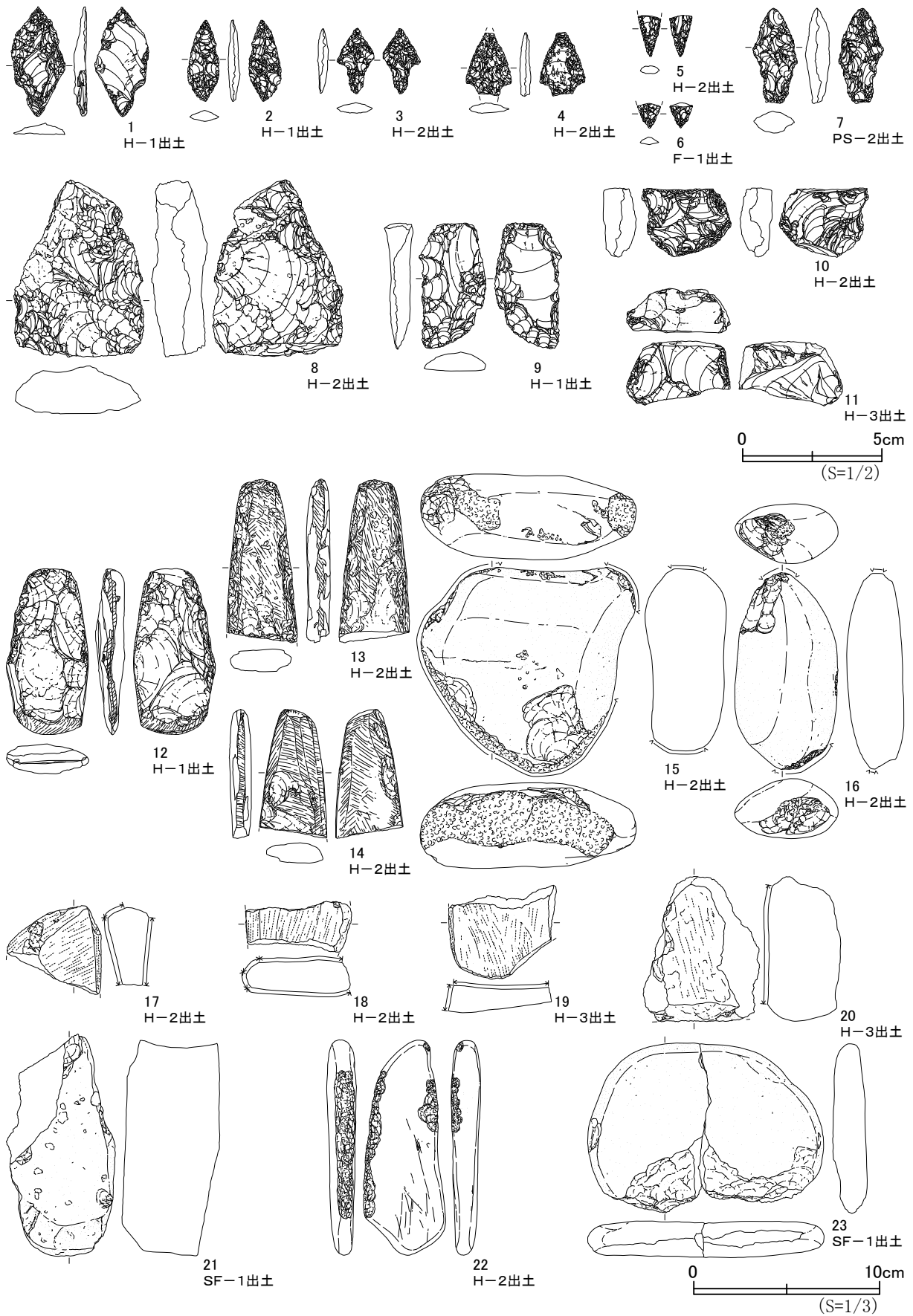


図22 遺構出土の石器

表13 竪穴住居跡一覧表

遺構種別	遺構名	図	図版	グリッド	平面形態	規模 (m)					付属遺構		出土遺物			重複・近接	備考
						確認面		底面・坑底面		最大深	種別	名称	床面	付属遺構	覆土		
						長径	短径	長径	短径								
竪穴住居跡	H-1	13・14	2・3	H-18・19区	円形 ～ 隅丸 方形	4.40	4.00	3.72	3.66	0.68	柱穴 掘り上げ 土	sp-1	IV群土器 石鏃 フレイク 磨製石斧 レキ	IV群土器 石鏃 スクレイパー フレイク 磨製石斧 レキ	III・IV群土器 石鏃 スクレイパー フレイク 磨製石斧 レキ	H-2・3に近接 P-1・2に近接	試掘坑27
	H-2	15・16・17	4・5	H-17、 H・I -18区	不明	(6.50)	(4.64)	—	—	0.60	柱穴	sp-1~12	—	—	III・IV群土器 石鏃 スクレイパー U・Rフレイク 石核 フレイク 磨製石斧 たたき石 石製品 U・Rレキ レキ	H-1・3に近接 P-1に 切られる?	試掘坑27
	H-3	17	5	G- 18・19区	円形	2.90	2.55	2.29	2.44	0.54	伊跡焼土	hf-1	—	—	IV群土器 石鏃 フレイク 砥石 台石 レキ	H-1・2に近接	

表14 竪穴住居跡付属遺構一覧表

遺構名	種別	名称	図	図版	形態		規模 (m)				出土遺物	備考		
					平面	先端部 断面	確認面		底面・坑底面				最大深 最大厚	
							長径	短径	長径	短径				
H-1	柱穴	sp-1	13・14	3	円形	丸～尖	0.12		—		0.22	IV群土器		
	掘り上げ土			3	不整な楕円形	—	2.07	1.09	—		0.40	III群土器	H-1 覆土に流れ込み P-2 上部に堆積	
H-2	柱穴	sp-1	15	4	円形	尖	0.17		—		0.52	—	試掘坑27	
		sp-2		4	円形	尖	0.18		—		0.48	—	試掘坑27	
		sp-3		5	楕円形	平	0.34		—		0.25	—		
		sp-4		—	円形	平	0.30		—		0.20	—		
		sp-5		—	円形	(丸～尖)	0.10		0.04		0.04	—		
		sp-6		—	円形	丸	0.12		0.08		0.10	—		
		sp-7		—	円形	(丸～尖)	0.06		—		0.06	—		
		sp-8		—	円形	尖	0.12		—		0.46	—		
		sp-9		17	5	円形	尖	0.13		0.04		0.26	—	
		sp-10			5	円形	丸	0.13		—		0.24	—	
		sp-11		5	円形	平	0.11		0.05		0.24	—		
		sp-12		4	円形	平	0.15		—		0.36	—		
H-3	焼土	hf-1	17	5	楕円形?	—	0.38	0.24	—		—			

表15 遺構一覧表

遺構種別	遺構名	図	図版	グリッド	確認面	特徴	規模 (m)					出土遺物		備考
							確認面		底面・坑底面		最大深 最大厚	土器	石器	
							長径	短径	長径	短径				
土坑	P-1	15・16・17	6	H-18区	楕円形	浅い	0.97	(0.45)	0.81	(0.36)	0.34	—	—	試掘坑27 H-2を切る?
	P-2	13・14	6	H- 19・20区	楕円形	浅い	1.02	0.67	0.94	0.64	0.21	—	—	
石組炉	SF-1	18	6	I-11区	方形 (コの字状)	焼土: 橙色 (7.5YR6/8)	0.65	0.59	—		—	IV群	フレイク 台石 U・Rレキ レキ	焼土は薄い 炭化材
焼土	F-1	18	6	I-8区	楕円形?	焼土: 明褐色 (7.5YR5/6)	0.33	(0.13)	—		0.12	III群	石鏃 フレイク	北側部分掘り下げ
掘り上げ土	H0-1	19	7	I-7区	円形	T a - d 2 混じりの土層	2.14	1.97	—		0.18	—	—	東側の一部は調査区外

表16 遺物集中一覧表

遺構種別	遺構名	図	図版	グリッド	確認 層位	図化 内容	分布範囲 形状	規模 (m)		出土遺物		備考
								長径	短径	土器	石器	
土器集中	PS-1	18	7	F-8区	VI層	範囲	楕円形	0.51	0.42	IV群	—	
	PS-2	19	7	I・J-9区	VI層	範囲	不整形	0.74	0.68	III・IV群	石鏃 U・Rレキ レキ	
	PS-3	19	7	I-13・14区	VI層	範囲	楕円形	0.40	0.13	III・IV群	U・Rレキ	
	PS-4	19	7	F・G-11区	VI層	範囲	—	0.65	0.44	III・IV群	—	

表17 竪穴住居跡出土土器点数表

遺構名			H-1					H-2			H-3				合計		
遺物種別 / 層位			覆土B層	覆土PB層	掘上土B層	床面	付屬遺構	小計	覆土B層	覆土PB層	小計	覆土B層	覆土BO層	覆土OB層			小計
時期	部位	残存状態															
III群	口縁部	良好	1						2							3	3
		剥離														0	
		磨耗														0	
		小破片														0	
	底部	良好			2											2	8
		剥離														0	
		磨耗														0	
		小破片			6											6	
	胴部	良好	9	7					20	1				1		38	51
		剥離	2						1							4	
		磨耗							2							2	
		小破片	3						4							7	
	不明	良好														0	0
		剥離														0	
		磨耗														0	
		小破片														0	
小計			30					30			2				62		
IV群	口縁部	良好	2				1		1							4	4
		剥離														0	
		磨耗														0	
		小破片														0	
	底部	良好														0	0
		剥離														0	
		磨耗														0	
		小破片														0	
	胴部	良好	1			1			13							15	22
		剥離		1					6							7	
		磨耗														0	
		小破片														0	
	不明	良好														0	0
		剥離														0	
		磨耗														0	
		小破片														0	
小計			6					20			0				26		
合計			36					50			2				88		

表18 石組炉・焼土・土器集中出土土器点数表

遺構名			SF-1			F-1		PS-1		PS-2		PS-3		PS-4		合計		
遺物種別 / 層位			B層	VI層	小計	VI層	小計	VI層	小計	VI層	小計	VI層	小計	VI層	小計			
時期	部位	残存状態																
III群	口縁部	良好										2		3		5	7	
		剥離			0		0		0		0	2	4		3	2		
		磨耗														0		
		小破片														0		
	底部	良好														0	0	
		剥離			0		0		0		0		0		0	0		
		磨耗														0		
		小破片														0		
	胴部	良好				1					14		14		11		40	69
		剥離					1					17	40	3	14	20		
		磨耗			0								9			0		
		小破片														9		
	不明	良好														0	0	
		剥離			0		0		0		0		0		0	0		
		磨耗														0		
		小破片														0		
小計			0			1		0		14		44		17		76		
IV群	口縁部	良好						3		5						8	12	
		剥離			0		0	1	6		5		1		0	1		
		磨耗														0		
		小破片							2			1				3		
	底部	良好														0	0	
		剥離			0		0		0		0		0		0	0		
		磨耗														0		
		小破片														0		
	胴部	良好	1						17		4		4	11	2	22	77	
		剥離			1		0		13	48	2	15	4			21		
		磨耗											7			0		
		小破片							18		9					34		
	不明	良好														0	0	
		剥離			0		0		0		0		0		0	0		
		磨耗														0		
		小破片														0		
小計			1			0		54		20		12		2		89		
合計			1			1		54		34		56		19		165		

表19 竪穴住居跡出土石器点数表

遺構名			H-1					H-2			H-3			合計			
器種名・分類 / 層位			覆土 B層	覆土 P層	掘上土 B層	床面	付属 遺構	小計	覆土 B層	覆土 P層	小計	覆土 B層	覆土 B・O層	覆土 O層	小計	合計	
器種	残存状態	岩石															
剥片石器	石鏃	完形	黒曜石			1		1							2	5	
		準完形	黒曜石	1				1							2		
		片	黒曜石					1							1		
	スクレイパー	完形	黒曜石					1							0	1	2
		準完形	頁岩	1											1		
	U・Rフレイク		黒曜石					0	3		3				0	3	3
	石核		黒曜石					0	3		3	1			1	4	4
フレイク		黒曜石	57	3		2	62	182	1	183	8	1		9	254	254	
剥片石器 小計			65					193			10			268			
礫石器	磨製石斧	完形	緑色泥岩	3											3	31	
		準完形	緑色泥岩						2						2		
		片	緑色泥岩	13					13						26		
	たたき石	完形	泥岩					0		1					0	1	2
			緑色泥岩							1					1		
	砥石	準完形	砂岩					0				1			1	5	
半形		砂岩						1						1			
台石	片	砂岩						3						3	1		
	片	安山岩					0				1			1			
礫石器 小計			16					21			2			39			
石製品	石製品	完形	泥岩				0		1	1				0	1	1	
	石製品 小計			0					1			0			1		
レキ	U・Rレキ	完形	安山岩				0	1						0	1	2	
			花崗岩						1						1		
	レキ	完形		安山岩					1						1	6	
				砂岩					1			1			2		
				泥岩					1	1					2		
				片麻岩					1						1		
		片	安山岩				1		2					0	2	6	
	凝灰岩					1							1				
	片麻岩					1							3				
レキ 小計			1					12			1			14			
合計			82					227			13			322			

表20 石組炉・焼土・土器集中出土石器点数表

遺構名			SF-1			F-1		PS-2		PS-3		合計			
器種名・分類 / 層位			B層	VI層	小計	VI層	小計	VI層	小計	VI層	小計	合計			
器種	残存状態	岩石													
剥片石器	石鏃	完形	黒曜石			0		1	1		0	1	2		
		片	黒曜石				1					1			
	フレイク		黒曜石	6	1	7	94	94		0		101	101		
	(被熱) フレイク		黒曜石	5		5						5	5		
剥片石器 小計			12			95		1		0		108			
礫石器	(被熱) 台石	片	花崗岩	1		1		0		0	0	1	1		
	台石	片	安山岩	1		1		0		0	0	1	1		
	礫石器 小計			2			0		0		0		2		
レキ	U・Rレキ	完形	片麻岩	1								1	3		
		片	安山岩			1		0	1	1		1			
	(被熱) U・Rレキ	片	凝灰岩						1	1		0	1	3	
			片麻岩	2		2		0				2			
	レキ	完形	片麻岩	2								0	2	4	
		片	安山岩			3		0	1	1		0	1		
	(被熱) レキ	完形	砂岩	1									1	7	
			砂岩	4									4		
			泥岩	1					0				0		1
			チャート	1			7		0				0		1
	片麻岩	1									1				
レキ 小計			13			0		3		1		17			
合計			27			95		4		1		127			

表21 H-2 出土復原土器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	日付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)		
								器高	口径	底径						
20	1	11	H-2	覆土6層	0922	29	1	(14.2)	34.0	(29.8)	1,005	口縁～胴部上位	深鉢	IV群a類・余市式		
接合破片総点数		同一個体破片	接合	出土地点・層位・日付・遺物番号 (点数)			G-17区・VI層・1013・-- (4) G-18区・VI層・1012・-- (1)			G-17区・VI層・1016・-- (5) G-18区・VI層・1011・-- (1)			合計	11		
12			未接合	出土地点・層位・日付・遺物番号 (点数)			F-11区・VI層・1003・-- (3) G-16区・VI層・1023・-- (1)			G-15区・VI層・1017・-- (1) G-17区・VI層・0904・-- (2)			合計	7		
胎土 (混和材)		繊維	—		粒径	中粒		量	中量		種類	岩石主体		備考	白色岩片 黒色岩片	
外	文様・調整		色調		使用の痕跡		その他		部位 (残存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内	
	R.L.縄文		浅黄褐色 (10YR8/4)		—		貼付帯により幅広		口唇部 (25%)							
面	無文帯		灰黄褐色 (10YR6/2)		—		補修孔		口縁部 (25%)		ナデ	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	黒色化	—	面	
	貼付帯にR.L.縄文・渦線文		(黒褐色)		—		補修孔		胴部上半 (10%)							

表22 P S-1 出土復原土器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	日付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)		
								器高	口径	底径						
20	2	11	P S-1	VI層	0818	—	19	(13.8)	39.8	37.4	1,170	口縁～胴部上位	深鉢	IV群a類・余市式		
接合破片総点数		同一個体破片	接合	出土地点・層位・日付・遺物番号 (点数)			G-15区・VI層・1017・-- (4)			—			合計	4		
15			未接合	出土地点・層位・日付・遺物番号 (点数)			P S-1・VI層・0810・-- (39) G-15区・VI層・1017・-- (8)			F-8区・VI層・0807・-- (1) H-16区・VI層・0910・-- (1)			合計	49		
胎土 (混和材)		繊維	—		粒径	中粒		量	中量		種類	岩石・鉱物ともにあり		備考	—	
外	文様・調整		色調		使用の痕跡		その他		部位 (残存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内	
	ナデ		にぶい黄褐色 (10YR7/4)		黒色化		貼付帯により幅広		口唇部 (10%)							
面	L.R.縄文		浅黄褐色 (10YR8/3)		—		貼付帯に縄文 円形刺突文		口縁部 (10～20%)		突瘤状ナデ	(褐灰色)	—	黒色化 炭化物付着	剥離	
	貼付帯にR.L.四段目のみL.R.		—		四段目の貼付帯は器面と同時施文		胴部上半 (20%)		ナデ							

表23 P S-2 出土復原土器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	日付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)		
								器高	口径	底径						
20	3	11	P S-2	VI層	0831	—	23	(21.5)	18.3	(11.7)	1,165	口縁～胴部下位	深鉢	IV群a類・余市式		
接合破片総点数		同一個体破片	接合	出土地点・層位・日付・遺物番号 (点数)			I-9区・VI層・0807・-- (2) I-9区・VI層・0823・-- (2) J-9区・VI層・0830・-- (2) K-9区・VI層・0823・-- (1)			I-9区・VI層・0822・-- (1) I-9区・VI層・0824・-- (2) J-9区・VI層・0831・-- (4)			合計	14		
37			未接合	出土地点・層位・日付・遺物番号 (点数)			P S-2・VI層・0831・-- (4) I-9区・VI層・0822・-- (1) I-9区・VI層・0824・-- (1) I-9区・VI層・0829・-- (1)			H-8区・VI層・0821・-- (1) I-9区・VI層・0823・-- (3) I-9区・VI層・0828・-- (1) J-9区・VI層・0807・-- (2)			合計	14		
胎土 (混和材)		繊維	—		粒径	細粒		量	中量		種類	鉱物主体		備考	石英・白色岩片	
外	文様・調整		色調		使用の痕跡		その他		部位 (残存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内	
	ナデ		にぶい褐色 (7.5YR6/3)		黒色化		—		口唇部 (60%)							
面	R.L.縄文		灰黄褐色 (10YR6/2)		—		—		口縁部 (70%)		ナデ	にぶい黄褐色 (10YR6/4)	黒色化	—	面	
	貼付帯にR.L.縄文		にぶい褐色 (7.5YR6/3)		黒色化 炭化物付着		—		胴部上半 (50%)							
—		にぶい褐色 (5YR6/3)		赤色化 褐色 (2.5YR7/6)		—		—		胴部下半 (40%)		—		黒色化 炭化物付着		

表24 P S-4 出土復原土器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	日付	遺物番号	破片点数	計測値 (cm)			重量 (g)	部位	器種	備考 (分類・型式)		
								器高	口径	底径						
20	4	11	P S-4	VI層	1010	4	4	(17.4)	28.6	(23.4)	980	口縁～胴部上位	深鉢	IV群a類・余市式		
接合破片総点数		同一個体破片	接合	出土地点・層位・日付・遺物番号 (点数)			H-11区・VI層・0915・-- (6)			H-11区・VI層・0919・-- (3)			合計	9		
13			未接合	出土地点・層位・日付・遺物番号 (点数)			H-11区・VI層・0919・-- (2)			H-12区・VI層・0922・-- (1)			合計	3		
胎土 (混和材)		繊維	—		粒径	細粒		量	中量		種類	岩石・鉱物ともにあり		備考	白色岩片 海綿骨針	
外	文様・調整		色調		使用の痕跡		その他		部位 (残存率)		文様・調整	色調	使用の痕跡	その他	内	
	ナデ		浅黄褐色 (7.5YR8/3)		—		—		口唇部 (10%)							
面	R.L.縄文		にぶい褐色 (7.5YR7/4)		黒色化		貼付帯は段差の底い		口縁部 (20%)		ナデ	褐色 (7.5YR7/6)	黒色化 炭化物付着	—	面	
	貼付帯にR.L.縄文		—		—		—		胴部上半 (30～10%)							

表25 遺構出土破片土器観察表

図	番号	図版	出土地点	層位	取上日	遺物番号	破片数		破片部位	重量(g)	器種	分類	使用の痕跡		備考
							小計	合計					外面	内面	
胎土(混和材)															
繊維				粒径・量	種類(名称)	文様・調整			色調		使用の痕跡		土器型式		
						外面		(部位)		外面	内面	外面	内面		
20	5	11	H-1	覆土P層	0912	2 3 4 5 6 —	2 1 1 1 1 1	7	胴部	226.9	深鉢	IV群a類			
微量?		細粒・中量	岩石・鉱物 ともにあり (白色岩片)		羽状縄文 L R縦・横位施文		タテナデ (沈線文状 の調整痕)		—	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	灰黄色 (2.5YR6/2)	赤色化 褐色 (5YR6/6)	黒色化 炭化物付着	余市式	
20	6	11	H-2 H-1 I-19区 I-20区	覆土B層 覆土B層 VI層 VI層	0922 0922 1017 0919	— — — —	1 2 1 1	5	胴部下位 ~底部	144.4	深鉢	—		やや上げ底	
—		細粒・多量	鉱物主体 (石英)		R L縄文		ナデ?		(底外面) ナデ?	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	にぶい褐色 (5YR6/4)	赤色化 褐色 (5YR7/6)	黒色化		
20	7	11	H-1 ・ P-1 H-1	覆土P層 覆土B層	0926 0912	— 20	1 1	2	口縁部	19.7	深鉢	IV群a類		8と同一個体	
—		中粒・中量	岩石主体		左上がりの条 R L R?		ナデ		(口唇部) ナデ	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	にぶい黄褐色 (7.5YR6/4)	—	黒色化		
20	8	11	H-1 G-19区	覆土B層 VI層	0912 0913	14 15 20 —	1 1 1 2	5	胴部~底部	64.2	深鉢 (小型)	IV群a類		7と同一個体	
—		中粒・中量	岩石主体 (白色岩片)		左上がりの条 R L R?		ナデ		(底外面) —	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	—	黒色化 炭化物付着		
21	9	11	H-1	覆土B層	0912	22	1	1	口縁部	36.9	深鉢	IV群a類			
—		中粒・中量	岩石・鉱物 ともにあり (重円礫状泥岩)		無文(剥離) 貼付帯		ナデ		(口唇部)ナデ (貼付帯)無文	灰黄褐色 (10YR6/2)	浅黄褐色 (10YR8/3)	黒色化?	—	余市式	
21	10	11	H-1	覆土B層	0912	16	1	1	口縁部	17.3	深鉢	IV群a類			
—		中粒・中量	鉱物主体 (石英)		無文(ナデ) 貼付帯		ナデ		(口唇部)ナデ (貼付帯)ナデ 縦横位・一部羽状	(褐灰色)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	黒色化	—	余市式	
21	11	11	H-2 I-18区	覆土B層 VI層	0922 1002	27 —	1 1	2	口縁部	54.8	深鉢	III群b類		波状口縁	
少量		細粒・中量	岩石・鉱物 ともにあり		L R縄文		ナデ (工具の アタリ)		(口唇部) 撫細圧痕文	(黒褐色)	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	黒色化 炭化物付着	—		
21	12	11	H-2	覆土B層	0922	32 —	3 2	5	胴部	76.5	深鉢	IV群a類			
—		中粒・多量	岩石主体 (重円礫状岩片)		L R縄文		ナデ		—	赤色化 (明赤褐色)	(黒褐色)	赤色化 明赤褐色 (2.5YR5/6)	黒色化 炭化物付着		
21	13	11	H-2	覆土B層	0922	48	1	1	胴部	47.4	深鉢	IV群a類			
—		細粒・中量	鉱物主体 (有色鉱物)		L R縄文 (縦位施文)		ナデ		—	にぶい黄褐色 (7.5YR7/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	黒色化 炭化物付着	黒色化 炭化物付着		
21	14	11	H-2	覆土B層	0922	43	1	1	胴部	29.3	深鉢	III群b類			
中量		細粒・ 少~中量	岩石・鉱物 ともにあり		L R 結東第1種 斜行縄文		ナデ		—	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	灰褐色 (7.5YR4/2)	黒色化 赤色化?	黒色化 炭化物付着		
21	15	11	H-2	覆土B層	0922	21	1	1	胴部	13.5	深鉢	III群b類			
中~多量		細粒・少量	岩石・鉱物 ともにあり (重円礫状堆積岩)		L R 縄文・縄文		ナデ		—	(黒褐色)	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	黒色化 炭化物付着	—	ノダツP II式	
21	16	11	H-2	覆土B層	0922	18	1	1	胴部	28.2	深鉢	IV群a類			
—		中粒・中量	鉱物主体 (石英)		R L縄文 貼付帯		ナデ		(貼付帯) L R縄文	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	黒色化?	黒色化	余市式	
21	17	11	H-3 H-20区	覆土B層 VI層	1010 0911	2 —	1 1	2	胴部	74.3	深鉢	IV群a類		貼付帯と器面 同時施文	
—		粗粒・多量	岩石主体 (重円礫状堆積岩)		L R縄文 縦・横位 貼付帯		ナデ		(貼付帯) L R縄文 縦・横位	にぶい黄褐色 (10YR7/3)	—	—	黒色化 炭化物付着	余市式	
21	18	12	H-3	覆土O層	1010	1	1	1	胴部	11.3	深鉢	III群b類			
中量		細~中粒 ・少量	岩石・鉱物 ともにあり		(不明)		ナデ		—	(黒褐色)	(黒褐色)	黒色化 炭化物付着	黒色化		
21	19	12	S F-1	B層	0920	—	1	1	胴部	14.1	深鉢	IV群			
—		中粒・中量	岩石主体 (重円礫状岩片)		R L縄文		ミガキ		—	(黒褐色)	にぶい黄褐色 (10YR6/3)	黒色化	—		
21	20	12	F-1	VI層	0623	—	1	1	胴部	25.1	深鉢	III群b類		24と同一個体	
中量		細粒・中量	鉱物主体 (石英)		L R 結東第1種 斜行縄文		ナデ		—	灰黄褐色 (10YR5/2)	にぶい黄褐色 (10YR5/3)	黒色化 炭化物付着	—		
21	21	12	P S-3	VI層	0922 0920	— —	4 1	5	胴部	206.4	深鉢	IV群a類			
—		中粒・中量	岩石主体 (白色岩片)		R L縄文 (縦位回転) 貼付帯		ナデ		(貼付帯) R L縄文	にぶい褐色 (7.5YR6/4)	灰黄褐色 (10YR5/2)	赤色化 褐色 (5YR7/6)	黒色化 炭化物付着	余市式	
21	22	12	P S-3 I-13区	VI層	0921 0922 0920	— — —	2 2 1	5	胴部	158.0	深鉢	III群b類			
微量?		中粒・少量	岩石・鉱物 ともにあり (白色岩片)		L R L縄文 繩端部回転痕		ミガキ? ナデ		—	にぶい褐色 (5YR6/4)	(黒褐色)	赤色化 褐色 (2.5YR6/6)	黒色化		
21	23	12	P S-3	VI層	0920 0922	— —	6 1	7	口縁部	55.5	深鉢	IV群a類			
—		中粒・多量	岩石・鉱物 ともにあり (白色岩片)		R L縄文 (縦位回転) 貼付帯		ナデ		(口唇部) ナデ (貼付帯) R L縄文 R L縄文(横位)	(黒褐色)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	黒色化 炭化物付着	—	余市式	
21	24	12	P S-4 F-11区	VI層	1010 1003	1 —	1 9	9	胴部	235.5	深鉢	III群b類		20と同一個体	
中~多量		細粒・ 中~多量	岩石・鉱物 ともにあり		L R 結東第1種 斜行縄文		ナデ		—	にぶい黄褐色 (7.5YR7/4)	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	黒色化 炭化物付着	—		

表26 遺構出土石器観察表

掲載 図 番号	図版	出土地点	層位	取上日	遺物 番号	点数	器種	特徴	残存 状態	形状	計測値 (cm)			重量 (g)	石材		加工痕	使用痕	備考
											長さ	幅	厚さ		岩石名	特徴			
22	1	12	H-1	覆土B層	0912	19	1	石織	柳葉形~菱形?	準完形	3.9	1.9	0.5	2.5	黒曜石	微粒な球顆の筋	背面周縁	下部破損	
22	2	12	H-1	床面	0922	—	1	石織	柳葉形 小型	完形	2.9	1.1	0.4	1.1	黒曜石	—	両面全面	—	
22	3	12	H-2	覆土B層	0908	—	1	石織	三角形 有茎	完形	2.3	1.3	0.4	0.8	黒曜石	—	両面全面	—	
22	4	12	H-2	覆土B層	0904	—	1	石織	三角形 有茎	準完形	2.3	1.6	0.4	1.2	黒曜石	細粒の球顆 多数 筋状	両面全面	先端部・茎部 破損	
22	5	12	H-2	覆土B層	0911	—	1	石織	基部のみ	片	(1.5)	0.8	0.3	0.2	黒曜石	—	両面全面	上半部破損	
22	6	12	F-1	VI層	0823	—	1	石織	基部のみ	片	(0.9)	0.8	0.3	0.1	黒曜石	—	両面全面	上半部破損	
22	7	12	PS-2	VI層	0831	—	1	石織	細長 有茎	完形	3.4	1.7	0.9	3.4	黒曜石	赤色部分?	両面全面	—	
22	8	12	H-2	覆土B層	0908	—	1	スクレイパー	サイド スクレイパー	(完形)?	6.3	4.6	2.0	51.9	黒曜石	原礫面あり 微~細粒の球顆 筋状で多数	粗い剥離	下部破損?	
22	9	12	H-1	覆土B層	0911	—	1	スクレイパー	サイド スクレイパー	準完形	4.5	2.5	1.1	9.2	頁岩	硬質 灰黄色 (2.5Y7/2)	周縁中心	上部破損?	上部を破損した つまみ付きナイフかも
22	10	12	H-2	覆土B層	0913	—	1	石核	—	—	2.5	3.2	1.2	8.4	黒曜石	左側面に原礫面	剥離	—	
22	11	12	H-3	覆土B層	1004	—	1	石核	—	—	2.3	3.2	1.6	10.3	黒曜石	上端面・左側面に原礫面 細粒の球顆 筋状で中量	剥離	—	
22	12	12	H-1	覆土B層	0904	—	3	磨製石斧	擦切り手法	完形	8.9	4.4	1.6	74.2	緑色 泥岩	オリブ灰~緑灰色 (5GY6/1~7.5GY6/1)	研磨痕	剥落痕	
22	13	12	H-2	覆土B層	0922	40	1	磨製石斧	擦切り手法	準完形	(8.7)	3.8	1.3	66.0	緑色 泥岩	オリブ灰~緑灰色 (5GY6/1~7.5GY6/1)	研磨痕	下部破損 剥落痕?	
22	14	12	H-2	覆土B層	0922	23	1	磨製石斧	擦切り手法	準完形	(6.9)	2.6	1.2	43.4	緑色 泥岩	オリブ灰 (5GY6/1)	研磨痕 敲打痕	下部破損 剥落痕	
22	15	12	H-2	覆土PB層	0922	5	1	たたき石	三角形の扁平礫 が素材	完形	11.0	11.8	4.6	900	緑色 泥岩	明オリブ灰 (5GY7/1)	—	周面に敲打痕	
22	16	12	H-2	覆土PB層	0922	8	1	たたき石	楕円体の礫 が素材	完形	10.5	5.5	3.2	280	緑色 泥岩	オリブ灰色 (2.5GY6/1)	—	上下端面と 側面の一部に 敲打痕	
22	17	12	H-2	覆土B層	0922	44	1	砥石	—	半形	(4.7)	5.1	2.1	41.6	砂岩	細粒で軟質 (灰白色)	—	すり痕 破損	
22	18	12	H-2	覆土B層	0922	41	1	砥石	—	片	(2.7)	5.7	1.8	32.7	砂岩	細粒で軟質 (浅黄色)	—	すり痕 破損	
22	19	12	H-3	覆土B層	1004	—	1	砥石	—	準完形	(5.0)	5.8	1.6	43.2	砂岩	細粒で軟質 灰オリブ色 (5Y6/2)	—	すり痕 破損	
22	20	12	H-3	覆土BO層	1010	4	—	台石	—	片	(7.7)	(6.2)	4.0	210	安山岩	浅黄色 (2.5Y7/4)	—	たたき痕? 破損	
22	21	12	SF-1	B層	0920	—	—	台石? U・Rレキ	—	片	11.9	5.8	5.2	440	安山岩	灰色 (7.5Y6/1)	—	すり痕? 割れ	レキ(自然礫) かもしれない
22	22	12	H-2	覆土PB層	0922	4	1	石製品	細長い扁平礫 が素材	完形	11.5	4.4	1.6	115.7	泥岩	緑灰色 (10G5/1)	たたき痕	—	磨製石斧未製品 の可能性あり
22	23	12	SF-1	B層	0929 1002	11 13	1 1	2 すり石	扁平な楕円礫	完形	9.1	12.6	2.0	360	片麻岩	白色地に有色の筋 白色部分が多い	—	長辺の一部に 剥離痕 被熱	炉石 一次分類はU・Rレキ

表27 SF-1 出土石器観察表

掲載 図版	出土地点	層位	取上日	遺物 番号	点数	器種	残存 状態	形状	計測値 (cm)			重量 (g)	石材		特徴 観察事項	備考
									長さ	幅	厚さ		岩石名	特徴		
16	1	SF-1	B層	0929	1	レキ	完形	亜円礫	12.2	8.8	2.5	458	片麻岩	有色と白色の斑	—	炉石
16	2	SF-1	B層	0929	2	レキ	完形	亜円礫	12.0	10.9	2.4	429	砂岩	(暗灰色)	被熱	炉石
16	3	SF-1	B層	0929	3	レキ	完形	亜円礫	21.4	9.7	5.4	1,670	砂岩	(黄灰色)	被熱	炉石
16	4	SF-1	B層	0929	4	レキ	完形	亜円礫	14.8	14.6	6.9	2,280	砂岩	(暗灰色)	被熱	炉石
16	5	SF-1	B層	1002	5	台石	片	亜円礫	17.7	18.6	7.1	3,470	花崗岩	(灰色)	被熱	炉石
16	6	SF-1	B層	0929	6	レキ	完形	亜円礫	17.3	12.7	5.7	1,910	チャート	にぶい赤褐色 (5YR5/3)	被熱	炉石
16	7	SF-1	B層	0929	7	レキ	完形	亜円礫	16.4	11.0	6.1	1,550	砂岩	灰黄色 (2.5Y6/2)	被熱	炉石
16	8	SF-1	B層	0929	8	レキ	完形	亜円礫	13.9	8.7	3.3	617	片麻岩	有色と白色の筋	被熱	炉石
16	9	SF-1	B層	0929	9	レキ	完形	亜円礫	12.0	9.9	3.5	552	泥岩	(黄灰色)	被熱	炉石
16	10	SF-1	B層	0929	10	レキ	完形	亜円礫	12.0	8.1	2.9	484	片麻岩	有色と白色の斑	—	炉石
16	12	SF-1	B層	1002	12	レキ	完形	亜円礫	12.9	9.1	2.0	427	片麻岩	有色と白色の斑 白色部分がやや多い	—	炉石

V章 第Ⅱ黒色土層（Ⅵ層）の出土遺物

1. 包含層出土遺物の概要（図23～25 表28～30）

出土点数表

土器は2,884点出土した。Ⅲ群が75.8%で、Ⅳ群が24.2%で前者が多いが、胴部などは明確に判断できないものがあるが、多くが縄文時代中期末葉～後期初頭である。また、二次整理作業の結果、晩期後葉と判明したものが極少量あるが、一次整理のデータで作成したこの出土点数表には反映させていない。残存状態の割合は、良好1,880点で65%、剥離490点で17%、磨耗97点で3.4%、小破片417点で14.5%である。出土層位は多くがⅥ層出土で、Ⅹ層（第Ⅲ黒色土層）出土とした1点は、縄文が施されたⅢ群土器で、植物根などで下位に落ち込んだものである。剥片石器は1,311点出土し、そのうち1,160点がフレイクである（被熱を含む、以下同じ）。これを除いた151点に対する器種ごとの割合は、石鏃が48.3%、石槍・ナイフが0.7%、スクレイパーが18.5%、U・Rフレイク17.2%、石核13.9%、原石1.3%で、石鏃が最多で、多くが黒曜石製である。石製品は11点で、代表的なものとして石棒の破片1点、多頭石斧（環状石斧）と呼称した石製品がある。前者の石棒に石材が類似していたので、「石棒 片 蛇紋岩」に分類したものが3点あるが、これらは石棒でなく磨製石斧である。礫石器は268点出土し、最多は磨製石斧の「片」が153点で57%である。この点数を礫石器総数から引いた値である115点に対する各器種の割合は、「片」以外の磨製石斧は31.3%、同未製品6.1%、同原石9.6%、たたき石16.5%、すり石7.8%、石錘3.5%、砥石13.9%、台石11.3%で、多いのは磨製石斧である。レキは543点出土した。みられる石材は、安山岩、玄武岩、花崗岩、閃緑岩、凝灰岩、砂岩、泥岩、縞頁岩、チャート、片麻岩である。また、Ⅹ層（第Ⅲ黒色土層）出土のものは遺物と断定できない。

出土分布図

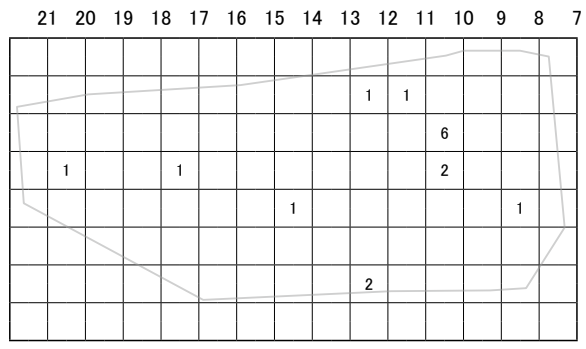
概して遺物は東側に多く西側に少ない。また、J・K-13～16区は重機を併用した遺構確認調査としたので断っておく。「土器合計」・「Ⅲ群」・「Ⅳ群」が多いグリッドは、F-12区、G-11区、H-8区である。「剥片石器合計」はI-9区が最多で、次いで多いのはE-8区、I-8区である。「石鏃 石槍・ナイフ」は南東側に多く、「スクレイパー」も同様である。「U・Rフレイク」・「石核」は東西両側から出土し、中央はみられない。「フレイク」は剥片石器合計と同様である。「礫石器合計」はI-9区が最多である。「磨製石斧」の「片」は、I-9区が最多で、概ね全体にみられる。「同完形・準完形・半形」が多いのはI-10区、J-9区である。「磨製石斧未製品・原石」は南側斜面のK-11区が最多である。「たたき石」・「すり石」が多い地点は東側で、「石錘」は中央付近の北側斜面にみられる。「砥石」はG・H-10区が多く、「台石」は東側にみられる。「石製品」は中央付近にやや多い。「レキ合計」・「レキ」は全体にみられ、最多はF-10区、H-11区である。「U・Rレキ」が多いグリッドは北東側に複数みられる。「U・Rレキ（片麻岩）」・「レキ（片麻岩）」は漁労用の網の錘と推測する。合わせてみると全体から出土し、最多はH-11区である。

2. 土器

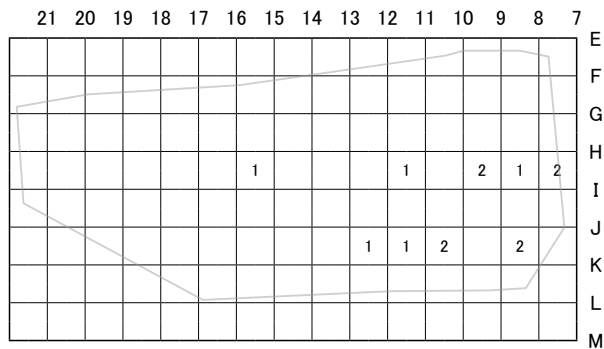
(1) 復原土器（図26 表31～36 図版13）

1は直立する口縁部からわずかに膨らむ胴部へつながる器形で、口唇部直下の器面に貼付帯がみられ、口唇部断面は丸形を呈する。器面にはL R結束第1種斜行縄文とR L縄文が観察される。2は広がる胴部から底部へすぼまる器形で、外面にはL R結束第1種斜行縄文が施される。3は幅広い胴部

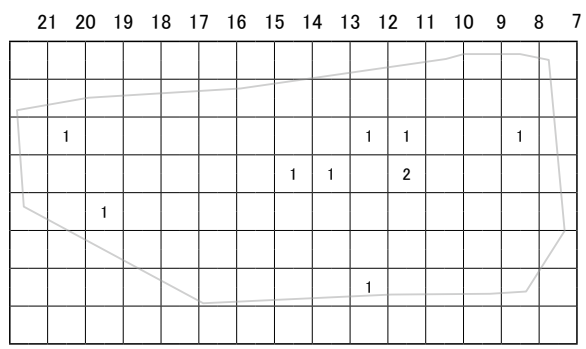
砥石



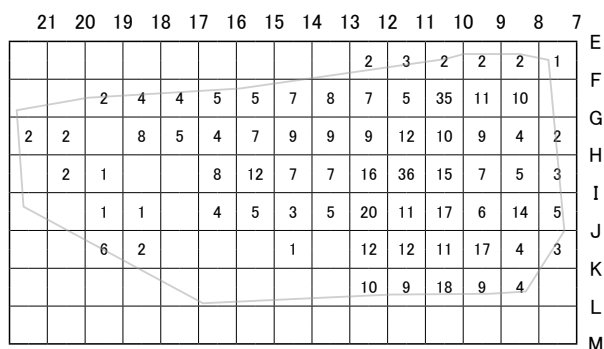
台石



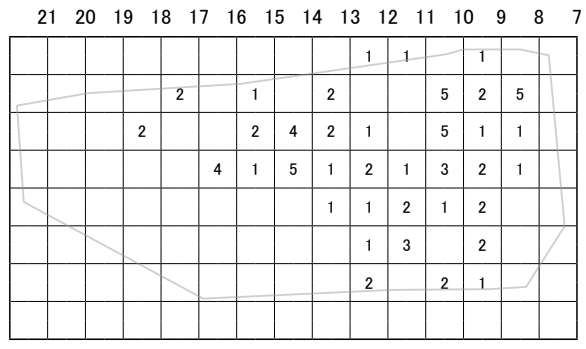
石製品



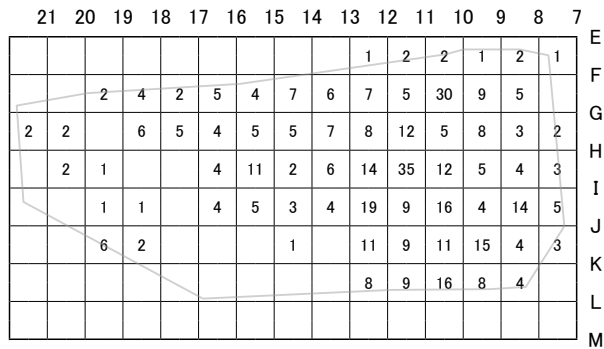
レキ合計



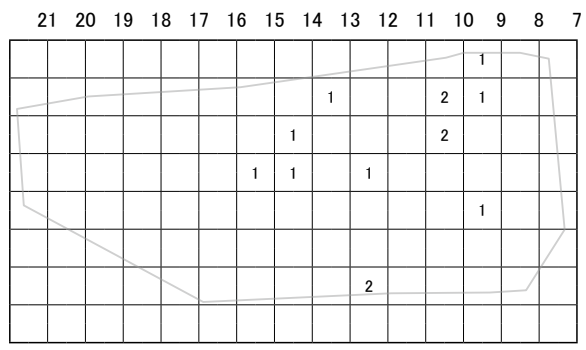
U・Rレキ



レキ



U・Rレキ (片麻岩)



レキ (片麻岩)

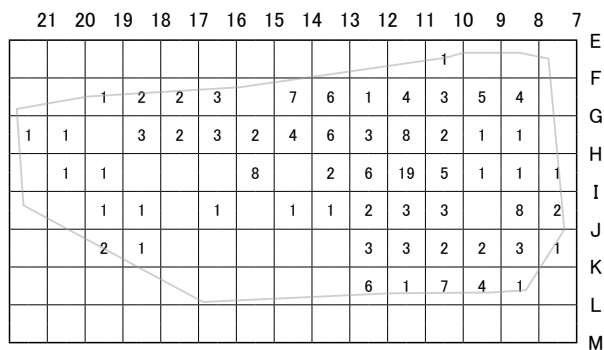


図25 遺物出土分布図(3)

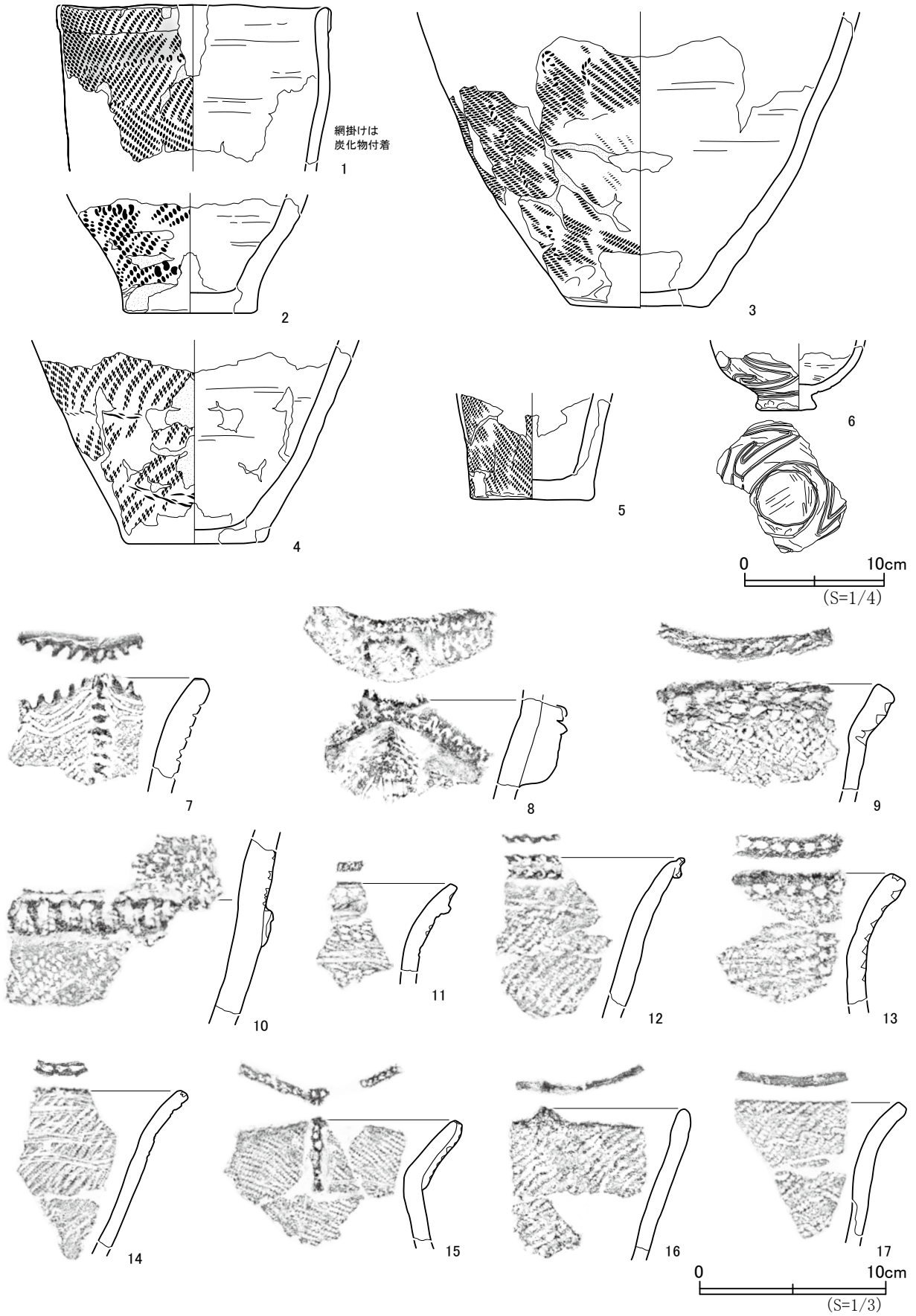


図26 包含層出土の土器(1)

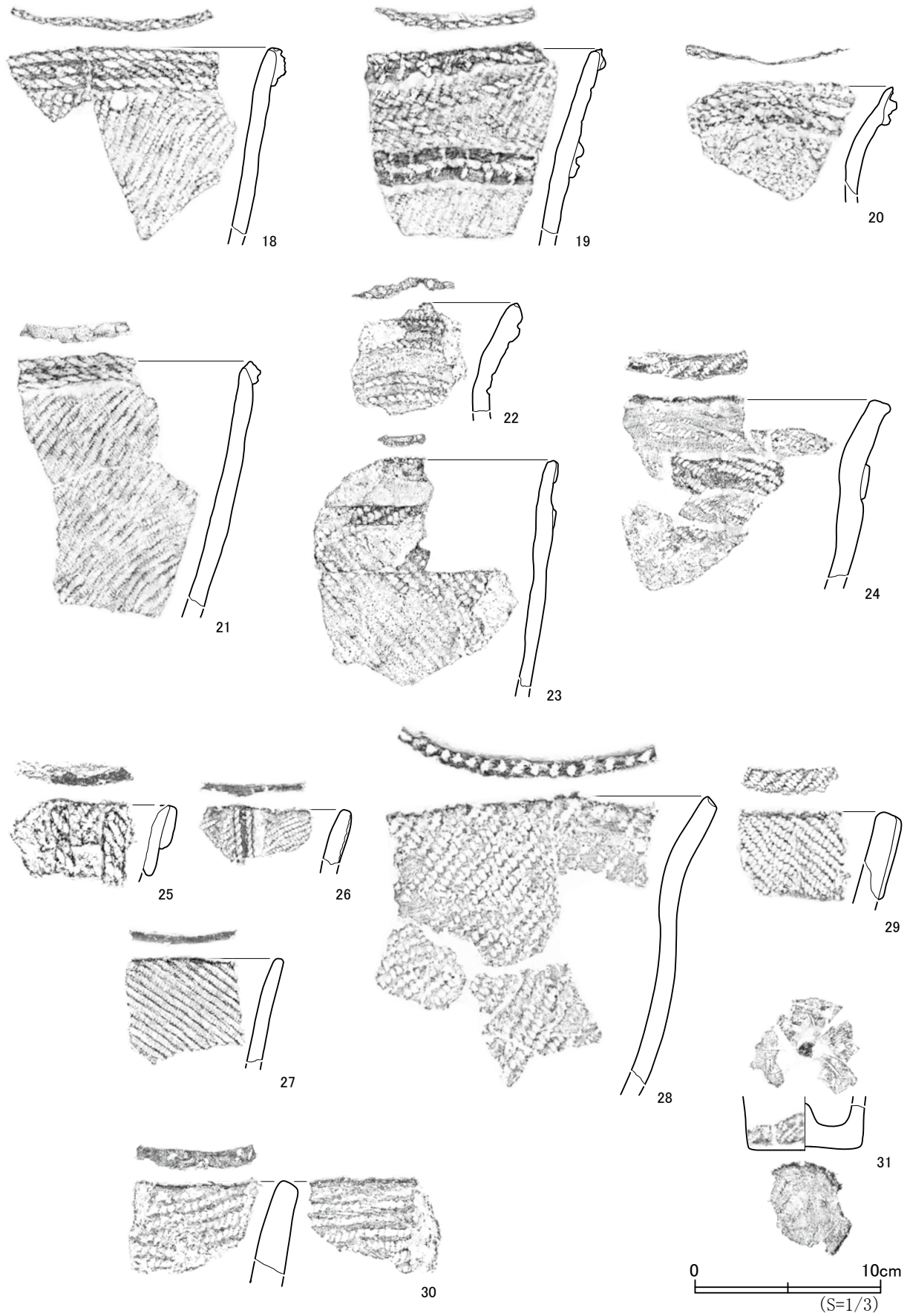


図27 包含層出土の土器(2)

中位から底部へと曲線的にすぼむ器形である。外面にはL R結束第1種斜行縄文が縦位回転施文される。4は広い胴部から底部へすぼまる器形である。地文は複節R L Rで、前々段多条と考えられる。使用による被熱で、外面は橙色を呈する。5は胴部へと若干開いて直線的につながる底部で、外面にはR L縄文が施される。1～5はIV群 a類である。

6は台付の鉢である。大きく開く胴部から曲線的にすぼまり、台部分は下側が幅広い器形である。外面には無文地に曲線的な沈線文が描かれる。V群 c類と考えられる。

（2）破片土器（図26～28 表37 図版13・14）

口縁部 7は突起部で、L R縄文地に沈線文が描かれ、貼付の施文は撚紐刻みである。8は貼付により厚みのある突起部で、半截竹管状工具による刺突文が施される。9は外面にL R縄文、刺突文、円形刺突文が施される。10は撚紐により施文される貼付があり、上位は半截竹管状工具による刺突文、下位はL R縄文である。11はやや外反する口縁部で、貼付、刺突文、沈線文、縄文が観察される。12の口唇部は、貼付により厚みがあり刺突文が施され、器面にはL R縄文と綾絡文がみられる。13は外反する口縁部で、円形の刺突文と横走る縄文が観察される。14はL R縄文地に沈線文が施され、口唇部は刺突文がみられる。15は強く外反する口縁部で、R L縄文に刺突文が施された貼付がみられる。16は口縁部に小突起を有し、器面はL R縄文が観察される。17の口唇部断面は角形で、口縁部は外反し、器面にはL R縄文と綾絡文がみられる。18は口唇部が貼付により厚くなり、そこにL R縄線文が複数施され、器面には補修孔がみられる。19は小突起があり、貼付帯上は撚紐刻みと縄線文、外面はL R縄文と縄線文が施される。20・21は口唇部直下の器面に貼付帯があり、施文原体はL Rである。22は小突起を有し、無文地に貼付とL R縄線文が施される。23の貼付帯間は無文で、L R縄文を貼付帯上と器面を同時施文し、下位の外面は縦位回転で羽状を呈している。7～23はIII群 b類である。24は器面に段を有し、L Rによる縦位回転施文で、口唇部は縄文を施すことにより外面に張り出す。25は外面に縦・横方向の貼付がみられ、撚りの異なる原体で施文される。26は波状口縁で、波頂部から垂下する貼付にL R縄線文が施される。27の口唇部断面は丸形で、外面には整然とした縄文が施される。28は外反する口縁部で小突起を有し、L R原体により口唇部と器面が施文される。29の原体は、口唇部はL R、外面はR Lである。30はL R原体による施文が表裏両面にみられ、裏面の条は横走する。24～30はIV群 a類である。

底部 31は底部の内面に突起が貼り付けられる。地文はR L縄文で、底外面は筋状の調整痕が複数みられる。32は内部が剥離し、33はL R縄文が整然と施される。

胴部 34・35の施文原体はL Rで、貼付帯上は縄線文、器面は縄文で、内面は複数の平行する筋状の調整痕が観察され、工具の単位が認識できる。36はRの撚糸文が施され、内面の調整はミガキである。37は曲線的な沈線文が施され、胎土からIV群 a類と判断する。

3. 石器（図29～33 表38・39 図版14～16）

（1）剥片石器（図29・30 図版14）

石鏃 1は平基で二等辺三角形を呈する。2は小型の柳葉形である。3は有茎で幅広である。4は周縁に微細な剥離がみられる。5は欠損し左右非対称で、石材は球顆を含む黒曜石である。6は背面に原礫面を残し、腹面中央付近は剥離により明瞭にくぼむ。7は有茎で、背面左側縁が直線的で左右非対称である。8は小型で両側縁が曲線的である。9は幅広い菱形を呈し、腹面には広めの剥離が複数みられる。10は幅広の有茎で、石材の黒曜石は中粒の球顆を含む。11は明瞭な茎部が作出され、背面に原礫面、腹面は剥離面を広く残す。12は有茎で機能部は二等辺三角形を呈する。

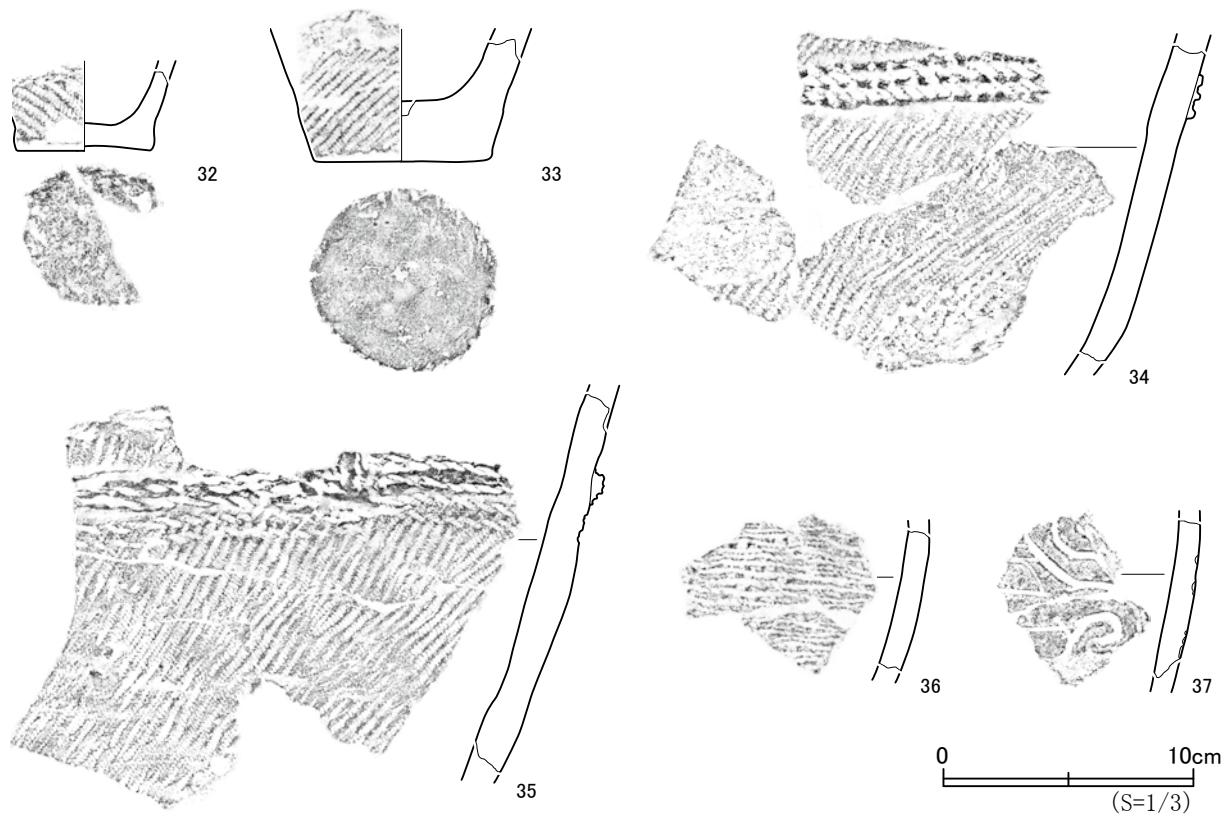


図28 包含層出土の土器(3)

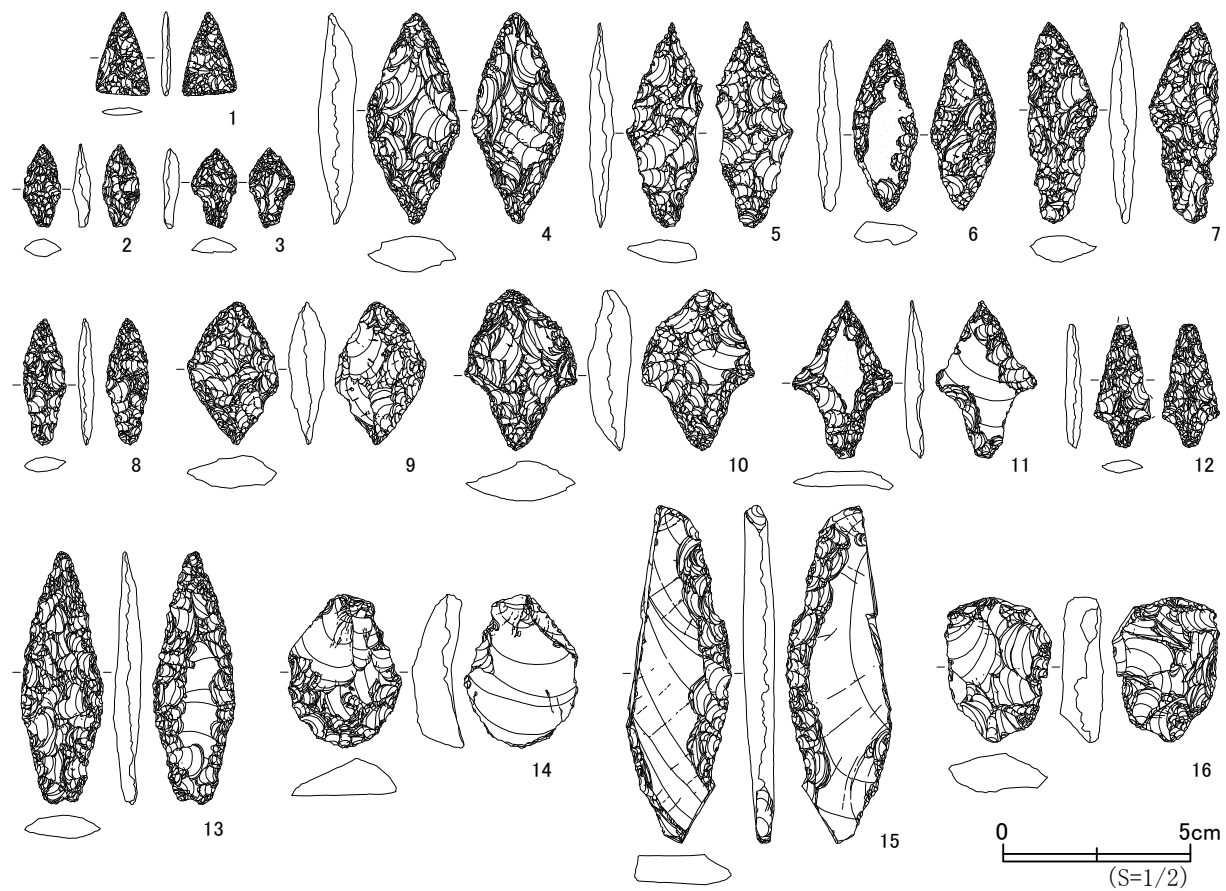


図29 包含層出土の石器(1)

石槍・ナイフ 13は黒曜石製で、腹面に広く剥離面がみられる。

スクレイパー 14は厚みのある素材で、下縁の刃部は曲線的な形状である。15は背腹両面に広く平坦な剥離面を有し、背面右側縁に刃部がみられる。16は石核を用いたと考えられ、側面に原礫面を残す。17は曲線的な側縁と下縁に刃部が作出され、背腹両面に広い剥離面が観察される。18は厚みのある頁岩を素材とし、背面に剥離痕が多くみられる。19も頁岩製で、背面の全周縁と腹面の下半分に剥離がみられる。

石核 20は球顆を含む黒曜石製で、明瞭にくぼむ剥離面が複数みられる。

（2）礫石器（図30～32 図版15）

磨製石斧 21は大型で重量がある。敲打痕は少なく、研磨痕が全体にみられ、右側面は研磨による平坦な加工面がみられる。22は両側縁が平行で、素材は湾曲しその内側にあたる裏面は広く研磨痕がみられない。23は上部が欠損し、表面は被熱により赤色化し、裏面の低い部分は加工痕がみられない。24は刃部側が幅広い形状で、裏面の左側には広い剥離がみられ、同面右側にみられる剥離は段差が明瞭である。25は下側が幅広く刃部が残存しない。表裏両面と左右両側面はすべて研磨痕である。26は細長い形状で片岩製である。27は全体的に厚みがあり、剥離痕や敲打痕が多くみられ、未製品と判断する。28は刃部側が幅広く、表裏両面の周縁には段差のある剥離痕が多く、未製品と考えられる。29は青灰色の片岩製で、裏面にはこの素材を母岩から剥離した痕を広く残し、未製品の可能性がある。30も青灰色の片岩製で、丹念に作出された刃部がみられ、上部側を破損する。

たたき石 31は立方体形状の礫を素材とし、周縁にたたき痕が多数みられる。32は表裏両面に割れ口がみられ、その周囲にたたき痕が観察される。33は上下両端面に使用痕がみられる。34は円形の周縁に使用痕がめぐる。

すり石 35は安山岩製で、下端面に平坦化したすり面が観察される。36は楕円形の片麻岩製で長辺に使用痕が観察される。37は破片で、下端面に平坦な使用痕がみられる。

石錘 38は小型で、上縁部に打ち欠きと敲打により機能部が作出される。39は花崗岩製で、上下縁部に機能部がみられる。40は片麻岩製で、左右両縁部に打ち欠きと敲打による加工がみられる。

砥石 41は凝灰岩製で、断面が曲線形状で細長い使用痕が複数みられ、矢柄研磨器と考えられる。42はやや中粒の砂岩を用いた砥石である。43は直方体の素材で、複数の使用面を有し、「四面砥石」と呼ばれるものである。

台石 44は多孔質の安山岩製で、表裏両面に使用痕が観察される。45は扁平礫を用いたもので、表裏両面に使用面を有する。46は被熱し、半円状の大きな礫で使用痕は不明瞭である。

（3）石製品（図11・32・33 図版16）

47は黒曜石製で上部を破損し、両側縁に抉りがみられる。48は上下両側を欠損する石棒と考えられる。表裏両面と両側面には研磨痕、敲打痕がみられ、石材は片麻岩あるいは蛇紋岩と推定する。49は、多頭石斧（環状石斧）と呼称した円形の石製品である。表裏両面の中央には、穿孔途中であるかのような「くぼみ」がみられ、表面側が深い。周縁は両面から打ち欠かれ整形されたと考えられ、チャート質の石材と推測する。50は横断面が楕円形を呈する。上下両端を欠損し、本来は棒状であったと考えられ、石棒の可能性はある。石材は片麻岩と推測する。51・52は棒状礫の先端部を研磨で尖る形状に加工したもので、前者は安山岩製、後者は凝灰岩製である。53は明瞭な加工痕は観察できないが、表面が非常に平滑であり、研磨された石製品の可能性がある。

（末光）

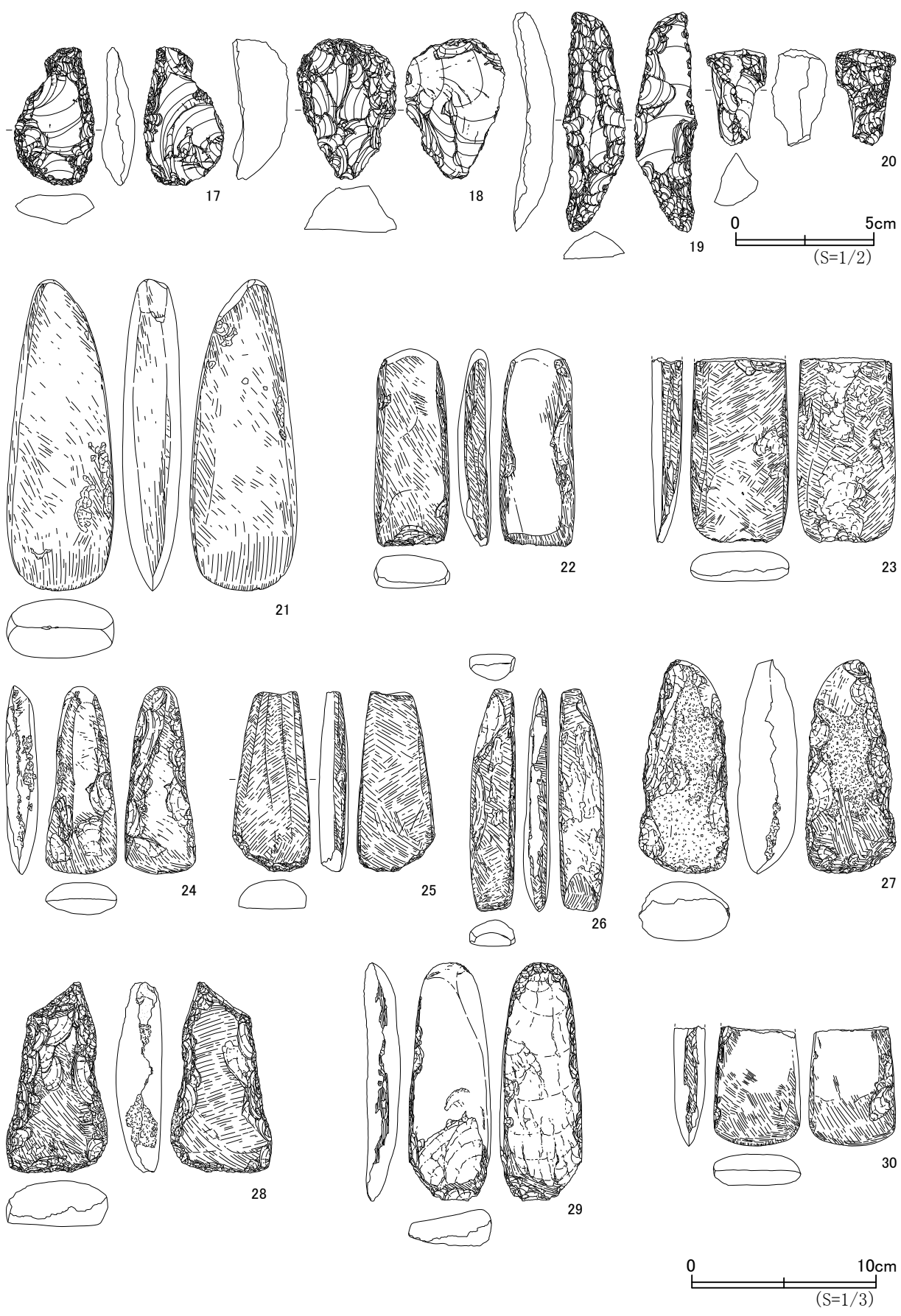


図30 包含層出土の石器(2)



図31 包含層出土の石器(3)

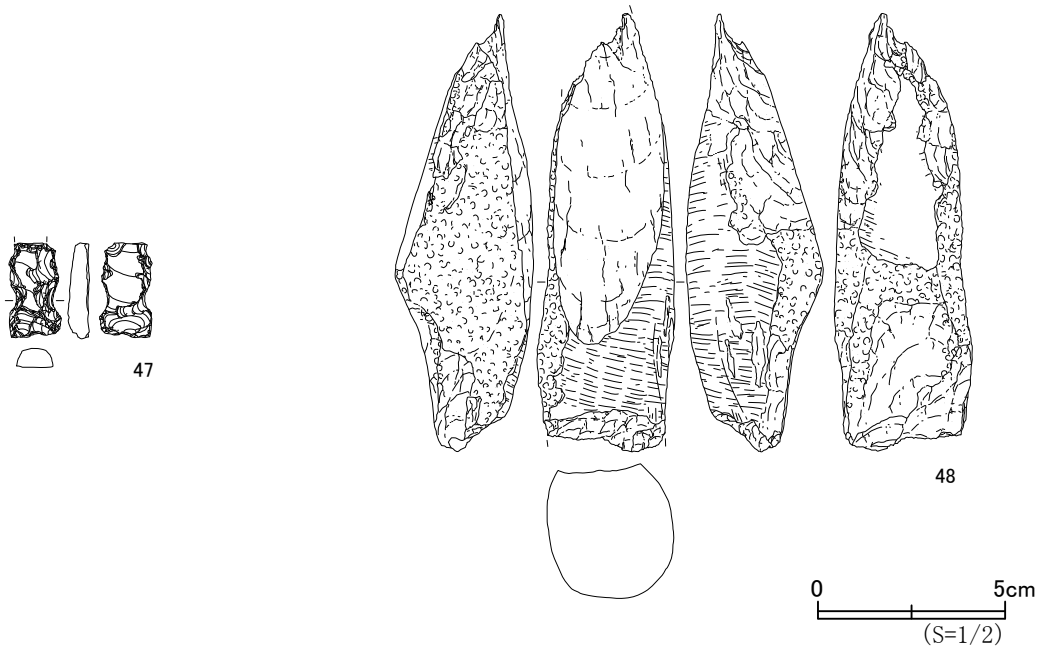
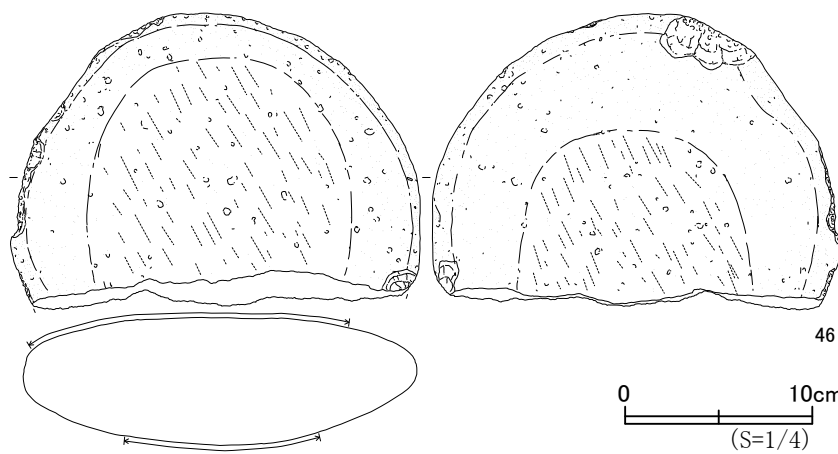
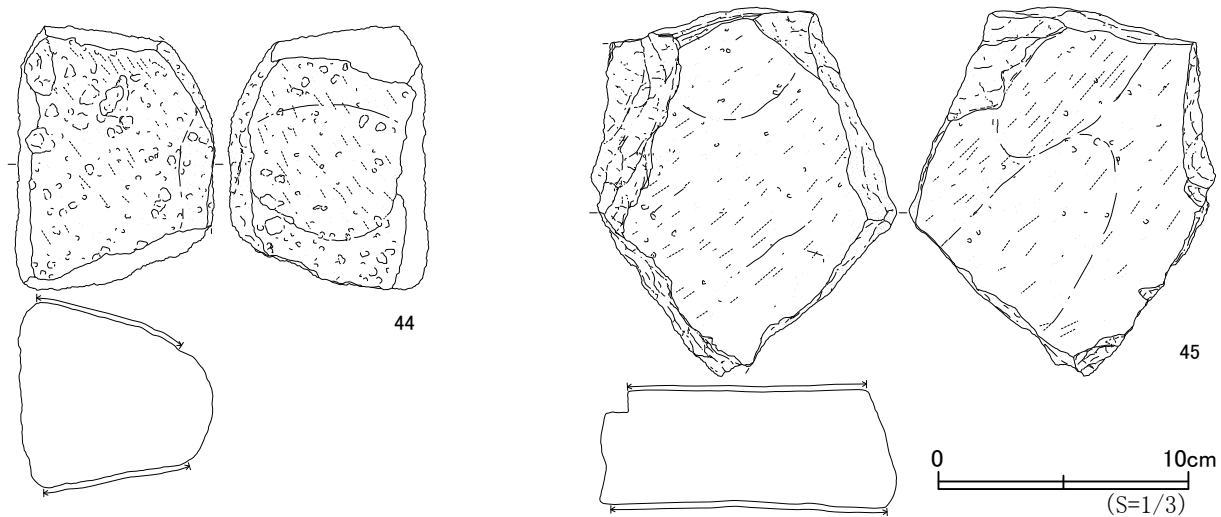
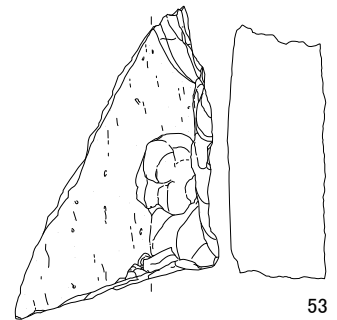
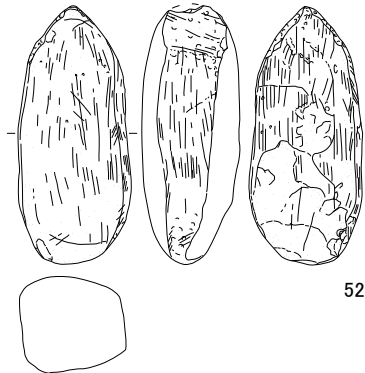
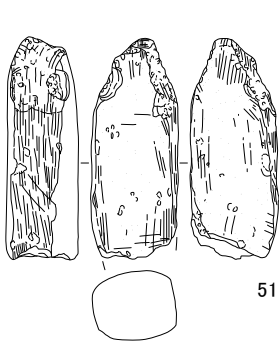
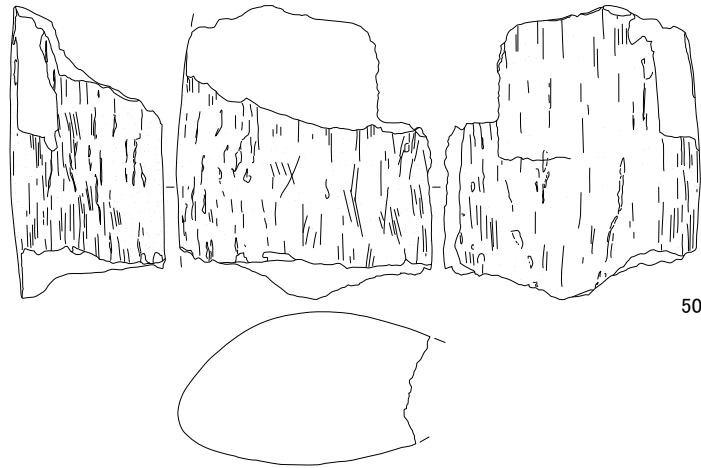
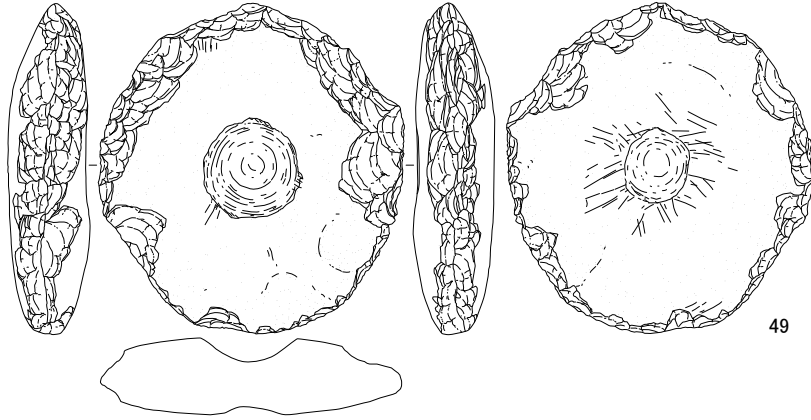


図32 包含層出土の石器(4)



0 5cm
(S=1/2)

図33 包含層出土の石器(5)

表28 包含層出土土器点数表

遺物種別 / 層位			VI層		X層		F層 (風倒木痕)		その他		合計	
時期	土器											
	部位	残存状態										
III群	口縁部	良好	116	148		0		0		0	116	148
		剥離	14								14	
		磨耗	9								9	
		小破片	9								9	
	底部	良好	81	100		0		0	2	2	81	102
		剥離	10								12	
		磨耗	3								3	
		小破片	6								6	
	胴部	良好	1,357	1,911	1	1	1	1	15	23	1,374	1,936
		剥離	223								225	
		磨耗	72								73	
		小破片	259								264	
	不明	良好		0		0		0		0	0	0
		剥離									0	
		磨耗									0	
		小破片									0	
小計			2,159	1		1		25		2,186		
IV群	口縁部	良好	45	67		0		0	1	1	46	68
		剥離	18								18	
		磨耗	2								2	
		小破片	2								2	
	底部	良好	10	11		0		0	1	1	11	12
		剥離	1								1	
		磨耗									0	
		小破片									0	
	胴部	良好	248	602		0		0	4	16	252	618
		剥離	214								220	
		磨耗	9								10	
		小破片	131								136	
	不明	良好		0		0		0		0	0	0
		剥離									0	
		磨耗									0	
		小破片									0	
小計			680	0		0		18		698		
合計			2,839	1		1		43		2,884		

表29 包含層出土剥片石器・石製品点数表

器種名・分類 / 層位			VI層		X層		—		合計		
器種	残存状態	岩石									
剥片石器	石鏃	完形 黒曜石	39	69		0		1	2	40	71
		準完形 黒曜石	16							16	
		半形 黒曜石	12							13	
		片 黒曜石	2							2	
	(被熱) 石鏃	完形 黒曜石	1	2		0			0	1	2
		準完形 黒曜石	1							1	
	石槍・ナイフ	完形 黒曜石	1	1		0			0	1	1
		準完形								0	
		半形								0	
		片								0	
	スクレイパー	完形 黒曜石	8	26		0		0	0	8	26
		準完形 黒曜石	2							2	
		半形 黒曜石	8							9	
		片 黒曜石	1							1	
	(被熱) スクレイパー	完形 黒曜石	4	2		0			0	4	2
		準完形 黒曜石	1							1	
U・Rフレイク	黒曜石	23	25		0		1	1	24	26	
	頁岩	1							1		
石核	黒曜石	20	21		0			0	20	21	
	チャート	1							1		
フレイク	黒曜石	1,102	1,106		0		35	35	1,137	1,141	
	頁岩	2							2		
	チャート	1							1		
(被熱) フレイク	玄武岩	1						1	1		
原石	黒曜石	18	18		0		1	1	19	19	
	頁岩	1							1		
剥片石器 小計			1,272	0			39		1,311		
石製品	石製品 (剥片石器)	準完形 黒曜石		0		0	1	1	1	1	
		完形 泥岩	1						2		
	石製品	完形 凝灰岩	1	4		0		0	0	1	4
		準完形								0	
		半形 安山岩	1							1	
		片 安山岩	1							1	
	(被熱) 石製品	片 片麻岩	1	1		0		0	1	1	
	石棒	片 (片麻岩?)	1	4		0		0	0	1	4
片 蛇紋岩		3	3								
多頭石斧 (環状石斧)	完形 チャート	1	1		0		0	0	1	1	
石製品 小計			10	0			1		11		
合計			1,282	0			40		1,322		

表30 包含層出土礫石器・レキ点数表

器種名・分類 / 層位			VI層		X層		—		合計					
器種	残存状態	岩石												
礫石器	磨製石斧	完形 綠色泥岩 片岩	11	12	0	0	0	11	12	189				
		準完形 綠色泥岩 片岩	9	11	0	0	0	9	11					
		半形 綠色泥岩 片岩	11	13	0	0	0	11	13					
		片 綠色泥岩 片岩	138	150	0	3	3	141	153					
	磨製石斧未製品	完形 綠色泥岩	6	7	0	0	0	6	7	18				
		半形 綠色泥岩	1		0	0	0	1						
	磨製石斧原石	完形 綠色泥岩	7	11	0	0	0	7	11	18				
		片 綠色泥岩	4		0	0	0	4						
	たたき石	完形	安山岩	2	11	0	0	1	3	12	15			
			花崗岩	1					1					
			閃綠岩	4					4					
			砂岩	2					2					
		片 綠色泥岩	2			2								
	準完形	—					0							
	半形	—					0							
	片	閃綠岩 泥岩	2	3	0	0	0	2	3					
(被熱)たたき石	完形	砂岩	1	4	0	0	0	1	4	4				
	準完形	泥岩	1					1						
	片	砂岩 凝灰岩	1					2			1	2		
すり石	完形	安山岩	1	2	0	0	0	1	2	8				
		片麻岩	1					1						
	準完形	—					0							
	半形	玄武岩 花崗岩	1	3	0	0	0	1	3					
	片	砂岩	1		0	0	0	1						
(被熱)すり石	片	砂岩 片麻岩	1	3	0	0	0	1	3					
石錘	完形	花崗岩	2	4	0	0	0	2	4	4				
		泥岩	1					1						
	準完形	片麻岩	1				0							
砥石	完形	砂岩	1	16	0	0	0	1	16	16				
	準完形	砂岩	1					1						
	半形	砂岩	2					2						
	片	砂岩 凝灰岩	11					12			11	12		
台石	完形	—		11	0	0	0	0	11	11				
	準完形	—										0		
	半形	安山岩	1										1	
	片	安山岩 砂岩	5					2			5	2		
(被熱)台石	完形	泥岩	2	10	0	0	0	2	10	10				
		凝灰岩	2					2						
	片	安山岩	1	2	1	2								
礫石器 小計			264		0		4		268					
レキ	U・Rレキ	完形	安山岩	4	1	1	1	1	6	47				
			砂岩					1			1			
		片麻岩	2				2							
		安山岩	9	42	1	2	3	10	41					
		玄武岩	1					1						
		片	花崗岩	2	38	1	2	2	2	41				
		閃綠岩	1	1										
		泥岩	1	9				11						
		チャート	3	1				1						
		頁岩 (縞頁岩)	1					3						
	凝灰岩	1					1							
	片麻岩	10					10							
	泥岩	2					2							
	凝灰岩	1	3				1	3						
	(被熱)U・Rレキ	完形	花崗岩	3	32	0	0	0	3	29	32			
			砂岩	14					14					
片		泥岩	2	29	0	0	0	2	29					
チャート		2	2											
凝灰岩		6					6							
片麻岩		2					2							
レキ	完形	安山岩	7	222	1	5	4	7	231	434				
		玄武岩	1					1						
		花崗岩	1					1						
		閃綠岩	2					3						
		砂岩	2					37			38			
		泥岩	45					45						
	片	綠色泥岩	1	423	7	4	1	203						
	チャート	31	32											
	凝灰岩	4					4							
	片	片岩	1	201	2	0	0	1	203					
片麻岩	92	94												
安山岩	12					14								
花崗岩	2					2								
砂岩	35					35								
泥岩	26					26								
チャート	26					26								
凝灰岩	12					12								
片	片岩	2	86			2	86							
(被熱)レキ	完形	砂岩	2	4	0	0	0	2	4	30				
		片麻岩	12					12						
	片	砂岩	12	26	0	0	0	7	26					
	泥岩	7	7											
チャート	3					3								
凝灰岩	4					4								
レキ 小計			527		9		7		543					
合計			791		9		11		811					

表31 H-11区出土復原土器観察表

Table with 15 columns: 図番号, 図版, 出土地点, 層位, 日付, 遺物番号, 破片点数, 計測値 (器高, 口径, 底径), 重量, 部位, 器種, 備考. Includes data for 26-13, 9, and material analysis for 胎土 (混和材).

表32 K-9区出土復原土器観察表

Table with 15 columns: 図番号, 図版, 出土地点, 層位, 日付, 遺物番号, 破片点数, 計測値 (器高, 口径, 底径), 重量, 部位, 器種, 備考. Includes data for 26-13, 9, and material analysis for 胎土 (混和材).

表33 I-10区出土復原土器観察表

Table with 15 columns: 図番号, 図版, 出土地点, 層位, 日付, 遺物番号, 破片点数, 計測値 (器高, 口径, 底径), 重量, 部位, 器種, 備考. Includes data for 26-13, 36, and material analysis for 胎土 (混和材).

表34 H-15区出土復原土器観察表

Table with 15 columns: 図番号, 図版, 出土地点, 層位, 日付, 遺物番号, 破片点数, 計測値 (器高, 口径, 底径), 重量, 部位, 器種, 備考. Includes data for 26-13, 28, and material analysis for 胎土 (混和材).

表35 K-9区出土復原土器観察表(2)

Table with 15 columns: 図番号, 図版, 出土地点, 層位, 日付, 遺物番号, 破片点数, 計測値 (器高, 口径, 底径), 重量, 部位, 器種, 備考. Includes data for 26-13, 21, and material analysis for 胎土 (混和材).

表36 I-10区出土復原土器観察表(2)

Table with 15 columns: 図番号, 図版, 出土地点, 層位, 日付, 遺物番号, 破片点数, 計測値 (器高, 口径, 底径), 重量, 部位, 器種, 備考. Includes data for 26-13, 2, and material analysis for 胎土 (混和材).

Ⅵ章 第Ⅲ黑色土層（X層）の調査

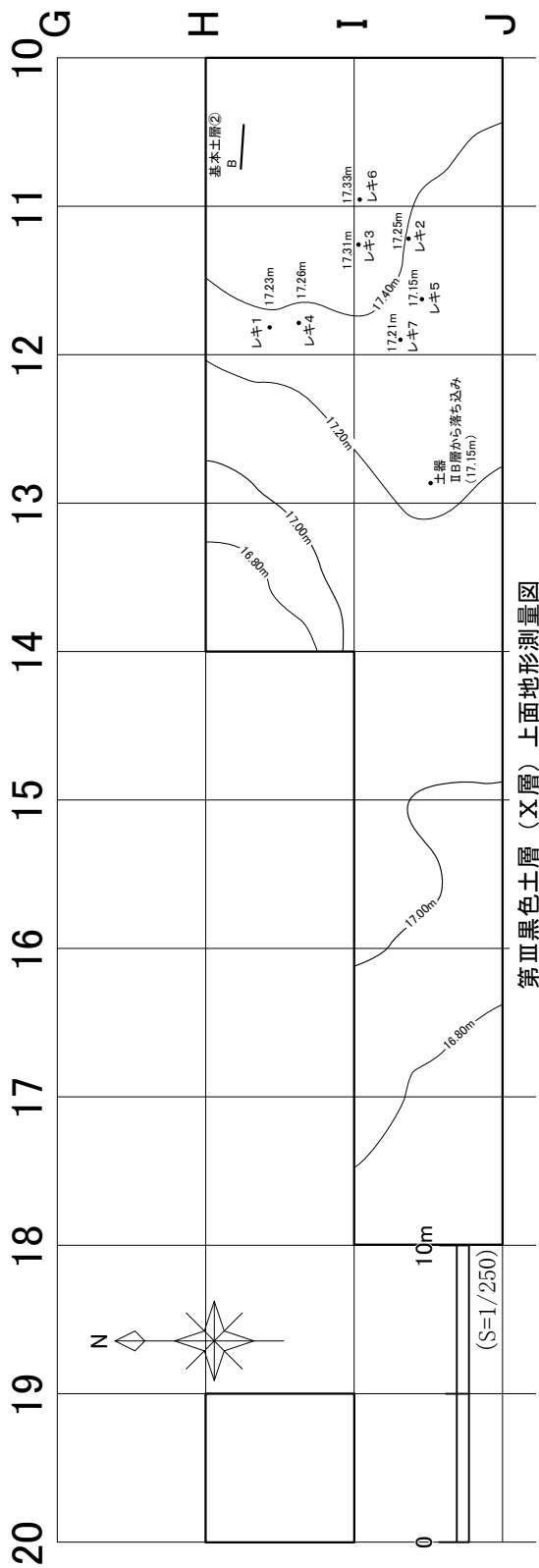
1. 調査の概要（図8・34 表40 図版10）

試掘坑27で、Ⅸ層の樽前d2テフラ下位でX層（第Ⅲ黑色土層）が確認されていたことに加え、有珠川上流地域の有珠川2・5遺跡の発掘調査では、「有珠川2式」の型式名でしられる貝殻文土器の遺構・遺物がみついている。これらのことから、本遺跡でも当該時期の遺物の有無を確認する必要を感じ、当初の調査計画になかったが、X層の調査を実施した。範囲は尾根地形の高い部分、すなわちH-19区（住居跡H-1の下位）、H・I-10~13区、I-14~17区の13グリッド325㎡である。Ⅸ層（Ta-d2）までは重機で除去し、直下のX層を人力で調査した。結果、確証的な遺物は出土しなかった。遺物の可能性を考えて取り上げた礫は写真で掲載する。すべて火成岩で火山噴出物に伴うものであろう。また、この調査面で土器も出土したが（表28）、縄文が施された中期~後期のもので、さらに出土地点は、しまりのない土であるため植物根などに崩落した遺物である。X層は地山の違いで二つに分けた。語尾に付したアルファベットは色の英語名の頭文字である。尾根先端部の高台近くの西側は、地山がⅨ層の灰色軽石層であり、これをXG層とし、調査区の東側部分の地山はⅨ層の黄色ローム層であるので、XY層とした。XG層はH-19区の住居跡H-1の下位で試掘坑27の壁にもみられた。これ以外はXY層であった。

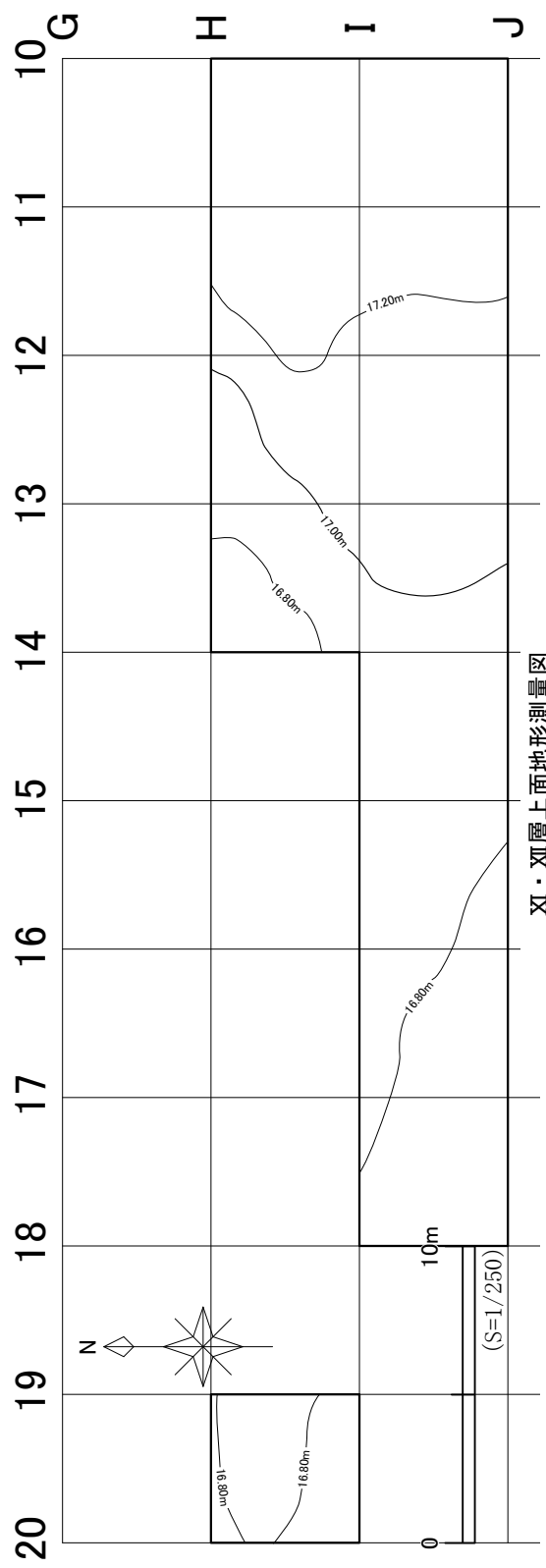
（末光）

表40 X層（ⅢB層）調査出土レキ（写真のみ）観察表

掲載図版	出土地点	層位	取上日	遺物番号	点数	器種	残存状態	形状	計測値(cm)			重量(g)	石材		備考	
									長さ	幅	厚さ		岩石名	特徴		
16	1	H-11区	X層	1006	1	1	U・Rレキ	完形	亜角礫	18.1	12.4	6.1	1,680	安山岩	灰黄色(2.5Y7/2)	
16	2	I-12区	X層	1010	2	1	レキ	完形	亜角礫	9.8	8.3	3.5	294	安山岩	(灰色)	
16	3	I-12区	X層	1010	3	1	レキ	完形	亜角礫	8.1	7.5	4.7	301	安山岩	(灰色) 多孔質	
16	4	H-11区	X層	1012	4	1	レキ	片	亜角礫	8.7	8.3	4.0	263	安山岩	(灰白色)	
16	5	H-11区	X層	1012	5	1	レキ	片	亜角礫	10.0	6.5	2.4	180	安山岩	(灰色)	
16	6	H-12区	X層	1012	6	1	レキ	完形	亜角礫	8.5	6.9	5.6	472	安山岩	(灰色) 多孔質	
16	7	H-12区	X層	1012	7	1	U・Rレキ	片	亜角礫	8.2	7.1	6.2	286	安山岩	(灰色) 多孔質	曲線的なくぼみ
16	8	I-10区	X層	1004	-	1	レキ	完形	亜角礫	9.3	8.9	6.3	445	安山岩	(灰白色) 多孔質	
16	9	I-10区	X層	1004	-	1	レキ	完形	亜角礫	6.7	5.7	4.1	208	閃緑岩	(オリーブ灰色)	



第Ⅲ黑色土層 (X層) 上面地形測量図



XI・Ⅱ層上面地形測量図

図34 第Ⅲ黑色土層 (X層) 地形測量図

Ⅶ章 結 語

1. まとめ

(1) 分析結果の評価

放射性炭素年代測定

確率が高い2σ暦年代は、H-1の覆土B層出土が2460-2293cal BC (94.45%)、SF-1炉内出土が2459-2283cal BC (89.82%)で、両者は同時期に存在したと断定できうるほど値が近い。縄文時代後期初頭のH-1は、試掘坑27があるため中央部の状況がわからないが、この時期は内部に炉跡をもつ住居跡が一般的である。一方、SF-1のように炉跡が単独で見つかる事例が多いのもこの時期である。同時期であるならば、住居内部の炉と外部の炉の使用目的が異なる可能性が考えられる。

黒曜石産地推定 (表41 図版16)

分析結果と見た目の特徴を述べる。赤井川産はウ1・ウ2・ウ5で、共通の特徴は原礫面がサンドペーパー状でざらつく手触りであることである。ウ1は球果がないが、赤井川産に必ず球顆がみられるわけではないことが確認できた。ウ3は原礫面がこれらと異なり、ウ4は赤色部分がみられる「花十勝」で、ともに上土幌産である。試料は縄文時代中期末葉～後期初頭のほぼ同じ時期の各住居跡から選出した。この時期には二つの産地の黒曜石が使われていたと判断できる。

表41 黒曜石原産地分析試料一覧表

試料番号	器種	残存状態	石材	出土地点	層位	遺物番号	取上年月日	点数	計測値(cm)			重量(g)	時代	備考
									長さ	幅	厚さ			
ウ1	フレイク	—	黒曜石	住居跡H-1	覆土B層	—	20230904	1	1.7	1.8	0.7	1.2	縄文時代 中期末葉～後期初頭	
ウ2	フレイク	—	黒曜石	住居跡H-2	覆土PB層	8	20230922	1	2.8	4.3	1.0	9.1	縄文時代 中期末葉～後期初頭	
ウ3	フレイク	—	黒曜石	住居跡H-3	覆土BO層	—	20231010	1	2.1	3.6	0.8	5.0	縄文時代 中期末葉～後期初頭	
ウ4	石鏃	半形	黒曜石	J-11区	VI層	—	20230929	1	(1.8)	1.6	0.5	1.1	縄文時代 中期末葉～後期初頭	花十勝
ウ5	石核	—	黒曜石	G-18区	VI層	—	20231012	1	3.7	2.1	1.7	7.8	縄文時代 中期末葉～後期初頭	
試料番号	原礫面			石基の特徴			選別の決め手		産地予想		分析結果			
	部位	色調	特徴											
ウ1	上端面 表面	淡黄色	サンドペーパー状の ざらつき	球顆なし			球顆が無い		赤井川以外		赤井川			
ウ2	表面	淡黄色 ～灰色	見た目はサンドペーパー状 あまりざらつかない 細かい球顆の筋 粗粒の球顆痕	粗粒の球顆			粗～細粒の球顆		赤井川 or 豊泉		赤井川			
ウ3	上端面	灰色 ～白色	綿あめ状	球顆なし			球顆が無い		赤井川以外		上土幌			
ウ4	—	—	—	赤色部分 暗赤色(10R3/4)			赤色部分		白滝 or 十勝		上土幌			
ウ5	上端面 ほか	淡黄色	サンドペーパー状の ざらつき 細かい球顆の筋	球顆の筋			小球顆		典型的な赤井川		赤井川			

(2) 今回の調査のまとめ

縄文時代中期末葉～後期初頭

遺構 調査区西側の尾根の先端部にある台地、有珠川に面する場所に住居跡が3軒以上あり、H-2は4回以上の建て替えと推測する。住居跡は近接し、かつ狭い場所で集中するので、同時期に存在したとは考え難い。単独または数軒単位で存在し、川に面する立地から漁労を目的とした性格のものと推測する。

土器 本遺跡出土のノダップⅡ式の特徴は、胎土に繊維を含み、砂礫は細粒で鉋物が目立つ、地文は細長い節のLRが多く、内面は多数の平行する筋がみられ、工具を使ったナデ調整である。また、

一次整理で十分に分類しきれなかった中期末葉～後期初頭のものの詳細にみれば、胎土は繊維を含まず砂礫の混入が多く、貼付帯と器面を別に施文する余市式が多い。地文は縦位施文も多く、その後のタブコブ式に相当するものには、結束第1種斜行縄文で縦位回転施文もみられる。

石器 近傍の有珠川2・5遺跡の調査結果から、X層（第Ⅲ黑色土層）出土の縄文時代早期前半の剥片石器は黒曜石製のものはない。分析の評価で述べたように、縄文時代中期末葉～後期初頭には複数の産地から入手していることから、時代が進むにつれ、交易地が増加したとも解釈できる。また、頁岩製の石器は数点で、器種はスクレイパーである。この石材のフレイク・チップは2点しか出土していないことから、本遺跡で製作されたのではなく、製品のまま搬入されたと考えられ、頁岩が多い道南地方からと判断される。磨製石斧は破片（残存状態：片）が多く出土した。山林を伐採する活動で使用され破片が生じたと考えられる。片麻岩製のレキ（自然礫）も多くみられた。これらは重いので網の錘と結論付けた。本遺跡では石錘として打ち欠き加工されたものは少ない。また有珠川5遺跡では、縄文時代早期の片麻岩製の石錘が多くみつまっている。網の錘は、早期には加工することが多く、時代を経た縄文時代中～後期頃には、加工しない錘石を縛って固定する方法が一般的になったとも推論できる。

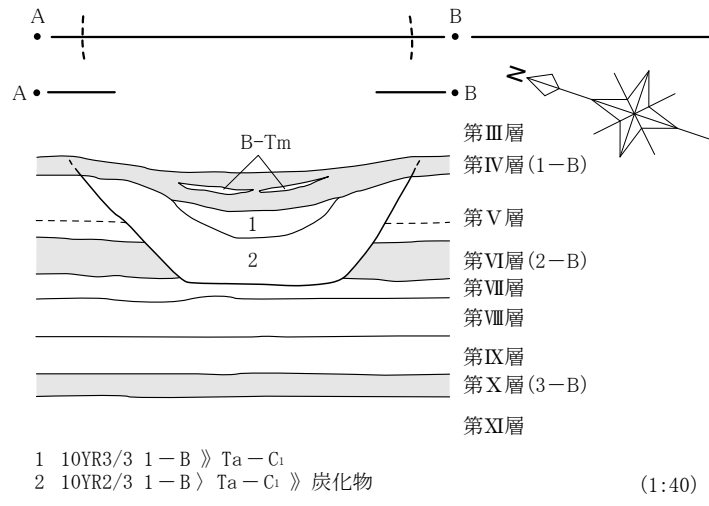
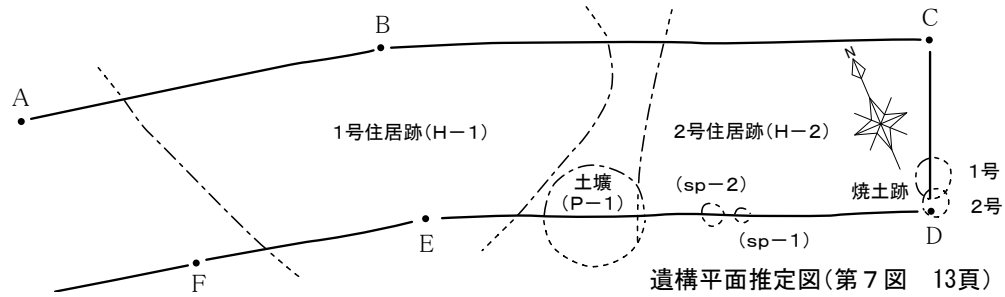
縄文時代晩期 台付の鉢型土器、石棒と多頭（環状）石斧と呼称した石製品の出土地点は、調査区の西側で（図11）、これらはすべて縄文時代晩期と考えられる。

第Ⅲ黑色土層の調査 X層（第Ⅲ黑色土層）を人力で掘削し、遺構・遺物が無いことを確認した意義を強調しておく。

2. 平成元（1989）年の試掘調査の概要（図35・36 表42）

『分布調査報告書 零フレイバー（仮称）開発に伴う埋蔵文化財調査』（苫小牧市教委 1989）にある有珠川7遺跡に関する報告内容を記述しておく。掲載図は再トレースし、明らかな脱字等を訂正した。遺物の表は本遺跡の部分を抜粋した。本文によると、有珠川7遺跡（字高丘56-1）は大半の試掘穴から多量の遺物が出土し、同時にみつかった有珠川4～9遺跡のうちで最大規模である（19,200㎡）。No.27試掘穴では住居跡2軒、土壇1基、焼土跡2か所がみつかった。住居跡はⅧ層・Ⅸ層のT a - dとX層の第Ⅲ黑色土層を切って構築されている。1号（H-1）は隅丸方形で規模が5.4×4.2m、内部は一段低く4.8×2.7mと推測され、2号（H-2）は柱穴が2か所あり、かなり大型と推測されている。土壇（P-1）は2号住居跡（H-2）と一部重複し、堆積状況から土壇が新しいとされる。焼土跡は試掘穴の東壁にみられ、1号焼土は幅36cm、厚さ9～19cm、2号焼土は幅25cm、厚さ8cmで、2号住居跡（H-2）の床面との高さから住居跡に属しないと記述されている。

今回の当センターの調査ではH-1と2、H-2とP-1が近接する部分を、表土除去の試し掘り中に重機で掘り下げてしまい、これらの切り合い関係を確認できなかった。また、焼土跡がある東壁は重機での掘削後、すぐに崩壊したので、焼土跡の存在も確認できなかった。しかし、H-2は、狭い斜面部に複数軒が建て替えられたと考えられるので、平成年間にみつかった1・2号焼土は、いずれかの住居跡の炉跡である可能性がある。また、No.23試掘穴ではⅣ層（第Ⅰ黑色土層）で土壇が1基発見されている。底面はⅦ層（ⅥL層）中で逆台形を呈し、検出面の規模は幅1.8m、深さ0.56mである。上位でくぼむⅣ層中には白頭山苫小牧火山灰（B-Tm）が堆積し、下位の覆土には炭化物を含む。遺物は伴わないが、第Ⅰ黑色土層の土坑は、有珠川2遺跡でも14基みつまっている。当センターの調査で、縄文時代晩期の遺物が出土したことも加えると、担当者としてはⅣ層（第Ⅰ黑色土層）も発掘調査すべきであったとの思いが残る。 （末光）



土壌実測図 (第9図 17頁)

図35 平成年間の試掘調査の遺構図(1)

表42 平成年間の試掘調査の成果

遺構一覧表

遺跡名	試掘穴	遺構名	数量
有珠川7	No. 23	土壌	1
	No. 27	住居跡	2
		土壌	1
		焼土跡	2

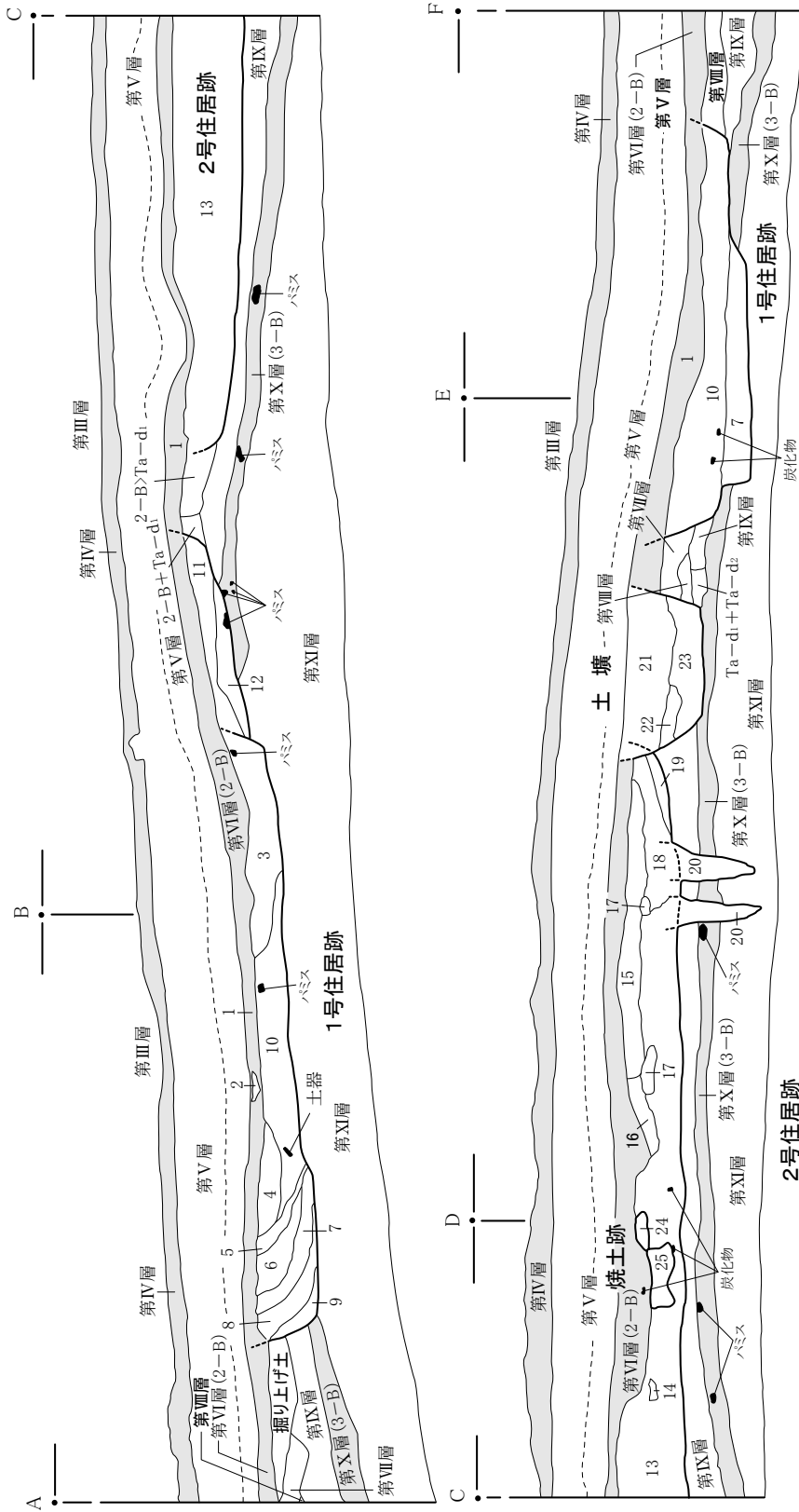
遺物一覧表

遺跡名	試掘穴	土器	石器	剥片	削片	礫	合計
有珠川7	No. 22	36					36
	No. 24	1		1		1	3
	No. 25	4	3	2	1	1	11
	No. 26	2					2
	No. 27	7				1	8
	No. 81	6	2	1	2	13	24
	No. 82					1	1

土器・石器一覧表

No.	遺跡名	試掘穴	部位	文様	色調	器厚 (mm)	時期	備考
9	有珠川7	No. 22	胴部	斜縄文	暗褐色・茶褐色	5	晩期	器表剥離
10		No. 24	胴部	斜縄文	茶褐色・同	7	中期	
12		No. 25	口縁	(空欄)	黒色・暗褐色	10	中期	
13			胴部	”(不明)	灰褐色・黒褐色	8	中期	内面炭化物
16		No. 26	胴部	斜縄文	暗褐色・茶褐色	10	中期	
17			胴部	斜縄文	茶褐色・暗褐色	11	中期	
18		No. 27	胴部	斜縄文	茶褐色・黒褐色	10	中期	
19			胴部	斜縄文	褐色・暗褐色	12	中期	
20			胴部	斜縄文	褐色・暗褐色	7	中期	内面凹凸
21		No. 81	胴部	羽状縄文	茶褐色・黒褐色	11	中期	
22			底部	斜縄文	茶褐色・黒褐色	11	中期	平底

No.	遺跡名	試掘穴	種別	材質	長軸	短軸	厚さ	重量	備考
					単位: mm			(g)	
14	有珠川7	No. 25	磨製石斧	緑色泥岩	72.0	46.6	16.7	101.4	基部(破損?)
15			敲石	チャート	125.0	86.5	56.3	837.9	完形品



- | | | |
|--------------------|-----------------|----------------------------|
| 1号住居跡 (H-1) | 1 10YR1.7/1 黒色 | 2-B > Ta-d1 > Ta-d1 (=VI層) |
| | 2 10YR3/4 暗褐色 | Ta-d1 + Ta-d2 |
| | 3 10YR2/2 黒褐色 | 2-B > Ta-d1 > Ta-d2 |
| | 4 10YR2/3 黒褐色 | 2-B + Ta-d1 > Ta-d2 |
| | 5 10YR3/2 黒褐色 | 2-B + Ta-d1 |
| | 6 10YR2/2 黒褐色 | 2-B > Ta-d1 |
| | 7 10YR3/3 暗褐色 | 2-B > Ta-d2 |
| | 8 10YR2/2 黒褐色 | 2-B > Ta-d1 > Ta-d2 |
| | 9 10YR3/4 暗褐色 | 2-B > Ta-d2 > Ta-d1 |
| | 10 10YR2/1 黒色 | 2-B > Ta-d1 > Ta-d2 |
| | 11 10YR2/3 黒褐色 | 2-B > Ta-d1 |
| | 12 10YR3/4 暗褐色 | Ta-d2 > Ta-d1 + 2-B |
| 2号住居跡 (H-2) | 13 10YR2/2 暗褐色 | 2-B + Ta-d1 > Ta-d2 |
| | 14 10YR3/4 暗褐色 | Ta-d1 |
| | 15 10YR2/1 黒色 | 2-B > Ta-d1 > Ta-d2 |
| | 16 10YR3/3 暗褐色 | 2-B > Ta-d2 |
| | 17 10YR3/4 暗褐色 | Ta-d1 + Ta-d2 |
| | 18 10YR3/3 暗褐色 | 2-B + Ta-d1 > Ta-d2 |
| | 19 10YR2/1 黒色 | 2-B |
| sp-1・2覆土 | 20 5YR3/6 暗赤褐色 | Ta-d2 > 2-B + Ta-d1 |
| 1号住居跡 (P-1) | 21 5YR2/2 黒褐色 | 2-B > Ta-d1 + Ta-d2 |
| | 22 5YR2/1 黒褐色 | 2-B > Ta-d1 > Ta-d2 |
| | 23 7.5YR3/4 暗褐色 | 2-B + Ta-d2 > Ta-d1 |
| 土壙 (P-1) | 24 7.5YR3/4 暗褐色 | 焼土 (2号) |
| | 25 7.5YR3/4 暗褐色 | 焼土 (1号) |

遺構地層堆積図 (第6図 13頁)
 (原図1:80を90%に縮小)
 土層注記のゴチック体は当方で修整したもの

図36 平成年間の試掘調査の遺構図(2)

付篇 1. 有珠川 7 遺跡の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

1. はじめに

有珠川 7 遺跡より採取された試料について、加速器質量分析法（AMS 法）による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、H-1 の覆土 B 層から採取された試料 No. U 1（PLD-51422）と、SF-1 の VI 層から採取された試料 No. U 2（PLD-51423）で、いずれも最終形成年輪を欠く、部位不明の炭化材である。

測定試料の情報、調製データは表 1 のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS：NEC 製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C 年代、暦年代を算出した。

表 1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-51422	試料 No. U1 遺構：H-1 層位：覆土 B 層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）
PLD-51423	試料 No. U2 遺構：SF-1 層位：VI 層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2 mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0 mol/L, 塩酸：1.2 mol/L）

3. 結果

表 2 に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C 年代を、図 1 に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下 1 桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C 年代は AD 1950 年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C 年代（yrBP）の算出には、¹⁴C の半減期として Libby の半減期 5568 年を使用した。また、付記した¹⁴C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C 年代がその¹⁴C 年代誤差内に入る確率が 68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C 濃度が一定で半減期が 5568 年として算出された¹⁴C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C 濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C 年代の暦年較正には OxCal 4.4（較正曲線データ：IntCal20）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された¹⁴C 年代誤差に相当する 68.27% 信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は 95.45% 信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表 2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年時代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-51422 試料No. U1	-25.61 \pm 0.18	3881 \pm 20	3880 \pm 20	2454-2418 cal BC (22.56%) 2408-2373 cal BC (22.36%) 2355-2339 cal BC (10.01%) 2324-2301 cal BC (13.34%)	2460-2293 cal BC (95.45%)
PLD-51423 試料No. U2	-24.79 \pm 0.18	3866 \pm 21	3865 \pm 20	2448-2422 cal BC (12.20%) 2405-2378 cal BC (16.06%) 2350-2290 cal BC (40.01%)	2459-2283 cal BC (89.82%) 2250-2234 cal BC (4.01%) 2218-2210 cal BC (1.62%)

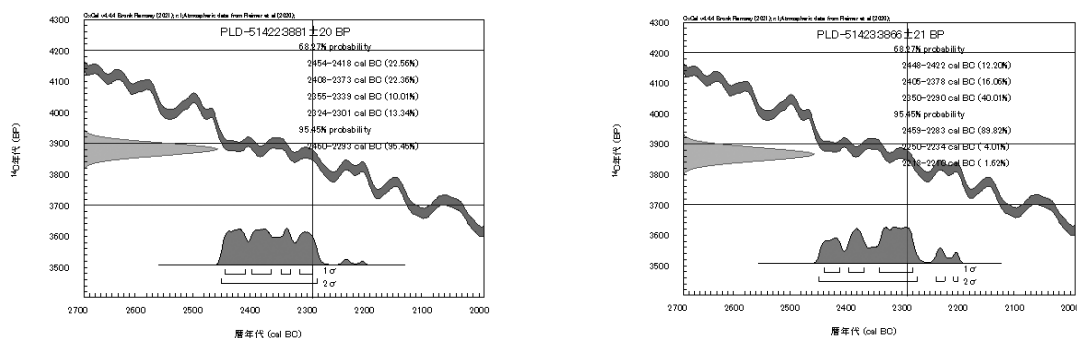


図 1 暦年較正結果

以下、2 σ 暦年代範囲（確率95.45%）に着目して結果を整理する。なお、縄文時代の暦年代についてはOmoto et al. (2010) を参照した。

H-1 の試料No. U 1 (PLD-51422) は、2460-2293cal BC (95.45%) の暦年代を示した。S F-1 の試料No. U 2 (PLD-51423) は、2459-2283cal BC (89.82%)、2250-2234cal BC (4.01%)、2218-2210cal BC (1.62%) の暦年代を示した。いずれも縄文時代中期末～後期初頭に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料は、2点とも最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり、測定結果は古木効果の影響を受けている可能性がある。その場合、試料の木が実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりもやや新しい年代であると考えられる。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会。
- Omoto, K., Takeishi, K., Nishida, S. and Fukui, J. (2010) Calibrated ^{14}C Ages of Jomon Sites, NE Japan, and Their Significance. *Radiocarbon*, 52(2), 534-548.
- Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capano, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talamo, S. (2020)
- The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62(4), 725-757, doi: 10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)

(令和 6 (2024) 年 1 月 19 日受領 内容点検・編集 末光)

付篇 2. 有珠川 7 遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定

パレオ・ラボ 竹原弘展

1. はじめに

苫小牧市高丘に所在する有珠川 7 遺跡から出土した縄文時代中期末～後期初頭の黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光 X 線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2. 試料と方法

分析対象は、遺跡より出土した黒曜石製石器 5 点である (表 1)。時期は、縄文時代中期末～後期初頭とみられている。試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

表 1 分析対象

分析 No.	器種	残存状態	出土地点	層位	遺物番号	取上年月日	時代	法量 (cm, g)				備考
								長さ	幅	厚さ	重量	
ウ1	フレイク	—	住居跡H-1	覆土B層	—	20230904	縄文時代 中期末～ 後期初頭	1.7	1.8	0.7	1.2	原礫面
ウ2	フレイク	—	住居跡H-2	覆土PB層	8	20230922		2.8	4.3	1.0	9.1	原礫面
ウ3	フレイク	—	住居跡H-3	覆土B0層	—	20231010		2.1	3.6	0.8	5.0	原礫面
ウ4	石鏃	半形	J-11区	VI層	—	20230929		(1.8)	1.6	0.5	1.1	赤色部分有り(花十勝)
ウ5	石核	—	G-18区	VI層	—	20231012		3.7	2.1	1.7	7.8	原礫面

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光 X 線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、X 線管ターゲットはロジウム (Rh)、X 線検出器は SDD 検出器である。測定条件は、測定時間 100sec、照射径 8 mm、電圧 50kV、電流 1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタに Pb 測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光 X 線分析による X 線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた (望月, 1999 など)。本方法では、まず各試料を蛍光 X 線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム (K)、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム (Y)、ジルコニウム (Zr) の合計 7 元素の X 線強度 (cps : count per second) について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4) $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

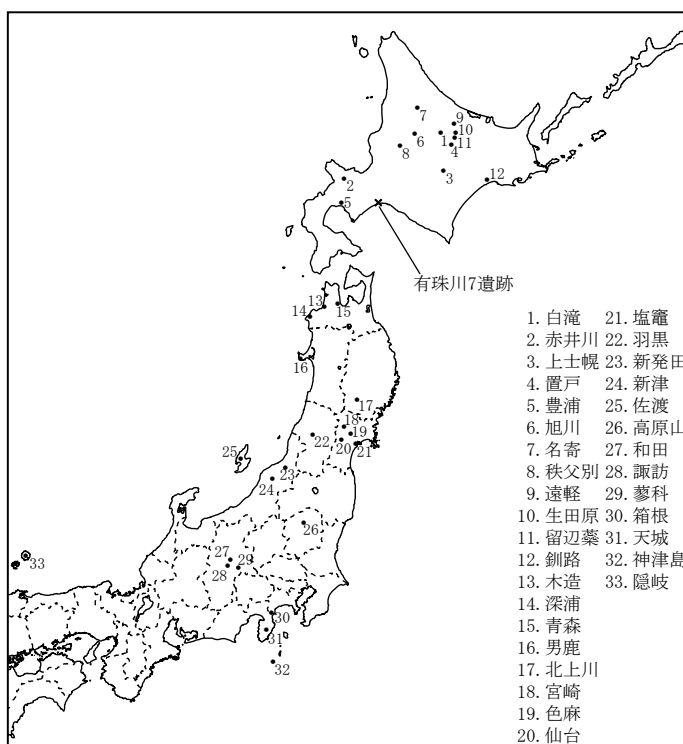


図 1 黒曜石産地分布図 (東日本)

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図（横軸Rb分率－縦軸Mn強度×100／Fe強度の判別図と横軸Sr分率－縦軸log（Fe強度／K強度）の判別図）を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせることで指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log（Fe強度／K強度）の値が減少する（望月，1999）。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

表3に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

分析の結果、ウ1、ウ2、ウ5の3点が赤井川群（北海道、赤井川エリア）、ウ3、ウ4の2点が上士幌群（北海道、上士幌エリア）の範囲にプロットされた。

図2、3の判別図では、赤井川群と上士幌群の一部に重複があるため、区別が困難な場合がある。そのため、以下に示すY分率を算出している。

$$Y分率 = Y強度 \times 100 / (Rb強度 + Sr強度 + Y強度 + Zr強度)$$

赤井川群と上士幌群、上士幌群と一部重複のある青森群の原石および石器について、横軸Y分率、縦軸Mn強度×100／Fe強度をプロットした判別図を図4に示す。図4においても、3点が赤井川群、2点が上士幌群の範囲にプロットされた。

表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

表2 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43), 八号沢露頭(15)
		白滝2	7の沢川支流(2), IK露頭(10), 十勝石沢露頭直下河床(11), アジサイの滝露頭(10)
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)
	上士幌	上士幌	十勝三股(4), タウシユベツ川右岸(42), タウシユベツ川左岸(10), 十三ノ沢(32)
	置戸	置戸山	置戸山(5)
		所山	所山(5)
	豊浦	豊浦	豊泉(10)
	旭川	旭川	近文台(8), 雨紛台(2)
	名寄	名寄	忠烈布川(19)
	秩父別	秩父別1	中山(65)
		秩父別2	
		秩父別3	
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)
留辺蘂	留辺蘂1	ケシヨマップ川河床(9)	
	留辺蘂2		
釧路	釧路	釧路市営スキー場(9), 阿寒川右岸(2), 阿寒川左岸(6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸(15), 鶴ヶ坂(10)
	深浦	八森山	岡崎浜(7), 八森山公園(8)
	青森	青森	天田内川(6)
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)
		脇本	脇本海岸(4)
岩手	北上川	北上折居1	北上川(9), 真城(33)
		北上折居2	
		北上折居3	
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)
	色麻	根岸	根岸(40)
	仙台	秋保1	土蔵(18)
		秋保2	
塩竈	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽黒	月山	月山荘前(24), 大越沢(10)
		榎引	たらのき代(19)
新潟	新発田	板山	板山牧場(10)
	新津	金津	金津(7)
	佐渡	真光寺	追分(4)
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢(22)
		七尋沢	七尋沢(3), 宮川(3), 枝持沢(3)
		西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場(30)
		鷹山	鷹山(14), 東餅屋(54)
		小深沢	小深沢(42)
		土屋橋1	土屋橋西(10)
		土屋橋2	新和田トンネル北(20), 土屋橋北西(58), 土屋橋西(1)
		古峠	和田峠トンネル上(28), 古峠(38), 和田峠スキー場(28)
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)
高松沢	高松沢(19)		
諏訪	藜科	星ヶ台	星ヶ台(35), 星ヶ塔(20)
		冷山	冷山(20), 麦草峠(20), 麦草峠東(20)
		芦ノ湯	芦ノ湯(20)
神奈川	箱根	畑宿	畑宿(51)
		鍛冶屋	鍛冶屋(20)
		上多賀	上多賀(20)
静岡	天城	柏峠	柏峠(20)
		恩馳島	恩馳島(27)
東京	神津島	砂糠崎	砂糠崎(20)
		久見	久見パーライト中(6), 久見採掘現場(5)
島根	隠岐	箕浦	箕浦海岸(3), 加茂(4), 岸浜(3)

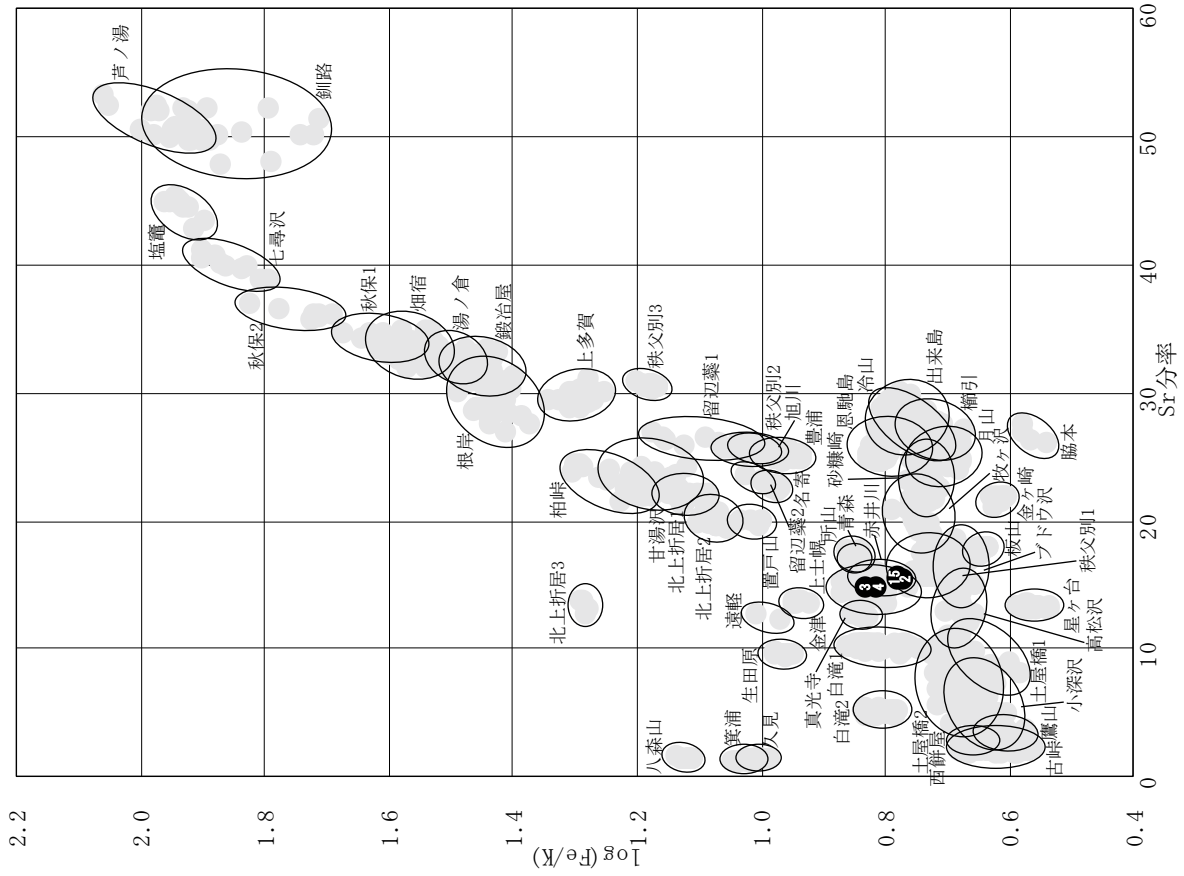


図3 黒曜石産地推定判別図(2)

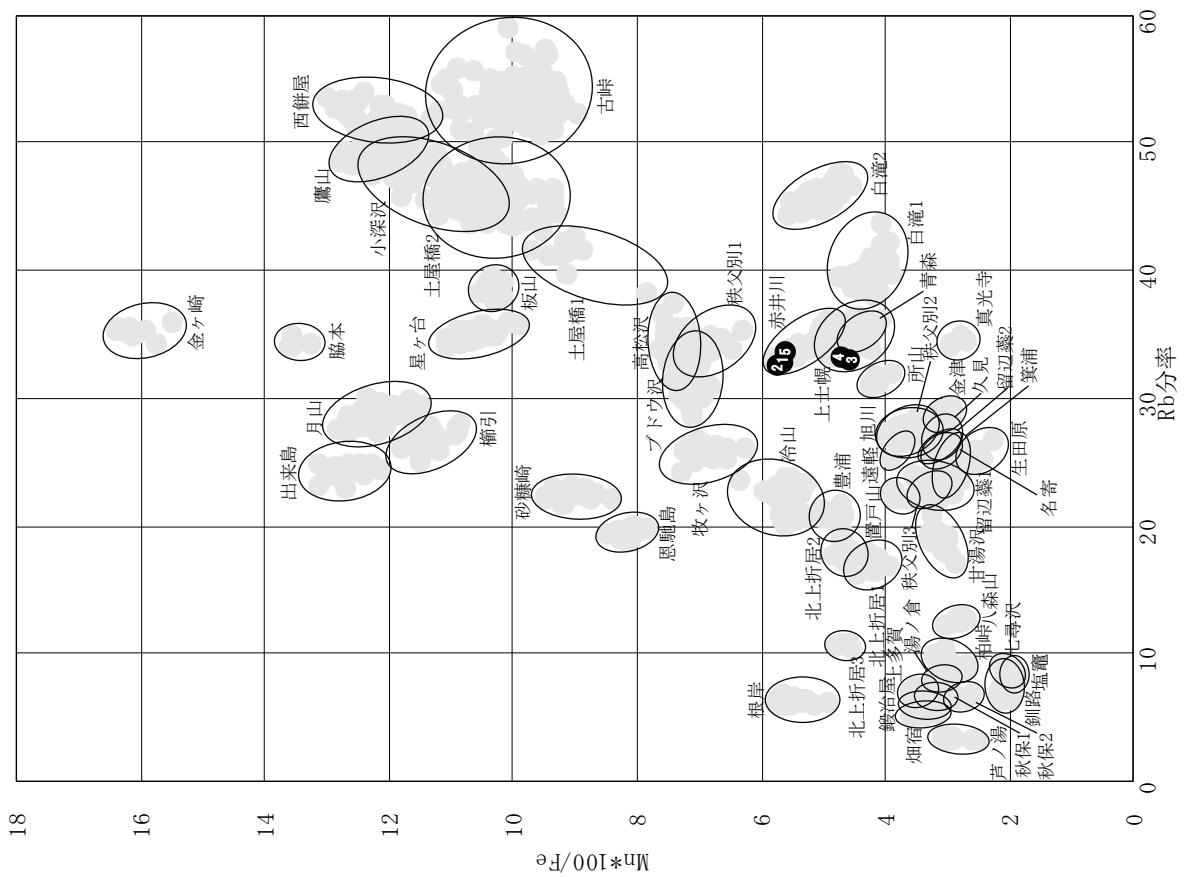


図2 黒曜石産地推定判別図(1)

表3 測定値および産地推定結果

分析 No.	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log $\frac{Fe}{K}$	Y分率	判別群	エリア	分析 No.
ウ1	282.1	96.6	1701.3	762.2	361.2	385.8	817.5	32.76	5.68	15.52	0.78	16.58	赤井川	赤井川	ウ1
ウ2	216.3	73.9	1283.5	557.3	262.3	283.3	602.2	32.69	5.76	15.38	0.77	16.62	赤井川	赤井川	ウ2
ウ3	234.9	73.4	1595.3	700.6	314.6	388.9	716.0	33.05	4.60	14.84	0.83	18.34	上士幌	上士幌	ウ3
ウ4	290.1	89.7	1895.6	907.3	405.2	491.5	923.7	33.26	4.73	14.85	0.82	18.02	上士幌	上士幌	ウ4
ウ5	302.0	102.8	1831.0	747.2	345.8	369.0	763.0	33.58	5.61	15.54	0.78	16.58	赤井川	赤井川	ウ5

4. おわりに

有珠川7遺跡より出土した黒曜石製石器5点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、3点が赤井川、2点が上士幌エリア産と推定された。

引用文献

望月明彦(1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育委員会編

「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2—上和田城山遺跡篇—」: 172-179, 大和市教育委員会.

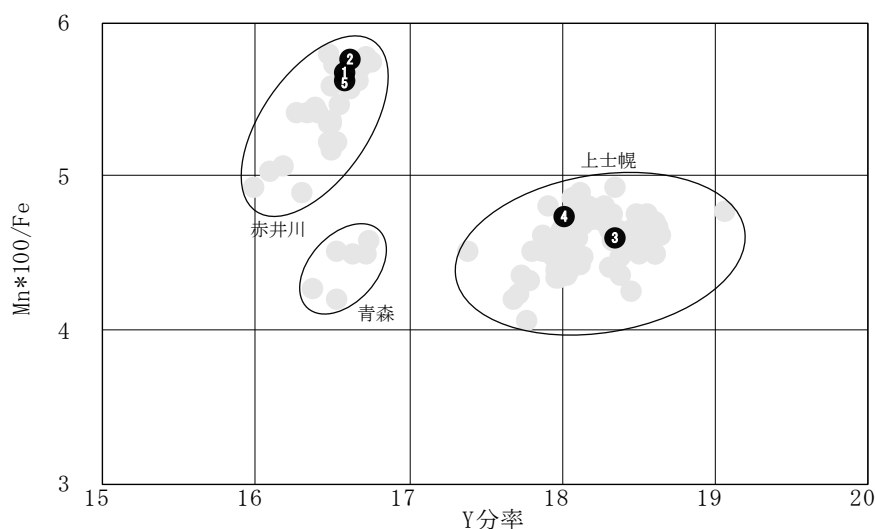


図4 黒曜石産地推定判別図(3)

(令和6(2024)年1月19日受領 内容点検・編集 末光)

写真図版



重機による表土除去作業 NW → SE



沈殿槽設置状況 SE → NW



調査区全景 俯瞰



カメラ場設置状況 E → N



調査区と有珠川 NE → SW



平成元年試掘トレンチ NW → SE

調査に関わる整備及び、調査区と周辺的环境



H-1 土層断面 N→S



H-1 土層断面 S→N



H-1 土層断面 NE→SW



H-1 調査状況 SW→NE



H-1 調査状況 SW→NE



H-1 調査状況 SE → NW



H-1 掘り上げ土検出状況 S → N



H-1 sp-1 土層断面 NE → SW



H-1 遺物出土状況 SE → NW



H-1 sp-1 完掘 NE → SW

遺構の調査 (2)

図版 4



H-2 土層断面 SW→NE



H-2 土層断面 NW→SE



H-2 土層断面 SW→NE



H-2 掘り上げ土層断面 NW→SE



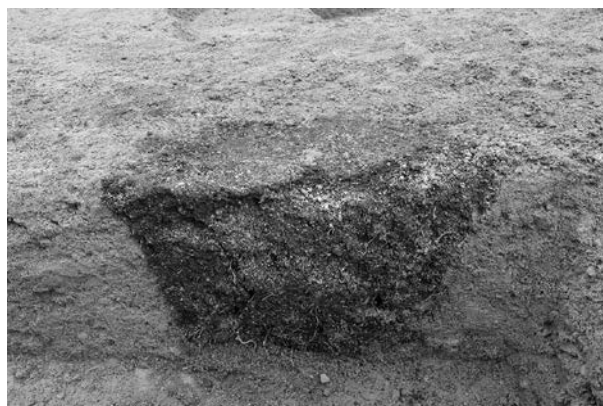
H-2 遺物出土状況 N→S



H-2 sp-1(左)・2(右) 土層断面 SW→NE



H-2 sp-12 土層断面 S→N



H-2 sp-3 土層断面 S→N



H-2 sp-9・10・11(左から) 完掘 NE→SW



H-3 検出作業 E→W



H-3 調査状況 E→W



H-3 土層断面 E→W

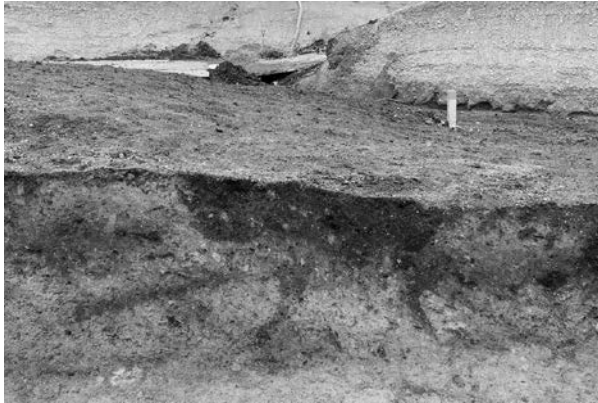


H-3 遺物出土状況 E→W

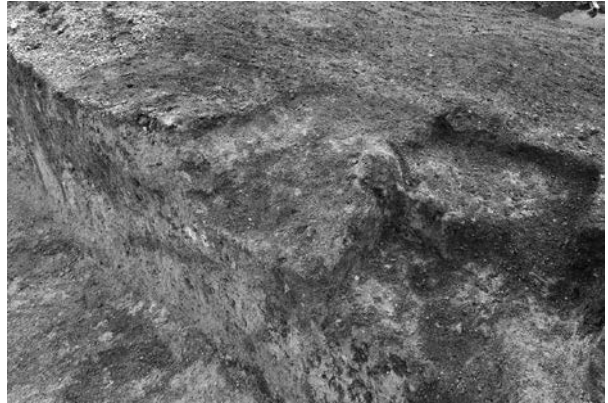


H-3 hf-1 土層断面 E→W

図版 6



P-1 土層断面 N→S



P-1 完掘 NW→SE



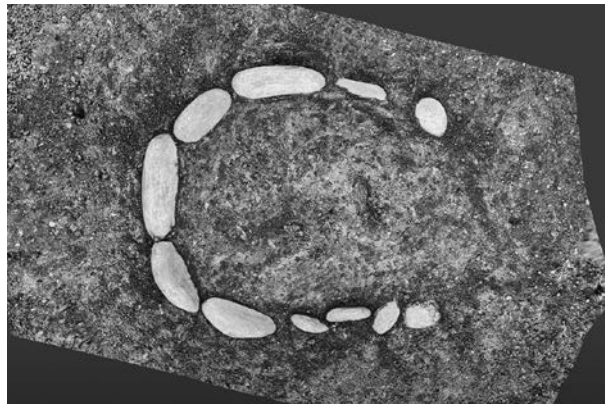
P-2 土層断面 SE→NW



P-2 完掘 SE→NW



SF-1 検出状況 SE→NW



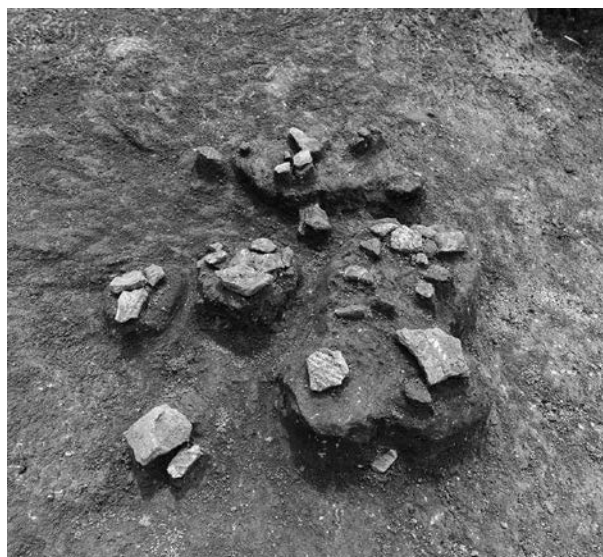
SF-1 検出状況 (LiDAR スキャナ取得データ) 俯瞰



SF-1 土層断面 E→W



F-1 検出状況 N→S



PS-1 検出状況 N→S



PS-2 検出状況 SE→NW



PS-3 検出状況 SE→NW



PS-4 検出状況 N→S



HO-1 検出状況 W→E



HO-1 土層断面 W→E

遺構の調査 (6)



東側調査状況 NE → SW



西側調査状況 NW → SE



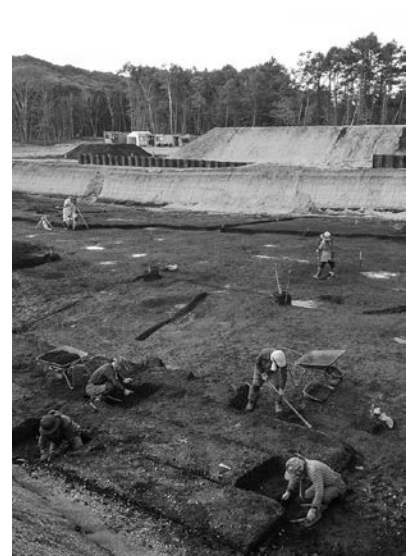
中央部調査状況 SW → NE



中央部調査状況 NE → SW



調査状況 俯瞰



西側調査状況 SE → NW

第Ⅱ黒色土層（Ⅵ層）の調査（1）



遺構確認調査 NE → SW



豪雨翌日の冠水状況 W → E



火山弾検出層位 S → N



火山弾検出作業 N → S



土器出土状況 W → E



土器出土状況 W → E



石製品出土状況 N → S



石製品出土状況 NE → SW

第Ⅱ黑色土層（Ⅵ層）の調査（2）



X層調査区設定状況 SE → NW



調査状況 E → W



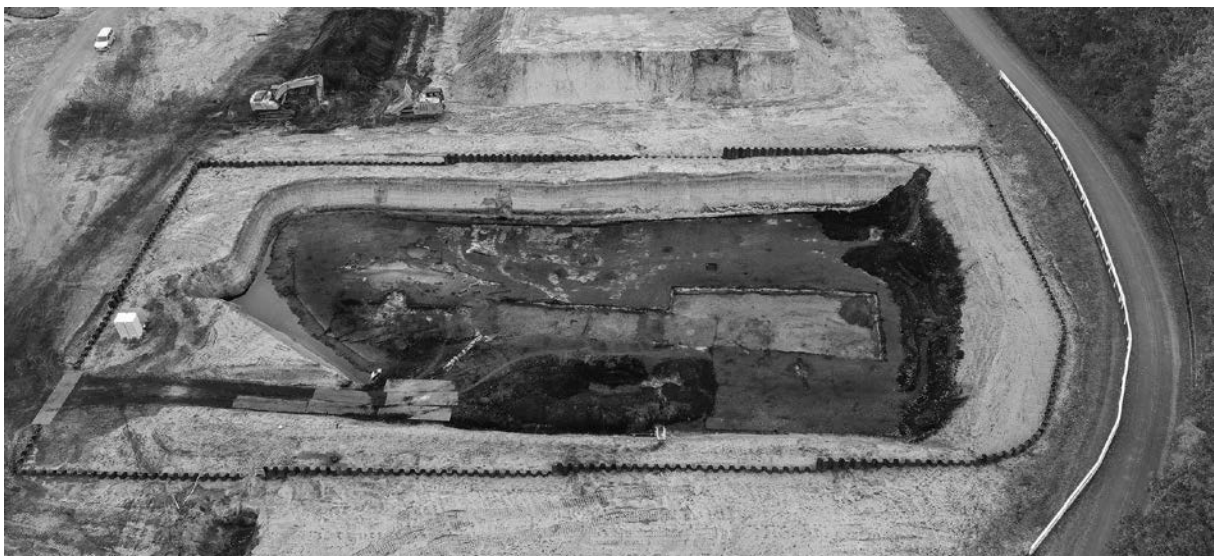
調査状況 SW → NE



礫出土状況 SW → NE



礫出土状況 SW → NE



調査完了状況 S → N

第Ⅲ黑色土層（X層）の調査・調査完了状況



1 H-2



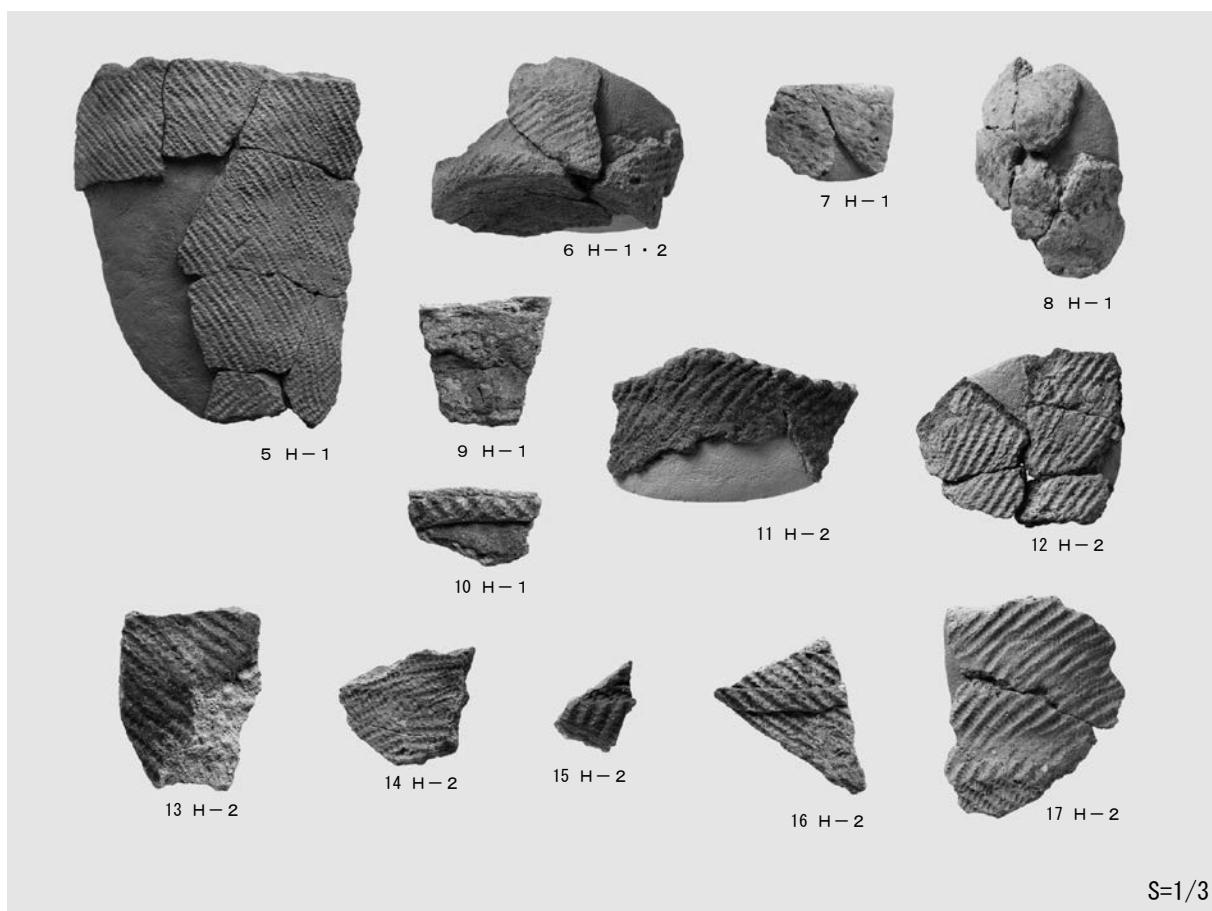
2 PS-1



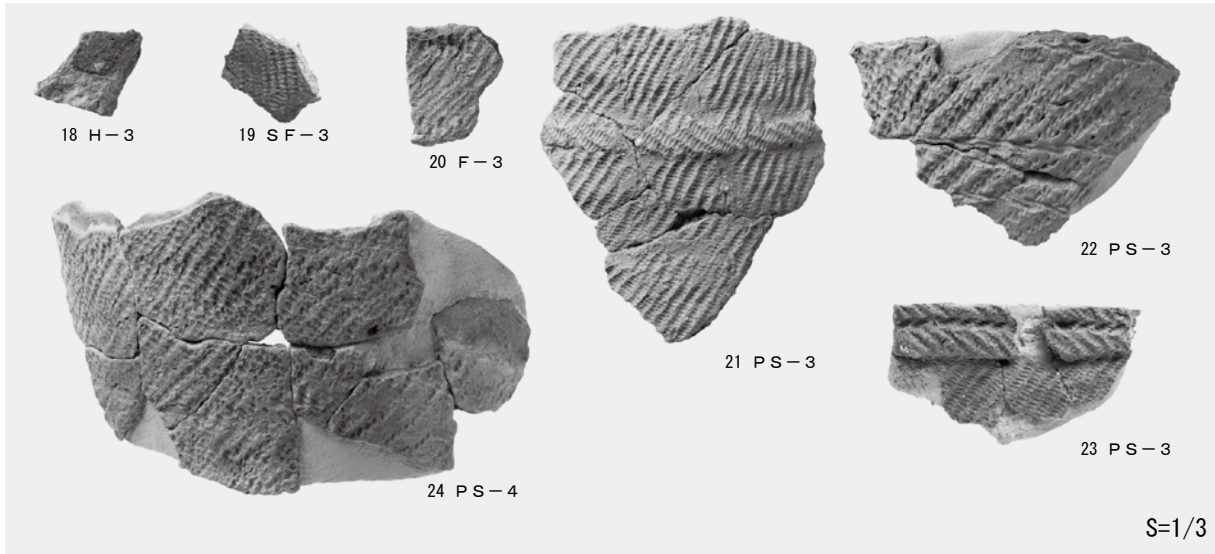
3 PS-2



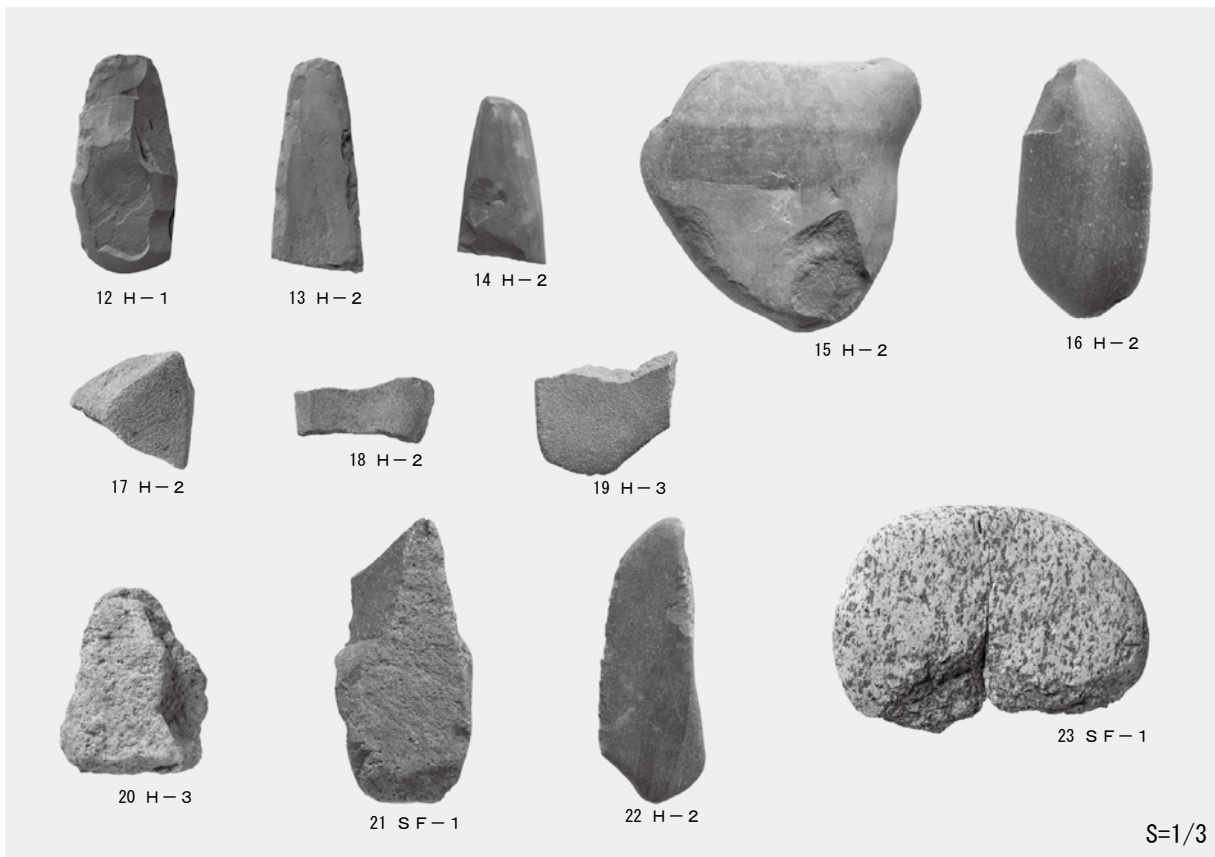
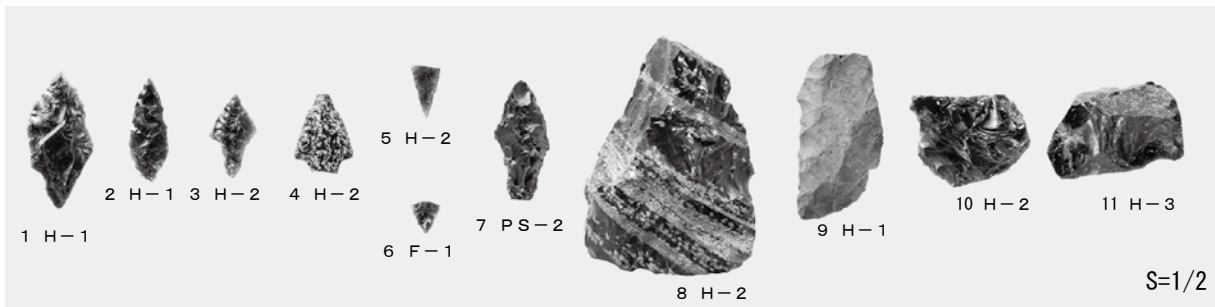
4 PS-4



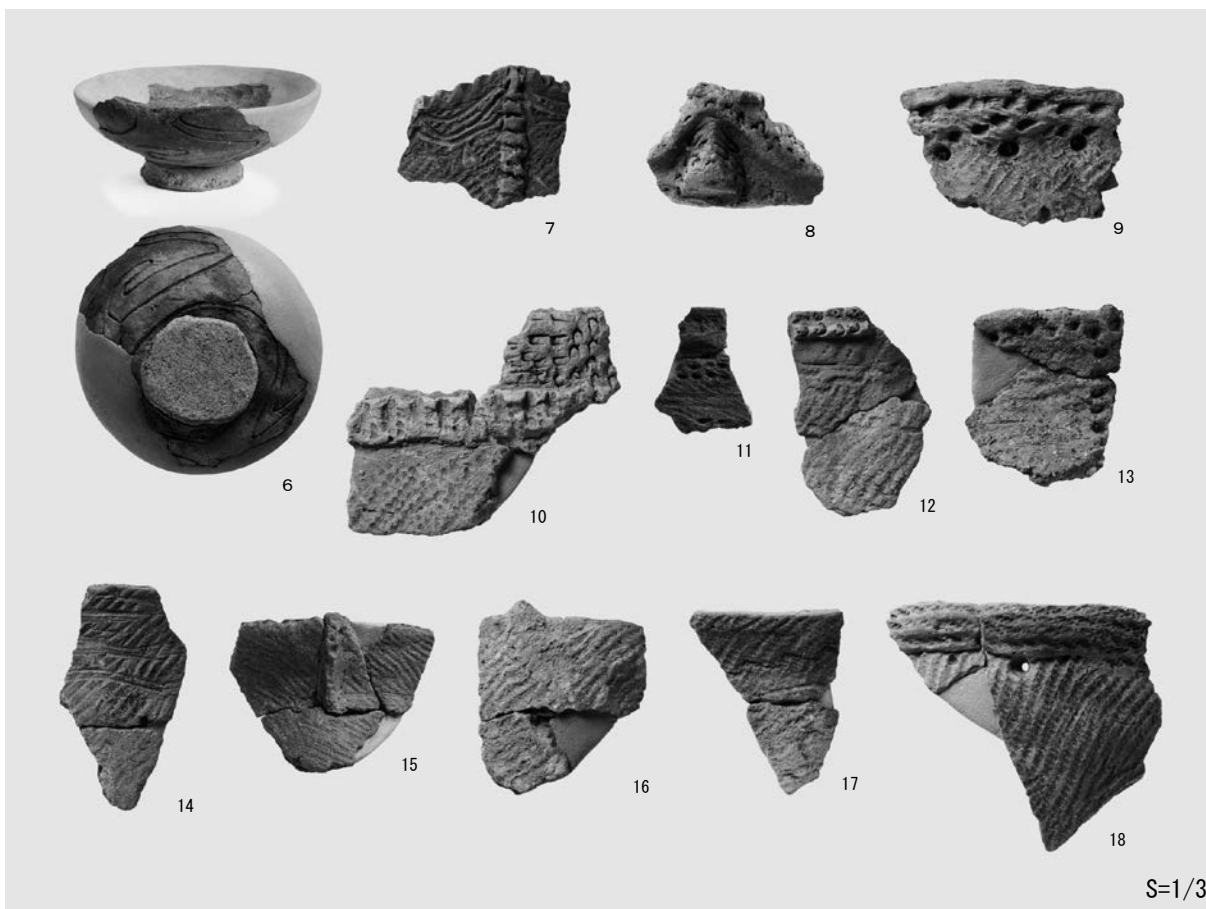
S=1/3



遺構出土の土器 (2)

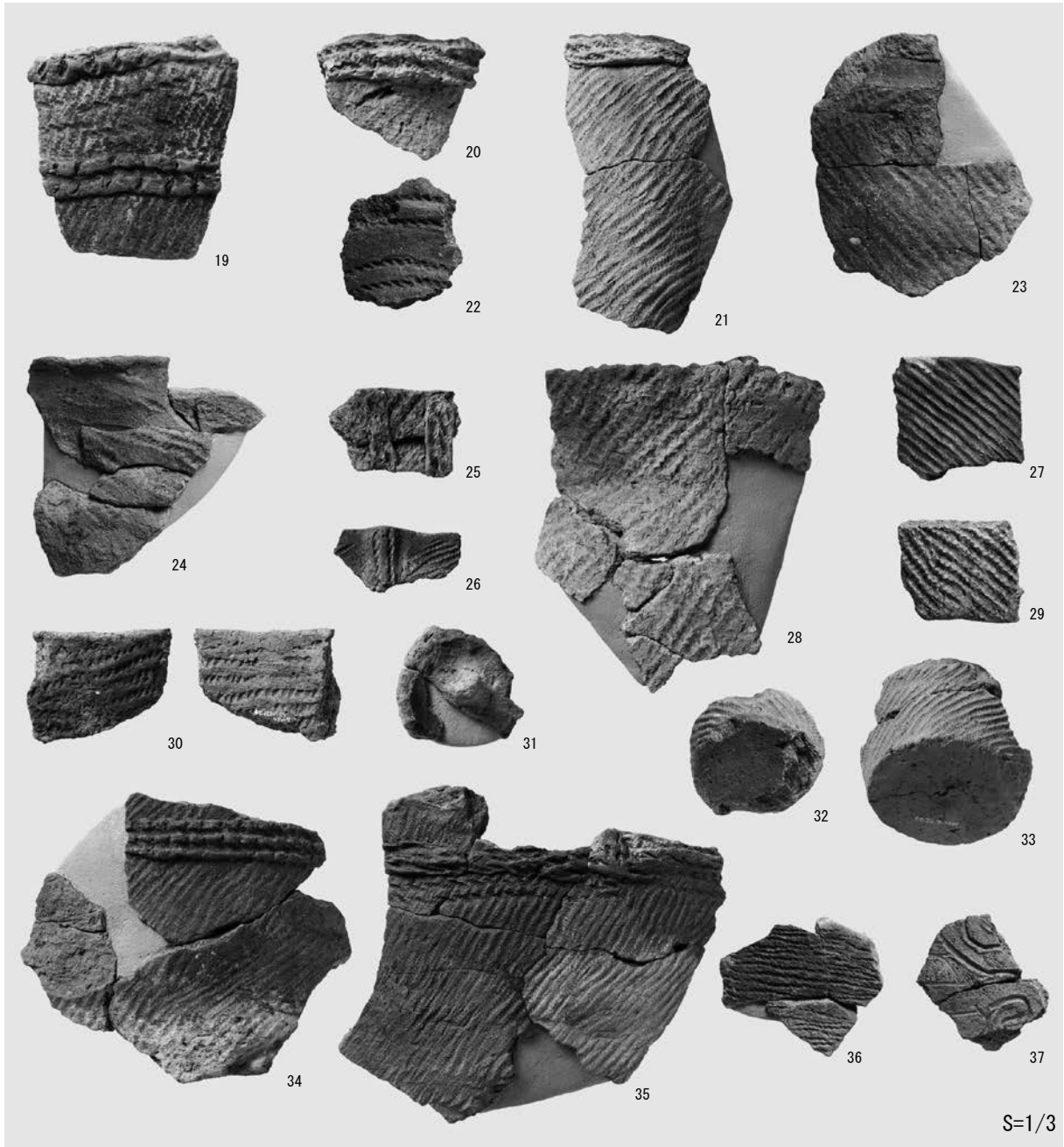


遺構出土の石器



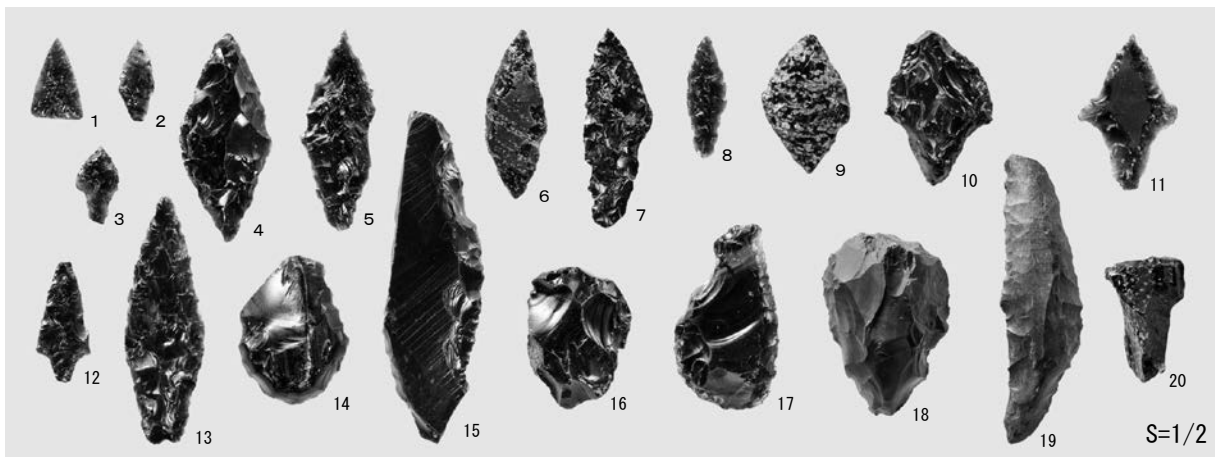
S=1/3

包含層出土の土器 (1)



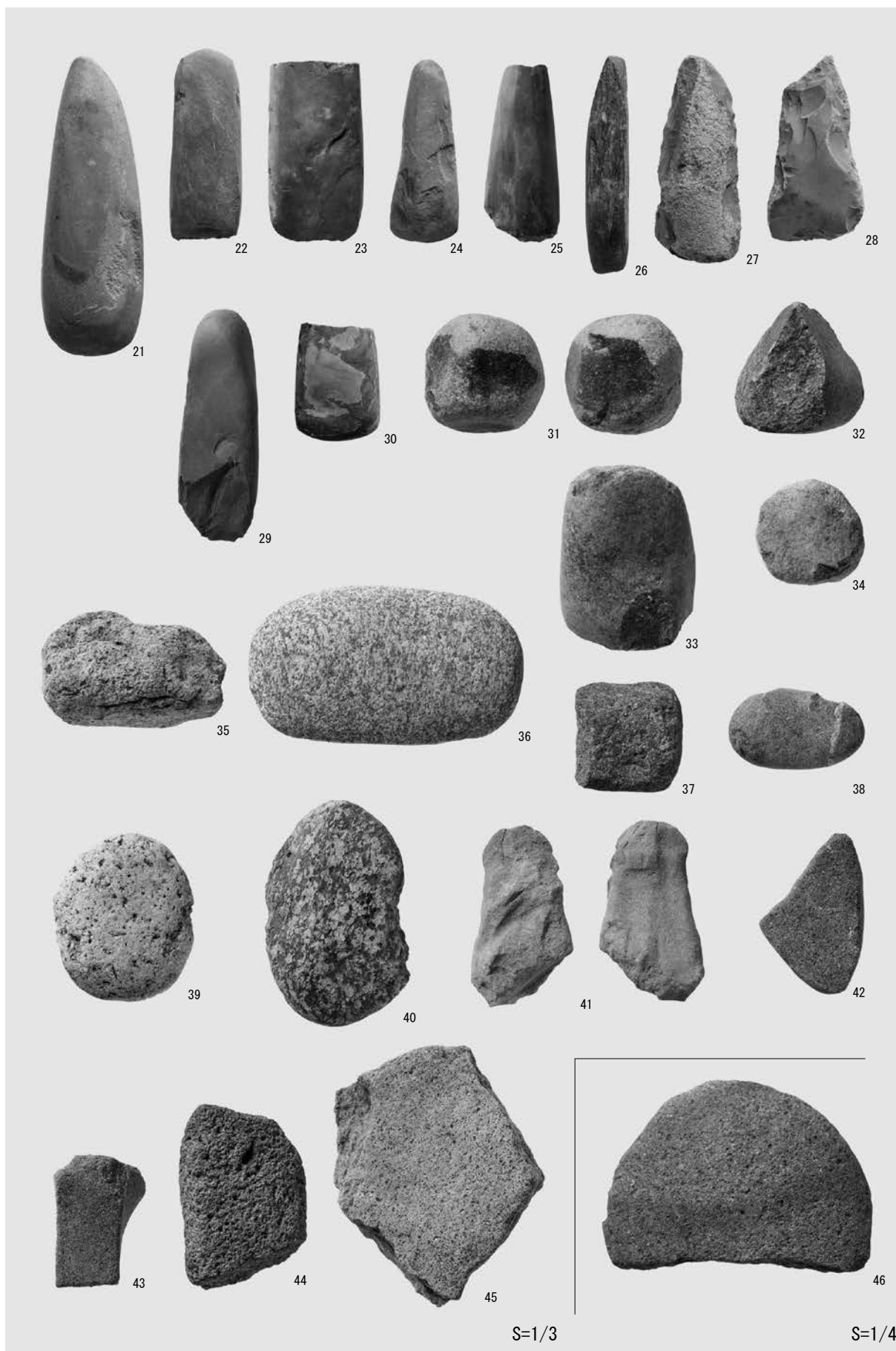
S=1/3

包含層出土の土器（2）

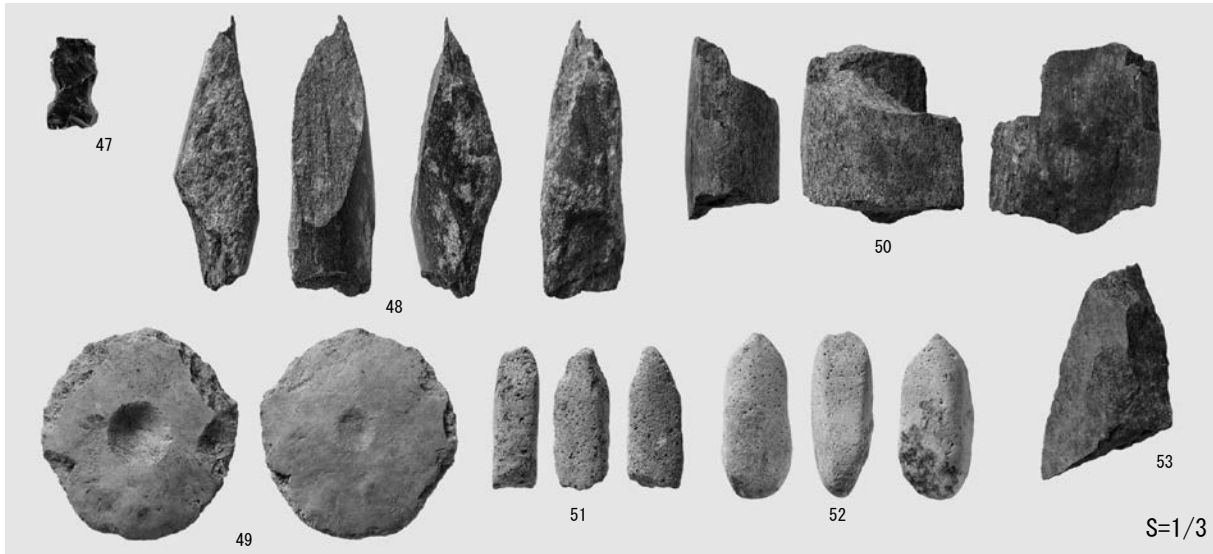


S=1/2

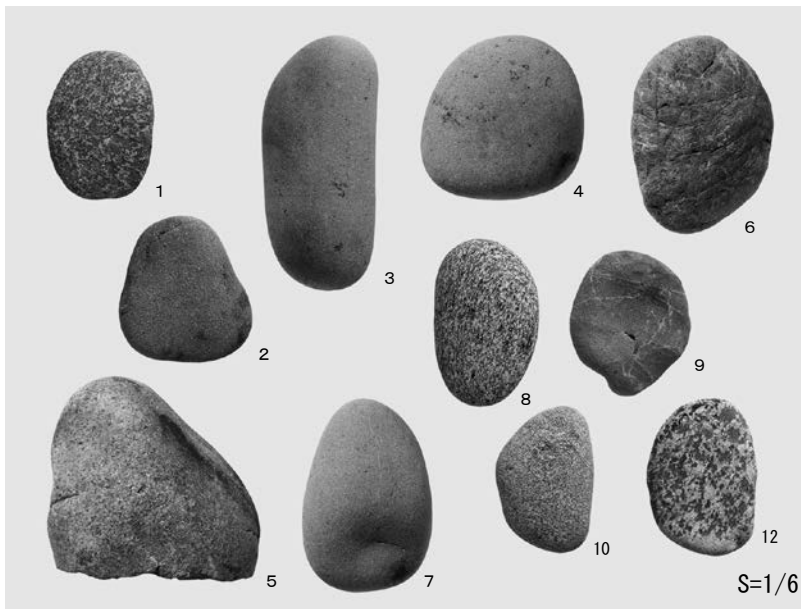
包含層出土の石器（1）



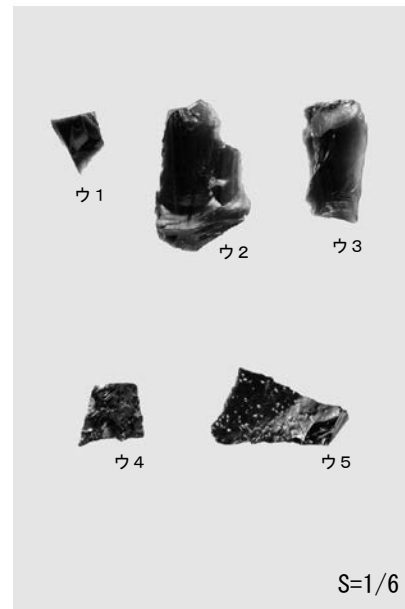
包含層出土の石器 (2)



包含層出土の石製品



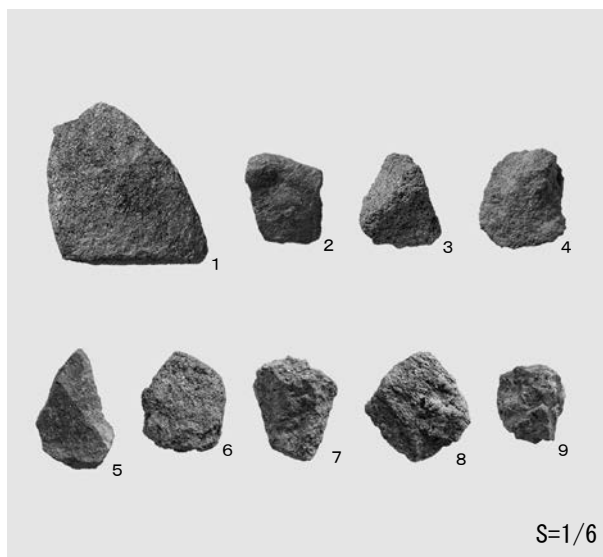
S F - 1 出土の礫



黒曜石原産地分析試料



包含層出土の礫 (片麻岩)



第Ⅲ黒色土 (X層) 出土の礫

引用参考文献

団体・組織刊行物

- 地質調査所 1980 「千歳地域の地質」札幌（4）第42号 地域地質研究報告 5万分の1図幅
- 苫小牧市 1973 『目でみる苫小牧の百年』
- 苫小牧市 1977 『苫小牧市史』資料編 第一巻
- 苫小牧市 1977 『苫小牧市史』資料編 第二巻
- 苫小牧市 1975 『苫小牧市史』上巻
- 苫小牧市 1976 『苫小牧市史』下巻
- ペドロジスト懇談会 1984 『土壌調査ハンドブック』博友社
- 北海道開発庁 1959 「苫小牧」（札幌－第53号）5万分の1地質図幅説明書

苫小牧市教育委員会 埋蔵文化財調査報告書

- 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 1989 『苫小牧市・ゴルフ場造成地 分布調査報告』1989-No.8
零・フレイバー（仮称）開発に伴う埋蔵文化財調査
- 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2008 『有珠川5遺跡』平成19年度
有珠川砂防えん堤建設事業用地内埋蔵文化財発掘調査
- 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2019 『覚生1遺跡・覚生2遺跡』
樽前山火山砂防工事のうち熊の沢川2号砂防えん堤建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 苫小牧市教育委員会・苫小牧市埋蔵文化財調査センター 2020 『勇振1遺跡』
植苗地区リゾート開発計画に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

都道府県・市町村埋蔵文化財発掘調査報告書

- 北海道教育委員会 1979 『有珠川2・植苗3遺跡』北海道縦貫自動車道建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

論文・書籍等

- 大久保雅弘・藤田至則 1984 『地学ハンドブック・新訂版』築地書館
- 小山正忠・竹原秀雄 2011 『新版 標準土色帳』34版 日本色研事業株式会社
- 古川竜太・吉本充宏・荒川忠宏・工藤肇 2008 「苫小牧市有珠川5遺跡における火山岩塊の産状とその意義」
苫小牧市博物館館報5

北海道埋蔵文化財センター 埋蔵文化財調査報告書

- (財)北海道埋蔵文化財センター 2011 『フレベツ遺跡群 苫小牧市 美沢16遺跡(2)』
新千歳空港 I L S 用地造成工事埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報276
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2020 『苫小牧市 高丘8遺跡(1)』
苫小牧中央インター線(仮称)道路改良工事埋蔵文化財調査報告書 北埋調報360
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2020 『苫小牧市 高丘8遺跡(2)』
苫小牧中央 I C 雪氷管理施設設置工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報361
- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2020 『浦河町 向別遺跡・栄丘遺跡・昌平町遺跡・常盤町遺跡』
上向別浦河(停)線道路改築事業埋蔵文化財発掘調査報告書 北埋調報363

北海道埋蔵文化財センター刊行物

- (公財)北海道埋蔵文化財センター 2024 『調査年報36』令和5年度

報告書抄録

ふりがな	とまこまいし うすがわ7いせき							
書名	苫小牧市 有珠川7遺跡							
副書名	樽前山火山砂防工事の内有珠川遊砂地流木止工事に伴う埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ名	(公財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 (北埋調報)							
シリーズ番号	第379集							
編著者名	末光正卓・吉田裕吏洋							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 TEL 011-386-3231							
発行年月日	2024年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うすがわ 有珠川7 いせき 遺跡	ほっかいどう とまこまいし 北海道 苫小牧市 たかおか ぼん 高丘56番548	01 213	J-02-204	I-14 基準杭 (グリッド杭) 42° 39' 20.0"	141° 32' 43.4"	20230802 ～ 20231026	1,890㎡	樽前山 火山砂防工事 の内 有珠川遊砂地 流木止工事 に伴う 埋蔵文化財 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
有珠川7遺跡	集落跡	縄文時代 中期・後期・晩期	竪穴住居跡 土坑 石組炉 焼土 土器集中 掘り上げ土	土器・石器 石棒 石製品 (環状石斧 多頭石斧)				
要約	有珠川7遺跡は苫小牧川との合流地点「有珠川橋」から上流へ直線距離で約2.6kmの地点、有珠川の左岸に位置する。調査区内の地形は、東側から西側にのびる尾根で、先端部は現地標高21mの狭い台地である。主たる時期は縄文時代中期末葉～後期初頭である。遺構は竪穴住居跡3軒、土坑2基、石組炉1か所、焼土1か所、土器集中4か所、掘り上げ土1か所が見つかった。遺物は、土器は3,137点出土し、中期の天神山式、ノダップⅡ式、後期の余市式などがあり、晩期も少量ある。石器は2,292点で、定型的な器種は石鏃、石槍・ナイフ、スクレイパーで、黒曜石製が多い。礫石器は、磨製石斧、たたき石、すり石、石錘、砥石、台石がある。最多で目立つものは、使用により剥離した磨製石斧の破片と、漁労用の錘と推測する片麻岩製のレキ（自然礫）である。ほかに、石棒の柄の部分と多頭石斧（環状石斧）と呼称した円形の石製品が出土した。							

公益財団法人北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第379集

苫小牧市 有珠川7遺跡

－ 樽前山火山砂防工事の内有珠川遊砂地流木止工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 －

令和6(2024)年3月27日

編集・発行 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1
TEL 011(386)3231 FAX 011(386)3238
[URL] <http://www.domaibun.or.jp/>
[E-mail] mail@domaibun.or.jp

印 刷 中西印刷株式会社
〒007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号
TEL 011(781)7501 FAX 011(781)7516

